小金井平和の日

市制施行60周年記念誌

60th
KOGANEI CITY
60th ANNIVERSARY

小金井市

世界連邦平和都市宣言

昭和35年10月３日

戦争放棄を憲法に明記した日本は、武力国家の対立を解消して平和の礎を築き人類の福祉に貢献すべきであるとの認識にたつて、わが小金井市は国際社会を一つの法のもとに力の支配から法の秩序に切り替えて地上に永遠の平和を招来せんとする世界連邦の趣旨に賛同し永久の平和都市たることを宣言し、志を同じくする他の宣言都市と相携え盛りあがる国民の総意により日本国宣言に到達せしめ世界連邦の実現を希求する。

右宣言する。

東京都小金井市議会

小金井市市民憲章

昭和54年３月20日公示第４号

武蔵野のゆたかな緑にかこまれた小金井市は、水清い泉のむらからおこり、名勝小金井桜の地として人々に親しまれ、環境のよい文教住宅都市として発展してきました。

私たちは、この自然と伝統を生かすとともに、人々の心のふれあいをたいせつにし、真に住みよいまちづくりのために市民憲章を定めます。

私たち小金井市民は

1　平和をねがい、健康と安全を守り、生活環境の充実につとめ、あかるいまちをつくりましよう。

1　あすをになう青少年をはぐくみ、情操ゆたかな、気品あるまちをつくりましよう。

1　友愛と連帯のもとに、市民の自治をとうとび、調和ある、いきいきとしたまちをつくりましよう。

1　たがいに人権を尊重し、みんながしあわせになるように助けあい、うるおいのあるまちをつくりましよう。

1　緑ゆたかな自然と、貴重な文化財を守り、次の世代に誇りうる、美しいまちをつくりましよう。

小金井市議会

© Studio Ghibli

小金井市非核平和都市宣言

昭和57年４月１日

世界の恒久平和は、人類共通の願望である。

しかるに、核軍備拡大競争は依然として続けられ、人類が平和のうちに生存する条件を根本からおびやかす段階に至っている。また、通常兵器の軍備拡大競争も一段と激化し、世界の各地で武力紛争や戦争が絶え間なく続き、限定核戦争の脅威がせまっている。

わが国は、世界の唯一の核被爆国として、また、平和憲法の精神からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきである。

したがって、わが小金井市は、非核三原則の完全実施をねがい、あらゆる国のあらゆる核兵器に反対し、その全面廃絶と軍備縮小を求め、あわせて国際連帯のもとに、核兵器廃絶の世論を喚起するため、ここに非核平和都市となることを宣言する。

小金井市議会

小金井平和の日条例

前文

小金井に爆弾が投下されたと記録される昭和19年11月24日、そして終戦を迎えた昭和20年８月15日から長い年月が経過し、戦争体験のある方から戦争の悲惨さが語り継がれる機会が少なくなり、戦争の記憶が風化することが懸念されます。

私たち小金井市民は、小金井市市民憲章の理念に基づき、平和を願い、戦争の悲惨さを深く知らされた昭和20年３月10日の東京大空襲を始めとする戦争の記憶を風化させることなく後世に伝え、そして命の尊さについて改めて考え、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、ここに小金井平和の日を定めます。

（平和の日）

第１条　小金井平和の日は、３月10日とする。

（記念行事）

第２条　市は、小金井平和の日を中心として、平和意識の高揚を図るための記念行事を実施する。

（委任）

第３条　この条例の施行に関し必要な事項は、市長が別に定める。

付　則

この条例は、平成26年12月18日から施行する。

発刊によせて

小金井市では、昭和57年に市議会において「非核平和都市宣言」が行われ、核兵器廃絶と世界の恒久平和を願うことを目的に、「非核平和映画会」や「原爆パネル展」、市民に広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式へ参加していただく「平和行事参加の旅」などを実施してきました。

しかしながら、戦後長い年月が経つにつれ、戦争の悲惨さを語り継ぐことが難しくなり、戦争の悲惨な記憶が風化されることが懸念されております。

そこで、私たち市民皆が戦争の愚かさと平和の尊さについて考える日が必要との考えから、平成26年12月18日に「小金井平和の日条例」を制定し、戦争の悲惨さを深く知らされた昭和20年３月10日の東京大空襲にちなみ、３月10日を「小金井平和の日」と定めました。同条例ではその日を中心として、平和意識の高揚を図るための記念行事を実施することが定められています。

このたび、平成26年度に実施した「小金井平和の日制定記念式典」及び、この条例にもとづき平成27年度より毎年実施している「小金井平和の日記念行事」において発表していただいた、平和作文コンクール受賞作品、戦争体験談、被爆地・広島への派遣事業である、「平和行事参加の旅」の参加者による報告発表を、市制施行60周年記念誌としてまとめました。作文に込められた子どもたちの平和への思い、当時の様子を物語る貴重な戦争体験談、そして「平和行事参加の旅」に参加された市民の方々が被爆地・広島で感じたことが、より多くの方に伝わり、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会になることを念願いたします。

平成31年３月

小金井市長　西岡真一郎

目 次

【平和作文】 ※学年は発表当時

1　平成26年度小金井平和の日制定記念式典発表作品～世界平和のために私ができること～

・（大人の部大賞）　竹内　冨二枝（80歳代）…… 1
・（中学生の部大賞）　櫻井　美穂（東中学校２年生）…… 2
・（小学生以下の部大賞）　青木　亮太郎（小金井第四小学校４年生）…… 3
・（特別賞）　箱井　悠理（緑中学校３年生）…… 4
・特別審査員講評・講演「平和への思い」（特別審査員：黒井千次）…… 6

2　平成27年度小金井平和の日記念行事発表作品

・（中学生の部大賞）「「平和」とは何なのか」一瀬　美貴乃（東中学校２年生）…… 10
・（中学生の部優秀賞）「「平和」とは何なのだろう」木下　実咲（緑中学校２年生）…… 11
・（小学生の部大賞）
　「平和を知って続けるために」畔田　詩央（小金井第二小学校６年生）…… 13
・（小学生の部優秀賞）
　「平和な世界を築くために」藤田　咲月（緑小学校６年生）…… 14
　「せんそうは大人のケンカ」髙柳　百花（小金井第四小学校２年生）…… 15

3　平成28年度小金井平和の日記念行事発表作品

・（中学生の部大賞）「責任」武川　明日香（東京学芸大学附属小金井中学校３年生）…… 17
・（中学生の部優秀賞）「私がつなぐ平和のバトン」小林　由季（緑中学校３年生）…… 18
・（小学生の部大賞）「今の私にできること」藤山　彩乃（東京学芸大学附属小金井小学校６年生）…… 19
・（小学生の部優秀賞）「わたしのへいわ」金丸　桃子（緑小学校１年生）…… 20

4　平成29年度小金井平和の日記念行事発表作品

・（中学生の部大賞）「平和について考える」須藤　帆香（東中学校２年生）…… 21
・（中学生の部優秀賞）「幸せな生活とは何か？」山口　珠央（東京電機大学中学校２年生）…… 23
・（小学生の部大賞）「家族の記憶」原口　有葵（東小学校５年生）…… 24
・（小学生の部優秀賞）「世界の平和を守るために」大久保　藍（小金井第一小学校３年生）…… 25

5　平成30年度小金井平和の日記念行事発表作品

・（中学生の部大賞）「戦争について考える」北原　直樹（東中学校３年生）…… 26
・（中学生の部優秀賞）
　「語り継ぐ大切さ」奥野　綾音（東京学芸大学附属小金井中学校２年生）…… 28
　「七本のけやきが教えてくれたこと」五嶋　ゆり（東京学芸大学附属小金井中学校２年生）…… 29
・（小学生の部大賞）
　「ひばく者水野さんのお話を聞いて」山浦　万穂（緑小学校３年生）…… 31
・（小学生の部優秀賞）「戦争に学ぶ」森田　英路（小金井第三小学校６年生）…… 32

【戦争体験談】 ※年代は発表当時

1　平成26年度小金井平和の日制定記念式典講演

・「小金井平和の日」制定の検討経過について
（小金井市平和施策検討委員会座長　根岸茂夫）…… 35
・戦争体験談（小金井市平和施策検討委員会副座長　林茂夫）…… 37
・戦争体験談（小金井市平和施策検討委員会委員　永井孝子）…… 40
・戦争体験談（小金井市平和施策検討委員会委員　鴨下勇）…… 41

2　平成27年度小金井平和の日記念行事講演

・「昭和20年３月10日の東京大空襲で家族を亡くして」塩路　耕次（80歳代　男性）…… 43
・「国民学校１年生の見た戦時下の暮らし」千村　裕子（70歳代　女性）…… 47

3　平成28年度小金井平和の日記念行事講演

・「十四歳の特攻兵」村瀬　杜詩夫（80歳代　男性）…… 53
・「恐怖の日々を生きのびて」永井　孝子（80歳代　女性）…… 56
参考：短歌集

4　平成29年度小金井平和の日記念行事講演

・「被爆体験記」川崎　利秋（90歳代　男性）…… 62

5　平成30年度小金井平和の日記念行事講演

・「東京大空襲の傷跡」中重　喜代子（80歳代　女性）…… 65

【平和行事参加の旅参加者による感想文】 ※年代は発表当時

1　平成29年度小金井平和の日記念行事発表作品

・「平和行事参加の旅」岩田　結（30歳代　女性）…… 69
・「平和と安全」片倉　健太郎（50歳代　男性）…… 69
・「核兵器のない世界」片倉　雅子（50歳代　女性）…… 70

2　平成30年度小金井平和の日記念行事発表作品

・「平和行事参加の旅」上杉　友美（40歳代　女性）…… 71
・「広島原爆ドームを訪れて」上杉　月乃（10歳代　女性）…… 72
・「ヒロシマ再訪---53年の空白を経て」T.S.（60歳代　男性）…… 72
・「「平和行事参加の旅」に参加して」佐藤　百合子（60歳代　女性）…… 74
・「語り継ぐことの大切さ」真弓　幹子（40歳代　女性）…… 75
・「広島の旅」真弓　滉暉（９歳　男児）…… 76
・「小金井市「平和行事」に参加して」A.M.（40歳代　女性）…… 77

平和作文

1　平成26年度小金井平和の日制定記念式典発表作品
～世界平和のために私ができること～

大人の部　大賞

竹内　冨二枝（80歳代）

他人の不幸の上に、自分の幸福はあり得ないとある賢人が云った。

昭和十六年十二月八日、軍国日本滅亡のきっかけとなる太平洋戦争が始まった。当時私は小学三年生、自分が何をしていたかさえ、全く記憶にない。しかし、この日を境いにだろう家族の誰もが急に忙がしくなり、私への関心が薄れていく気がしたのは確かである。

学校生活も同様で、面倒見のよかった優しい担任も、生徒の理解の有無にかかわらず、強引に、鬼畜アメリカ、神国日本を子供達にたたき込むという変貌ぶりであった。

見えない、聞こえない、云えない教育程おそろしいものはない。だが無知蒙昧な幼ない脳は、反面、インプットは早くて確実である。私の脳細胞が、戦う勇気と、我慢する根気と、相手を負かす歓喜に躍動するまで、さほどの日数はかからなかった。

今思えば、馬鹿ばかしい竹槍訓練や、バケツリレーでの消火訓練も、云われるまま従った。

又、年毎に進む食糧難の中、米飯が芋飯に変り、副菜には、いなご、たにし、道端の雑草を口に、腹の足しにしても、少しもつらくなかった。生存する戦中派は、当時の心境を異口同音に、今もそう語る。

人生には、時として予期せぬ悲しみが突然訪れると聞いたことがあるが、まさにその時がやってきた。

昭和二十年八月十五日、旧制高女一年生だった私は、この日、いつも食糧を援助してくれる叔母の家に行き、帰宅したのは正午を過ぎていた。もらった米、芋の重さと空腹感で我が家の前で一度大きな息をつき、ふっと庭先を見たとたん、異状な場景に一瞬たじろいだ。

さほど広くもない庭先で、隣組の人達が互いに手を取り合い、抱き合い、或る人は地面を叩きながら泣きわめいている。「父ちゃんは犬死にやった」「息子を返して」「兄ちゃんは帰れるやろうか」「敵兵に殺される前に私は死ぬ」等々の叫び声をつなぎ合わせて、やっと私は、今日、全面降伏の玉音放送があったことを知った「なぜ、どうして、あんなに信じていたのに」と私の胸もどうしようもなく張り裂け、「いやぁーー」と大声で叫び、地面を叩きながら泣きに泣いた。

あの日のくやし涙を私は決して忘れない。

戦後七〇年。今マスコミからは、次々と戦争の経緯、戦時中の庶民の暮らしの実態が報道される。だが全国民の生命を返せ、人権を返せ、との叫びは、世界のどこまで届いているだろう。今なお世界のどこかで戦争や、いさかいが続いている。見えるのは、自己主義で多角的に複雑に絡まり合った糸のような世界情勢ばかり。果して人類

の平和は、本当にやってくるだろうか。

先頃某紙で、昨年十二月、あの「ローマは一日にしてならず」で有名な、イタリアの首都ローマで開催された「第十四回ノーベル平和賞受賞者世界サミット」の記事を読んだ。

要旨は、この催しには、歴代のノーベル平和賞受賞者が集い、人権・人類学的課題、を解決するための提言、議論を行うものである。今回は、講演・パネルジスカッション等、七回のセッションがあり、世界青年代表団との意見交換も行われた。

その中で、日本青年代表団の一員として参加した、足立真優さんが、フィンランドの平和活動家、マイレット・コリガン・マグワィア氏に「平和実現のため、過去から学ぶ負の遺産をどの様に未来に伝えるべきか」と質問、氏は「目先のことに一喜一憂せず、心ある先人が残した平和への思いを学び、平和と云う人類の悲願を語り伝えて欲しい」と答えた……と。記事を読み、私は、先ず、心ある世界中の青年が、平和について、研鑽し、国を越え、思想信条を越え、手をつなぎ合い、行動の輪を拡げていることに感動した。又、マグワィア氏の「平和への思いを語りつぐ活動を」とのことばに、これなら私にもできると、大きな勇気を頂いた気がした。

幸い小金井は、各種の市民活動の場を企画している。その中に「友愛活動」と云う集いがあり、私も時折参加して、友の幸せ作りを楽しく交換させて頂いている。集まる人は殆どが戦中派であり、戦時中の体験に花が咲くことも多い。環境により、体験も様々だが奥底にある平和への願いは皆同じである。

今後はこうした体験を、身近な子や孫に、又、戦争を知らない近隣の人達に、もっともっと伝えていきたい。それが私ができる世界平和への貢献だと強く感じている今日この頃である。

中学生の部　大賞

櫻井　美穂（東中学校２年生）

ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんを知っていますか。彼女はすべての子どもが教育を受けられ、男女平等となるように世界に訴えかけています。彼女は現在十七歳で私と三歳しか違わないのにもかかわらず武装勢力に立ち向かっているのです。そしてマララさんは何度か銃撃を受けました。けれど彼女は屈しません。そんな彼女を私はかっこいいなと思いました。

私たちの国日本は戦争をしないと決めたため戦争や紛争もなく平和な国です。そして私たちは日々平和に過ごしています。けれどある国の子どもは、戦争・紛争のせいで学校に通えないどころか、戦争や紛争に巻き込まれ、銃を持たされ戦争や紛争に参加させられ命を落としている子供もいます。

私が学校で新しい公式を習っているとき、ある国の子どもは銃の使い方を習っています。私が体育の授業で汗を流しているとき、ある国の子どもは戦場で汗や血、涙を流しています。

今の私は世界平和のため、教育を受けられない子どもたちのために何ができるのでしょうか。私はまだ中学生。貧しい国などへ行って支援活動をすることはできません。直接的な支援は何一つできないのが現実です。けれど間接的な支援なら、私にもできるのではないでしょうか。膨大な金額の募金はできないけれどある程度の人が募金をしてお金が集まれば学校だってたてられます。ほかにもペットボトルのふたを集め協会などに送ればワクチンなどに変えられます。ペットボトルのふたを集めるだけでどこかの国の誰かの命を救うことができます。募金などは頻繁にできることではないですがペットボトルのふたを集めることはだれでも簡単にできることです。

世界平和は、私だけで解決できるような安易な問題ではありません。世界平和のためには、まず私たちが世界を知るということが大事なのではないでしょうか。どの国でどのような戦争や紛争が起こっているのか。それは何が原因なのか。たくさんの人が世界のことを「知る」ことが世界平和の第一歩なのではないでしょうか。私はこれを機会に大使館などを訪ねてみようかなと思います。世界のことを知ればもっと視野は広がると思います。

私は平和な国日本、に生まれ戦争の恐ろしさなど何も知らず今まで生きてきました。今の私には、戦争や紛争を止めさせることもできなければ、貧しい国を豊かにすることもできません。なので将来私は貧しい国などへ行って支援活動をしたり、学校建設の募金を呼びかける活動などをしたいと思っています。世界平和と口先だけでなく一歩踏み出してみることが大切なのではないでしょうか。これが世界平和のために私ができることです。

小学生以下の部　大賞

青木　亮太郎（小金井第四小学校４年生）

ある日の夜、ぼくはとてもこわかった。なぜか、夜になるとむさし小金井のビル郡が火の海に見えてしまう。ぼくは、太平洋戦争の事を少々知り始めて来ている。それでねむる事が出来ない日もあった。戦争はしてはいけないと思う。しかし、四年間続いた戦争の事が記おくからうすれていく中、それは覚えてよい事なのか、残らない方がよいのか分からない。原ばくドームのある広島県議会でも、ぼくと同じような討論があったそうだ。その討論は原ばくドームを残すかについてだった。当時ほう落の進んでいた原ばくドームは、「戦争体験者、そしてそれ以外の人々に心のきずがついてしまう戦争遺構だ」という意見と、「わすれてはいけないあの戦争のこわさを伝える物である」という意見があった。そしてぼくは昨年、もっと戦争について知った。広島へ行ったり、たまたま、テレビでやっていたり。また八月十五日の甲子園でサイレンと共に手を合わせた。そして、八月十四日空しゅうがあった所がある事を知った。

ぼくは平和のために、このことわざを考えた。“昨日の友はずっと友”だ。世界でそうなればと思う。ぼくは、昭和二十年八月十五日のあの日の天のうへい下の声を聞いたら戦争に負けたくやしさよりも平和になった事のほうが大きいかもしれない。ぼく

も、戦後の日本のように、力強く、明るく平和にくらしたい。

未来はぼくたちが創る。平和で明るい未来を。ぼくの目にはもう見える、光りかがやく地球が。その中は、青い鳥とはとでうめつくされている。そして、平和のついた地名、名前が多くなる事を願って未来に進んでいきたい。

昨年は、戦争はやってはいけないと思うことができたり、戦争について知った。「命のにぎり飯」というお話のおぼうさんも言っていた「あらそわぬ者は必ず良い事がある」と。図書室にこんな題の本があった「ダイヤモンドよりも平和がほしい」だ。世界中の人々が平和を願っている。地球という島にかくされた宝は「平和・明るい未来」だ。ぼく達がそれをとりに、発見しに今からいく。平和とはなにか。それは、まさに地球上の“最高の宝”だ。

特別賞

箱井　悠理（緑中学校３年生）

平和って何だろう。あまりにも漠然として抽象的な言葉なので、私自身にひきよせて考えてみた。今、私は幸せである。なぜなら、頼れる家族に守られ、衣食住に心配がなく、成熟した大人に成長するための時間とカリキュラムをたっぷりと与えられ……そしてこんな平穏な日が、明日も明後日も変わらず続いてゆくと思える安心感があるからだ。このような安心感が得られる状態を、平和というのではないだろうか。つきつめて言うならば、平和とは、私たちの大切なもの、つまり生命や人権を理不尽に脅かされたり、踏みにじられたりしない状態のことなのだと思う。それは、平和の対義語が戦争であることを考えれば、容易に納得できる。

私は平和な社会で暮らしているがゆえに、その幸せを当然のものと感じてしまっているように思う。普段、平和について考えることがあまりないし、本や新聞を通して知る、世界のあちらこちらで起こっている平和とは程遠い状況を、痛ましく思っても、どこか他人事のような感覚で受けとめているのだ。そんな私にとって、昨年ノーベル平和賞を受賞したパキスタンの少女マララさんの行動は、とても衝撃的だった。私と同年代の少女が、女性や子供の権利のために、ひいては世界の平和のために命を懸けて戦っている。理不尽な現状を打破しようとする彼女の、平和への意識の高さと、深い考察に触れ、本当は平和とは、模索して手に入れ、心して守らなければいけない繊細なものなのかも知れないと思うようになった。そして、自分が世界の平和を語るには、あまりにも無知だと感じたのである。

そんな私が世界平和のためにできることは、まず知ることなのではないかと思う。平和を壊すものは何なのか。飢餓・差別・貧困・紛争・病気など負の現象の根本にある原因は何なのか。そこを知らないでは、対策もたてられない。その際一番恐れるべきことは、浅薄で偏向した知識をもって、わかっている気になってしまうことである。他人からの受け売りや、確信のない情報に惑わされずに、物事を深く、正しく理解するためには、たくさんのことを学ぶしかない。歴史であったり、自然科学で

あったり、政治経済であったり、宗教であったり、とにかく知識という力を蓄えることが大切なのだと思う。このことは、マララさんが、より良い社会を目指すために、誰もが教育を受けることができる権利を求めたことにも重なる。もう一つ大切なことは、自分とは異質なものを認め、受容する包容力を身につけることだ。世界平和を脅かす最大の要因は、国家や民族間の対立・紛争にあると思う。相手の背景に対する知識をたよりに、わが身に置きかえる想像力と、そこから生まれる共感力をもってすれば、歩み寄り、共存する道が開かれるはずなのだから。そして、これらのことは、まずは自由に学び、考えを持ち、意見をすることが可能な立場にある私たちこそが、始めなくてはならないと思うのだ。

世界平和という言葉はあまりにも壮大すぎて、現実味がなく、夢の話と一笑に付されることもあるだろう。平和のためと謳って、軍事費用が増えることへの矛盾に打ちのめされたり、世界中にある諸問題の平和的解決が、遅々として進まない現状に失望もするだろう。でも、あきらめずに声を上げ続けることが大切だと思う。戦争のない世界。貧困のない世界。差別のない世界。すぐには無理でも、多くの人が同じ夢を語れば、少しずつ変れる気がする。作家である魯迅が、「故郷」というお話の中で、「希望」とは地上の道のようなものだと語っている。「もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」と。皆が求めることで、世界平和という人類の大きな希望の道は、開かれてゆくのではないだろうか。

「小金井平和の日」制定記念式典（平成27年３月７日）

◈ 特別審査員講評・講演「平和への思い」

特別審査員　黒井　千次

今、作者が朗読するのをお聞きになったのが、今回の特別賞の作文です。他の作品もそれぞれに面白かったのですが、その中でも、この文章はとりわけ骨格がはっきりして、論理が明確で、そして次から次へと論旨を展開していく力が強く、読んでいてうなずきながらおしまいまで読み通すと、その後にまとまった考えというものが、しっかりと植えつけられるといった印象を受けました。力のある文章の構成といいましょうか、論理の展開といいましょうか、それは他のどの作品よりもはっきりとしていて、特に優れているという感じがいたしました。そこでこの箱井さんの作文を特別賞に選ぶことにした次第です。今、作者は中学校の三年生、ということは間もなく卒業ですか。中学校まで生きてきたすべてがここに入っていて、それを引っさげて高校に進むということになると思いますので、その力量とそれまでのたくわえを存分に発揮して、一層充実した高校生活を送り、その中で平和について更に突っ込んで考えて下さるといいと思います。

小金井の町というもの、あるいは平和ということについて日ごろ考えている一端を、ここでお話いたしたいと思います。私は、昭和七年一九三二年の生まれですから、日本の敗戦が、一九四五年で、旧制中学の一年生の夏でした。その前に新宿に近い大久保に長いこと住んでおりまして、大久保から、空襲の戦禍が迫ってくるといけないからということで、少しでも郊外へという形で、住んでいた知人が地方へ疎開した後の空いた家に入るということになり、中野に引っ越しました。中野でしばらくしていたら、そこも空襲にやられそうなので中野から更に小金井に引っ越しました。中野から小金井に引っ越す前に、一九四四年敗戦の前年の夏八月から六ヶ月間、六年生ですから卒業までの期間、当時通っていた公立小学校が学校ごと長野県に集団疎開することになりました。集団疎開というのは、縁故を頼って東京から爆撃が少ない土地に移り、戦禍を避けるという疎開が個人的にできない子どもたちが残っているわけで、そういう子どもたちを引き連れて、学校ごと、学年ごと、都会ではないより安全な場所へ、爆撃などがないようなところへ移そうという計画が実行されたのです。それで、私が通っていた学校は豊島区の国民学校、小学校が国民学校とそのころは呼ばれていましたけれども、豊島区の国民学校から長野県にその学校は疎開することになりました。たしか三年生以上の生徒が学校ごとに行き先を決められました。そのころの住所でいうと長野県下高井郡平隠村上林、山之内郷上林温泉という志賀高原の下のほうの土地に移りまして、そこで翌年の三月に卒業するまでの期間、集団生活を送らなければいけなくなりました。林間学校とかそういう短い期間の学校の集団生活は経験したことがあっても、何か月も続いて学校の一クラスがまとまったまま移ったことはない。四十人とか五十人とかが、一つの部屋に十人くらいずつまとまり、一つの学年が四つか五つの班に分かれて、男組、女組があって、宿るところが宿屋とかホテル、お寺などに違っていたりする集団生活、それは翌年の三月まで続きました。その間の生活の中で、一番辛かったのは寒さでもなければ空腹でもなく、本当に辛かった

のはあの分かれた班の中、部屋の中での子どもたち同士の集団生活におけるイジメでした。どうしてああいうことが起こるのかわからない。とにかくある種の人間関係が成立する。それで一つの部屋に十人足らずの子どもが入っていて、その中で支配と被支配といった関係が生まれる。どの部屋でも同じようなことが起こっていたようです。これは一種の自然なのかもしれないけれども、強い方と弱い方に分かれて、強いやつがいばって、弱い方はなんとなくその子分になるといった形の一種のヒエラルキーといいましょうか、そういう力の関係というのが生まれました。そこで、いじめというか弱いやつというかいじめられやすいというやつがいて、それに対して、いじめる側というか強いやつというのが出てきまして、なんとなく弱い奴は仲間はずれにされていく。仲間はずれにされたほうは、その仲間はずれの処置をといてもらうために一生懸命強い奴のご機嫌を伺うというふうになる。なにやら隠微な関係というものが小学校六年生の男の子の間に、女の子は分かりませんが、男の子の間に生まれていました。普通は子どもは学校で嫌なことがあっても、帰ってくればうちが、家庭がある。このごろは非常に複雑というか、家庭も難しくなっていて、帰ってくれば安心と簡単にいえないケースもあるようですが、そのころのことを言えば、とにかく家庭がある。そこで集団生活をしていたとしても、たとえば夕方になればうちに帰れるとか、夜になれば家族と一緒に寝られるとかいうことがあればいいのですが、集団疎開という生活はまったく二十四時間同じやつと同じように顔を合わせて、朝起きてから夜寝るまで場合によっては夜寝てからも面をつき合わせるというふうな感じになる。それはとても辛いことでした。それがあったために、私は、小学校の同級会というのは行きたいとは思わない。一度だけ、どうしても行かなければならなくて顔を出したことはありますけれども、集団疎開のころのことが思い出されてしまって、何か暗い集団生活の記憶というのがやはりよみがえってくる。後から考えてみると、幸いにして空襲で近くまで焼けたけれど、自分のうちは敗戦まで焼けなかった。だから食べるものがなくても、寒くても風呂に入れなくても、そんなことはかまわない。とにかく家に帰りたいということは、みんなが考え、みんなが感じていたことです。それが自分にとっての、十二歳ですかね。それが結局自分にとっての一番切実な戦争体験だったというふうに後になって思います。疎開から帰ってきたのは六年生でしたから、六年生というのは卒業する時期に当ります。卒業すると今度は東京に帰って中学校に進む。中学校は、当時授業はろくにありません。一年上級生からは学徒動員で工場で働いていましたし、われわれは工場に行ってもあまり役に立たないと思われたのか、工場には行かなかった。飛行場の草むしりとか、強制疎開の家屋の引き倒しとかですね。そういうところに動員されて作業するうちに敗戦を迎える。敗戦を迎えたのは小金井に来てからですけれども長野の疎開先から東京へ帰ってくる日が三月九日の夜だった。当時は、まだ信越線は碓氷峠がアプト式というかっちんかっちんと歯車をかみ合わせながら上ったおりていったりするような列車が走っていました。夜行列車にのって長野から上野に帰ってくる。九日の夜、長野から夜行列車に乗って十日の朝に東京に着くという予定だったと思います。六年生の子どもたちの間で東京カレンダーというものができました。五年生以下だとそうはいかないのですけれど、六年生は三月に卒業することがはっきりしていましたから、卒業になれば東京に帰ってこの

場から離れるということは決められていた。だから疎開地での最終日といいましょうか、疎開地から引き上げる日というものを設定して、それまでに後何日あるかと、だんだん残りの日数が減っていくのを楽しみにしている。一日終わると×をつけるというカレンダーができるようになって、そのカレンダーがすべて×になる日をみんな心待ちにしていた。その最終日が結局三月九日の夜ということになりました。それで、山の上から降りてきて長野電鉄の湯田中という駅に出る。湯田中から電車で長野に出て、長野から何時ごろ乗ったのかはっきり覚えていませんが、夜の九時頃だったでしょうか、夜行列車に乗って東京に帰ってきました。東京に帰るのですが、アプト式の列車に乗って碓氷峠を下りてくると、東の方の空が赤くなっている。はじめは日の出じゃないかと言っていたのですが、汽車が走るにしたがってあれはそんなものじゃない、もっともっとでかい火だ。昔、群馬県にいたことがある先生が関東大震災のときでもあれほどに赤くはならなかったといわれ、もしかしたら帰れなくなるかもしれない。東京が空襲なのかもしれない。ということを心配しながら、上野駅にたどり着いたのが朝の八時頃ではなかったかと思います。なんとか列車は上野の駅に着きました。そこでプラットホームに出ると周りがパーッともやみたいに白くなっていて焦げ臭いにおいがあたりに充満しているんですね。プラットホームがそんなふうだということは、駅の外の空気がそういうことになる。これは何だろうと考えながら、でも山手線が走っていたので上野から何とか中野まで帰ってくることができました。ところがあとから知ったのですが、三月九日の深夜というのは十日の未明ですが、東京の大空襲があって、それが下町のほうを中心に爆撃による火災が広がり、一晩に十万人が死んだといわれていますが、その当日だったのですね。これもあとから聞いたのですが、そんなふうにして東京カレンダーを作るような気持ちで一生懸命帰る日を楽しみにして待っていた子どもが、六年生がいざ東京に帰ってみたらうちが無くなっている。親もいなくなっている。兄弟がどこに行っているかもわからないというふうなことになって東京に帰ってきた子どもがいたわけです。本当に、自分が帰りたい帰りたいと思いながら帰ってきて、帰ることができたということが片方にあるために、余計にその辛さがどんなに深かっただろうという気持ちが大変に強く迫ってきたことを覚えています。先日、読売新聞の地方版で戦後七十年、三月十日の大空襲の特集というのを何回かやっておりまして、それを見ていたら下町のほうのある国民学校のすごく生徒がたくさんいっぺんに写っている集合写真があって、それが三月十日の空襲の前日か九日に卒業生の全員を写したものらしい。それで、十日の空襲にあうわけです。そうしたら集まって写真に写っている子どもたちの約半数はその日の夜の空襲で亡くなったと書かれているのを読んで愕然としました。実際にやっぱりそういうことであったのだと改めて思います。空襲はそれだけではなくて、機銃掃射もあったでしょうし、いろいろ怖いことがあったのでしょうけれど、そういうことがあったのをあとから知ってますます気がめいってくる。それが三月の十日という日でした。三月十日が来るとなんとなく気が重くなるというふうな感じがありましたが、十日が過ぎたと思ったら今度は三月の十一日に東日本の大震災が起こりました。三月のこのあたりというのは何だかわからないけれども。非常に緊迫しているというか緊張を強いられるというか、そういう時期だなということを改めて感じました。戦争は遠くなった

し、大震災の復興もいろいろ問題はあるにせよ少しずつ進んでいる。ただし、事故による放射能の問題はそんな簡単に解決するとは思えません。これからは、われわれの暮らしというのは、今、特別賞の作文を読んでもらいましたが、そういうことを考える人が増えていくことによって、だんだんに平和というものが従来に増して切実な形で求められるというふうになっていくのだと思います。その切実さというもの、つまり平和というものは少し前の平和とは違うのではないかというふうに思います。東日本大震災前の平和と震災後の平和というものはちょっと違うように思います。なにが違うかというと、それは原発の事故が起きたからであって、つまり、放射性物質による被害というものはいろいろな格好でいろいろなところに起こっている。まだはっきりしないものもありますけれども。放射性元素の原子の半減期は十年とか百年とかいうのではなくて、もっと膨大な遠い先の話になっていくらしい。そういう大変な先の話になっているようなものを燃料とする原子力発電というものが有るとこれは大問題です。使用済みの核燃料というものをどう処理すればよいかわからぬままその使用だけが進んでいる。平和そのものが危険な放射能に脅かされている。なんでもないような平穏な日々というそのものの中で日々蓄え続けられていく使用済の核燃料というものが有る以上は、それが平和に影響がないということはありえないわけで、そういうものまでも含めた平和というものをこれからは考えていかなければならない。ただ平和、平和ということを念じていてもだめなのであって、それでは、自分に何ができるだろうかということが今回の「世界平和のために私ができること」という作文のタイトルになっているのだと思います。ただ平和について論じたり、平和について考えたりというのではなくて、世界平和のために自分が今できることは何かという課題は、非常に大事なことを伝えていると思います。世界平和のために、つまり平和ではないところで苦しんでいる人たちのことまでも含めて考えていく、そのために自分が何ができるのかということを自分の足元をみつめつつ考えていく。それが非常に大事なことではないか。戦争というものは、さあ戦争が始まるぞとか、戦争を始める体制になりつつあるとかというのは、事実としてそういうことが有る場合ももちろんあるでしょうけれども、単にそういうものではない。それだけではなくて、もっと非常に日常的な自分自身の暮らしの中で平和につながるもの、その暮らしの中で戦争を遠ざけていくもの、そういうものを見出して見分けていくことが大切なのではないかということを、この作文を読みながら改めて感じました。そういうわけで、小金井とのことに関しては何十年間ここでお世話になって暮らしてきまして昔とはずいぶんいろんなことが変わりました。人口が十万人を超えた。前はどうしても十万人を越えなくて九万何千、九万何千といった時期もありましたが、それが今や十一万人、こんなに沢山のマンションができて、立派な民力といいましょうか、住民の力というものがいろいろな形で表に出てくるようになってきている。そういうところで、平和のために自分たちが出来ることをどうやって探し出すか、それに対してどうアプローチし、接近していくかということを考えることが、とても大事なのではないかと思っております。まとまりの悪い話ではございますが、感想を述べさせていただきました。ありがとうございました。

2　平成27年度小金井平和の日記念行事発表作品

中学生の部　大賞

一瀬　美貴乃（東中学校２年生）

「「平和」とは何なのか」

「平和」とは何なのか。辞書で引くと「戦いや争いがなくおだやかな状態」「心配やもめごとがなく、おだやかなこと」などと説明されている。「平和」でいること「平和」であることは本で読んだり聞いたりしたことがある。皆が皆こう思うのは「平和」がものごとの理想の姿だからではないかと私は考えた。「平和」でいることは大切なこと、これは私も今まで深く考えずに常識だと思っていた。けれど改めて「平和」という言葉を前にして平和とはそもそもどういうことなのか少し疑問をもった。

私なりの解釈では「平和」は皆が気持ちを尊重し合い、おたがいを大事にすることで生まれるものではないかと考えられた。

具体的にどういうことなのか例を挙げて説明していきたい。おたがいを大事にするということはすなわち認めあうことである。例えば、友達と同じ色鉛筆を使っていておたがい黄色を使いたかったらゆずり合う、という小さなことから電車の中でお年寄りの方に席をゆずることや、肌の色が異なっても国籍が異なっても差別しないといった大きなことまで全てのことに共通して、おたがいに認めて謙虚になれれば気持ち良い。また、相手を受け入れなかったら険悪な関係にもなりかねない。少し大げさだと感じる人もいるかもしれない。けれど、色鉛筆一本のゆずり合いという行為を世界中の人がしたら戦争はなくなると思う。これが世界の「平和」につながる、第一歩となるのではないだろうか。

また、「平和」を生むためには何をすれば良いのか。「平和」の対義語ともいえる「戦争」について考えてみる。反対のことは、光のあて方次第では見えてくるものが変わる、つまり「平和」を生むための手がかりがあるかもしれないと思ったからである。戦争とは何か。これも辞書で引くと「いくさ。特に国家間で互いに自国の意志を相手国に強制するために武力を用いて争うこと」「軍隊と軍隊が兵器を用いて争うこと」などと説明されている。簡単にいうと平和は争いのないことであり、戦争は争うことである。戦争を平和という状態に変えるためには、戦っている者同士がおたがいを理解することが必要であると思う。しかし、戦争をする程関係が悪い相手のことを理解するのはそう簡単にできることではないというのが現実だ。ならば、もともとそんな関係になる前に互いに理解できると良いのではないか。日本もその他の国も少しずつでも周りの国との理解を、さらに深められるとより「平和」という状態に、姿に近づけると思うのだ。

「平和」の重要性について、これを伝えている一人の女性がいる。ノーベル平和賞も史上最年少で受賞している、マララ・ユスフザイさんだ。彼女は、女性の差別問題

に正面から向き合い銃撃を受けながらも訴え続けているという偉大な人だ。性別で分けることも争いつまり戦争が起こる原因にもなる。また、差別されて苦しんでいる人がいるのではとても「平和」と言える状況ではない。男女共に、「平和」と呼べる日が来る事を願って今まさにこの瞬間も活動している彼女を尊敬して私も願いたい。彼女は国をこえて世界中の人々に男尊女卑の考え方をなくすことを発信している。これに世界中の人が注目しているのだから本当にすごいと思う。

さて、今私達がこの「平和」が大切であるということを周りにより深く理解してもらうには何をすれば良いのだろうか。今できること、私が実践していきたいと思うことは二つある。一つは、自分が思っている「平和」に対する気持ちを周りの人に伝えることだ。まずは、一番身近な人である家族から始めていきたい。話せば、相手も何か考えを話してくれるかもしれない。そこで、自身の考え方と比較することもできる。さらに、相手が考えてくれるということはその人が平和について少しでも考えてくれたということなのでこれが連鎖してゆけば、気付いたら周りの人が皆一度は「平和」と向き合ったことがあるというようになる日が来るかもしれないのである。もう一つは、「平和」について調べることだ。周りに発信してゆくのなら、自分の知識は多い方が良いと思う。だから、たくさん本を読んだり、インターネットで検索したりして多くの知識を身に付けておきたい。

「平和」は世界共通でものごとの理想の姿だ。世界の中の日本の中のたった一人の国民である私だが、今自分にできることをして身のまわりから少しずつ「平和」といえる状態であるものごとを増やしていきたいと思う。

中学生の部　優秀賞

木下　実咲（緑中学校２年生）

「「平和」とは何なのだろう」

私たちは「平和」という言葉をよく口にする。戦争などの争い事だけでなく人間関係において使ったり、様々な場面でこの「平和」という言葉を使っている。

「平和」という言葉は、会話や文のニュアンスで多少意味が変わってくる。しかし、「平和」のまわりの文章を消し、この単語のみになったとき、どんな意味を持つのだろうか。そして、この単語を聞いたとき、何を思い浮かべるのだろうか。大抵の人は、「戦争」を思い浮かべると思う。私もその一人である。

以前、私は、社会の授業で広島の原子爆弾についてやったことがある。そのとき、一人一人意見を述べる場があった。ほとんどの人が「戦争は悪いことだし、これからも平和でいるために、後世に伝えていくべきだ」と言った。しかし、物事を実際に体験した人たちが伝えたい「平和」と私たちが学習をしたことで感じた「平和」が異なっているかもしれない。両者も「戦争」がない世界というおおまかな意味は同じだが、深く探っていったときに「恐怖から逃れる」ものなのか「幸せに暮らす」ものなのかで全然違ってくる。この二つを比べてみる。

まず、「恐怖から逃れる」こと。恐怖にもたくさんの意味がある。戦争で街が焼かれて人が死んでいくことへの恐怖、親や先生から怒られるのではないかと恐れること、自分がいつ危険にさらされるか分からない恐怖、ジェットコースターやおばけ屋敷で感じるスリリングな恐怖。どの恐怖にしても、恐怖状態から抜けだせば「平和」につながるのだ。

「幸せな暮らし」。一人一人が感じる幸せは実に十人十色であるが、この幸せという何事もなく安らかな状態が「平和」に繋がる。

私たちが考えている戦争についての平和は、「幸せに暮らす」といより、自分や大切な人の命が消えたりする、そして戦争という未知の世界への恐ろしさから逃れるという意味合いの方が強い。だが、戦争を体験した人からすれば、恐怖というより、「家族全員が一つ屋根の下で暮らせる」ことが何よりの幸せで、それが「平和」への第一歩なのではないかと考えていると私は思う。実際に体験したかしてないかで異なる「平和」になるのだ。

2011年３月11日。東日本大震災だ。それまで地震は何度か体験してきて、起震車で震度７を体験したこともあった。けれども、あの日の恐怖はどんなに頑張っても、二度と体験することが出来ない。家族と会えるか分からない不安と、自分の命に対する不安が一気に押し寄せてくるのだ。私は助かったけれど、津波で大切な家族を亡くした人はたくさんいる。その中でも、避難所で少ない食料や水、ガスなどを駆使して生活出来るだけで幸せだと、また、家族でいられる時間が一番幸せな時間だと、東北で被害にあった友人が言っていた。私が学校の授業で読んだ、東北で被害にあった人の作文にもそう書いてあった。

体験した人にしか分からない、単なる「恐怖から逃れる」でない「幸せに暮らす」という「平和」を未体験の人に分かってもらえれば、みんなが笑顔で暮らせる社会につながっていくのだと思う。

戦争中は、兵に行ったり、疎開をしたりと家族全員が一つ屋根の下で生活をすることはほぼ不可能である。兵に行ったら、生きて帰れるかも分からない。だからこそ、現在の社会で兵に行くことはないが、いつ家族が、自分が、危険にさらされるかは分からないから家族全員でいられる幸せな時間を、１分１秒たりとも無駄にしてはならない。私は今、家族全員で一つ屋根の下に暮らしている。つまり、私は幸せである。この「幸せ」を世界中の人が知ることが出来たら、紛争などの争いもなくなってくるのではないか。たとえ、家族を失っていたとしても、自分が生きていることに誇りを感じられると思う。その「幸せ」や、「誇り」一つ一つが「平和」につながる。

まずは、一人一人が「幸せ」になれるようにならなくては本当の「平和」になることは不可能なのではないか。

小学生の部　大賞

畔田　詩央（小金井第二小学校６年生）

「平和を知って続けるために」

学校へ行って様々な勉強をすること、友達と遊ぶこと。安心して住める家があり、食事をするということ。そして、天気のいい日に見上げる青い空には白い雲が浮かんでいること。このような、今の私たちにとって当たり前の生活が平和なのだと思う。

私は、「平和」について思うこと、考えることを作文にしようとすると、悩んでしまった。そこで、「平和」の意味を、国語辞典で調べてみた。すると、「戦争や争いがなく、世の中が穏やかにおさまっていること。」という意味だということが分かった。そして、対義語は「戦争」。その「戦争」が起きると、どのようなことがあるのだろうかと考えてみた。すると、だんだん「平和」が見えてきたのだ。

約70年前は、今は平和な日本も大きな戦争に参加していた。そのころの人々は、いつ、だれが命を落としてもおかしくないような日々を過ごしていたのだ。

現在の私たちが見るきれいな空は、写真に納めたり、絵に描いたりして残す人も多いと思う。しかし、戦争をすると、爆弾が降ってくる恐ろしい空へと変わってしまうのだ。現在私たちが見ている空を、戦争中の人々はきっと、怖い、つらいといった気持ちで見ていたのだろう。同じ「空」を、同じ「人間」という生き物が見ているということに変わりはないのに、産まれた時間が異なるだけで、全く違う見方をする。このようなことがあってはならないと思う。

人間が始めた戦争で、人間が作った爆弾を使うことによって、怖い、恐ろしい思いをするのは、人間だけではない。今では、私たちが楽しむために訪れる動物園だが、戦争中の動物園にいた動物たちがどんどん殺されていったのだ。何故、そのようなことが行われたのだろうか。それは、爆弾によって動物園の檻が壊れて、自由に動くことができるようになった猛獣たちが、人間を襲うかもしれなかったからだ。餌に毒を混ぜたり、餌をあたえなかったりして、人間の勝手な都合により殺されていった。

この事実がかかれた絵本がある。それは、『かわいそうなぞう』だ。戦争中の上野動物園にいた三頭のぞうの話である。殺されてしまう猛獣も、それを実行しなければいけない人間もつらい思いをした。『かわいそうなぞう』を読んでこの事実を知ったら、「今が平和なのだ」と思うようになった。

そして、この「平和」を守っていくために私たちに出来ること、していかなくてはならないことは、どのようなことだろうかと考えてみた。

まずは、戦争をしていたという歴史をきちんと知ることが大切だと思う。事実を知ることによって、今が平和であると感じられるからだ。

少し前の新聞に、戦争中の遺骨、遺留品収集のボランティア活動をしている大学生たちの記事があった。それは、太平洋戦争中の日本で唯一の激しい地上戦が繰り広げられた沖縄で見つかった。旧日本兵のものと思われる印鑑が、様々な経緯を経て、北海道の遺族のもとへ返されたというものだった。そして、このような活動につい

て、くわしく調べてみた。

戦後70年たった今でも、戦争によって命を落とした100万人以上もの遺骨が現地に残されたままになっている。その遺骨や遺留品収集のボランティアとして、学生などの若い世代が活動しているのである。参加した学生たちは、遺骨や遺留品に実際に触れることで、亡くなった人に思いをはせ、戦争を『自分自身のこと』や『家族のこと』などといった、身近なことに置き換えて考えるようになったという。「遺骨収集は、戦争を伝えていく一つの手段だと思う。」と話す大学生もいたそうだ。

私は、４年生のときに、家族旅行で沖縄を訪れ、海で泳いだり、日の出を見たり、水族館へ行ったりと楽しんだ。平和記念公園や、ひめゆり学徒隊の資料館などの戦争に関係する場所にも行ったが、沖縄で過した時間の多くは楽しみの時間だった。しかし、ボランティアの活動をした学生たちは、楽しみのためではない、別の目的をもって行っている。私は、それがとてもすごいことであると思った。

今の平和をずっと続けていくためには、遺骨、遺留品収集の活動や平和を守るための活動について知ること、そして、戦争をしていたという歴史を深く知るということが大切だと思う。また、その知ったことを後世に伝えていくことが、私たちの使命であると感じた。

小学生の部　優秀賞

藤田　咲月（緑小学校６年生）

「平和な世界を築くために」

緑小学校のとなりにある浴恩館公園。その中にある文化財センターで「戦時下の生活」という企画展が行われていました。戦争中の様子を紹介する写真や絵、千人針や出征旗、子供たちが使っていた教科書、新聞や雑誌などが展示されていました。また、小金井市出身の特攻隊員で、硫黄島に出撃して戦死した鈴木辰蔵さんの遺品もありました。

鈴木辰蔵さんは、昭和20年２月21日19才の時に、800キロの爆弾を積み込んだ爆撃機に乗り込み、硫黄島沖でアメリカの輸送艦に体当たりして亡くなりました。出撃の３日前に書いた遺書が展示ケースの中にありました。「人情の常として、万感胸に迫るものがあります。が、我々は総てを忘れて、敵艦目がけて殺到するのみ」と書かれていました。私には難しい文章でしたが、特攻隊員としての複雑な気持ちが鈴木さんの心の中に入り混じっていて、そんな不安な気持ちを必死におさえながら、出撃したのではないかと思いました。鈴木さんの必死の覚悟と、家族の祈るような思いが、一つ一つの遺品に残されていて、とても悲しい気持ちになりました。

鈴木さんに関するもの以外で最も目に留まったのは、「防毒面」の模型でした。「防毒面」とは、ガスマスクのことです。このようなものを一人一つずつ準備していたことに、私はとてもおどろきました。敵が毒ガス兵器を使うことを想定して、国民に準備するように呼びかけられていたということです。販売されているしっかりした作り

の「防毒面」もありましたが、全ての人が買えるわけではなかったため、紙・セロハン・炭・脱脂綿などを使って、それぞれ作るように指導されていました。教科書や雑誌に、作り方がのっていて、子供も自分で作ったようです。紙で頭全体が入るような箱を作り、目の部分にはセロハンを貼り、口の部分には脱脂綿と炭を入れた小さな箱を取り付けるというものでした。使用する時には、針金で作った鼻ばさみで鼻をつまみ、口でゆっくりと呼吸するのだそうです。このようなマスクで、毒ガス兵器に対応できるとはとても思えず、少しあきれてしまいました。けれども、当時の人々は、本土決戦に備えて、必死の思いで作っていたのでしょう。一方でこれを準備するように指示していた指導者たちは、どう考えていたのでしょうか。このようなもので対応できると信じていたのでしょうか。本当に神風が吹くと信じていたのでしょうか。

知らないことは恐ろしいことだと思いました。そして、まわりに流されて自由がないのは、とても怖いことだと思いました。戦争中は反対意見を言うことが難しく、人々の心までおかしくなっていたのだと思います。

情報が制限されていた戦争中とちがい、今は情報があふれています。けれども、たくさんの情報の中から、正確な事実をとらえるのは難しいことかもしれません。伝える人、受けとる人によって、情報の意味がびみょうに変わることがあるからです。同じことに対して、ちがう感想を持つ人がいるのは、よくあることです。事実をどうとらえるか、それをどう判断するか、見極めるのが難しい場面は、たくさんあると思います。

学校の社会の授業で歴史を勉強し、国語の授業で戦争と平和について考えて、今の生活はこれまでの歴史が積み重なってできているということが分かりました。そして、歴史から学べることがたくさんあると思いました。戦争でつらい経験をした人々の思いを受けつぎ、どうしたら平和な世の中にしていけるのか考えて実行していくことが、私たちの役目だと思います。

私の目標は、色々な情報を集めて物事を総合的に判断できる力を身に付けること、そして、思いやりと勇気を持って行動することです。戦争のためにたくさんのお金と時間を使うのではなく、人々が笑顔で暮らせる平和な世の中にしていくために、弱い立場の人々にも寄りそいながら、未来に向けて進んでいきたいと思います。

小学生の部　優秀賞

髙柳　百花（小金井第四小学校２年生）

「せんそうは大人のケンカ」

「いきができなくてくるしいよ」
「こわいよ」
「だれかたすけて」
「火があついよ」
「おなかがすいたよ」

「こんなところから早くにげたい」
「みんなだいじょうぶかな」
　せんそうを体けんした子どもたちはきっとこんなことを思ったのだと思います。
　今の日本はへいわだけれど、むかしの日本ではせんそうがありました。今でもせかいではせんそうをしている国がいっぱいあります。せんそうをしているのは同じ人間なのに、どうして人が死んでしまうようなことをするのか。
　せんそうは、子どもからみたら大人のケンカみたいです。大人は子どもたちがケンカをしたら「早く仲なおりをしなさい」とか「ケンカはしちゃいけません」とかいっているのにどうして大人はやっているのか。何のためにするのか。せんそうは子どもやお年よりや体のふじゆうな人をこまらせるし、何もいいことがありません。
　わたしはせんそうをけいけんしたことがないけれど、本をよんだり、テレビでみたり、人にきいたりして、少しだけせんそうのことが分かりました。
　せんそうで一ばんかなしむのは子どもです。子どもには、しょうらいのゆめがあります。大人のかってな考えで、ゆめがこわされてしまいます。ひどいときには、じゅうやばくだんでころされてしまいます。そんなことはしてはいけません。
　わたしのおじはアメリカ人です。むかしはせんそうをけいけんしたぐんじんでした。おじは「せんそうをするのもりゆうがある。」といっていましたが、わたしはどんなりゆうがあってもぜったいにせんそうはしてはいけないと思います。
　むかし日本でも、せんそうがありました。東京、こうべ、ひろしま、ながさき。ほかにもいろいろなところでせんそうのひがいがありました。とくに、ひろしまとながさきではげんしりょくばくだんというものがおとされました。このばくだんはふつうのばくだんとちがって、たてものをこわしたり、かさいがおきるだけではなく、生きのこった人のけんこうまでこわしてしまいます。その人だけではなく子どもやまごのときまでけんこうひがいがつづきます。
　またせんそう中は、ごはんもたくさん食べられません。おこめ、パン、ぎゅうにゅう、ほかにもあたりまえのように食べているものが食べられなくなります。だからすききらいをしないで、食べるものがあるだけでかんしゃしなくてはいけません。今でも食べるものがなくてこまっている人がたくさんいます。その人たちのことを考えて、かんしゃをしながら食べなくてはいけません。
　せんそうを体けんした子どもたちへ
　せんそうをみるのはつらかったよね。けれどそこからにげるわけにもいかないよね。本当にこわかったし、いやだったよね。だから、あなたたちが大人になったときには、せんそうをしないへいわなせかいになるといいね。そのきもちをわすれないでね。せかいじゅうのこどもたちが思いつづければ、ぜったいにせんそうはなくなるよ。
　せかいじゅうのせんそうをしている人たちへ
　何でせんそうをするのですか。何のためにせんそうをするのですか。すべての人にやさしさがあふれていたらせんそうになりません。ゆめをもっている子どもたちまでまきこむのはひどいです。子どもはだれもせんそうなんてしてほしくないです。子どもたちのゆめをこわさないでください。へいわなよのなかをかえしてください。

おねがいします。せんそうはもうおわりにしてください。
おねがいします。もう人をきずつけないでください。
おねがいします。もう人をころさないでください。
おねがいします。子どもたちのゆめをこわさないでください。
せかいじゅうでせんそうがなくなって、へいわになりますように。

3　平成28年度小金井平和の日記念行事発表作品

中学生の部　大賞

武川　明日香（東京学芸大学附属小金井中学校３年生）

「責任」

昨年の夏、市内のデイサービスでご高齢の方々から戦時中の体験談を聞かせていただく機会があった。「八ヶ岳のふもとから見る東京の空が真っ赤だった。」「毎晩、空襲があって眠れなかった。」「目の前で朝鮮の人が殺されそうになっていた。」など、伺った話はどれも、今の私には想像することもできないくらい悲惨で恐ろしいものだった。そのとき私はこの話を忘れないように伝えていこうと思った。

しかし後日、そのときに話をして下さった方のうち、一人の方が、すっかり気分がふさいで落ち込まれてしまったと聞いた。戦時中のことをいろいろと思い出してしまったからだそうだ。私は、このことを知ったとき、「あぁ、なんて悪いことをしてしまったのだろう。聞いて悪かったな。」と、とっさに思った。聞かなければよかったと思い、母に相談してみた。すると「そうだね。だからこそ、話を聞かせていただいたことに感謝をして、聞いたことに責任を持つことが、大切なのでは？」とアドバイスをしてくれた。

「責任」、この言葉が私の胸に深く突き刺さった。私はなんて重い「責任」を背負ってしまったのだろう。私は、この「責任」を果たすために何をしたらいいのか、私には何ができるのか、一生懸命に考えた。

中学生である私にできることは限られている。伝えるといっても、実際に私がどれだけの人に伝えることができるだろう。

私にできること、それはやはり伺ったお話を忘れないでいることなのではないか。それに加えて、平和について考え続けることではないか。

今、日本は平和だが、世界では争いが絶えず、戦争のニュースを度々耳にする。正直なところ、私には難しくてよく分からないことも多い。しかし分からないからといって、それらを他人事としてとらえず、考え、分からないことは周りの大人に質問するなどして、少しでも理解できるように努めていきたい。

このように、世の中で起こっていることに無関心でなく、意識を持つことが大切だと思う。そうすれば、私が大人になったときに、伺った貴重な話を子供たちに忘れず

に伝えることができ、平和を守っていくための正しい選択ができるのではないだろうか。こうやって、平和を守っていく努力をすることで「責任」を果たすことができるのかもしれない。

中学生の部　優秀賞

小林　由季（緑中学校３年生）

「私がつなぐ平和のバトン」

「戦争は、決して忘れてはいけないと思います。」

戦争について、皆は必ずこう答える。しかし、戦争を良く知らない私たちが、簡単にこう言っていいのだろうか。

昨年の春、私をとてもかわいがってくれた祖父が亡くなった。昭和二年生まれ、八十九年の生涯だった。ちょうど、小学生から高校生の頃に戦争を体験した。兄が中国で戦死、弟が学徒勤労奉仕中に亡くなり、家族二人を失くしている。祖父は、いつも八月にはあまりテレビを見なかった。戦争のことを伝える番組が多く、思い出したくないと言っていた。私が何気なくテレビをつけると、ニュースでは、

「あの日を忘れない」

「あの日から七十年」

と、たくさんの言葉が流れてくる。それを祖父は、

「思い出したくないものだってある。」

そう言って、ぷつりとテレビの電源を切った。私は、その時の祖父の悲しそうな顔や、かすれた声を今でも忘れることができない。戦争は、こんなにも人に深い傷を残すのかと、言葉が出なかった。

祖父は、毎年靖国神社へ参拝していて、私も小さい頃からよく連れて行かれた。靖国神社境内に併設されている遊就館という資料館には、戦争で亡くなられた、たくさんの人の写真、遺書や遺品等が展示されている。若い人たちが皆、お国や家族、故郷のため、と命をなげだした事実は、とても重い。まだまだやりたいこと、やり残したこと、希望あふれる未来がたくさんあったはずだ。展示物を見ていると、そういった思いで胸がいっぱいになる。小さい頃にはわからなかったけれど、歴史を勉強した今なら、いろいろと理解出来るようになった。祖父は、子供を二人失くした母親の姿を見ていたから、

「親より先に子が死ぬことはあってはならない。」

と、私に教えてくれた。家族を失った喪失感はいつまでも癒えることはないのだと。

私は、祖父と同年代の作家・藤沢周平を父にもつ遠藤展子さんのエッセイを読んだことがあるが、藤沢周平は生涯、「普通が一番」と言い続けていたそうだ。平和だからこそ、普通の暮らしが出来て、当たり前のように毎日を送ることができる。戦争中は衣・食・住すべてが失われた。祖父から、鍋・釜の供出だけでなくかわいがっていた犬も立派ないい毛並みをしていると軍に連れていかれたと聞いたことがあった。私

は、祖父が、当たり前のように食卓をみんなで囲んでご飯を食べることがだれよりも好きだったことを思い出した。そしてそれは、毎日十分に食べるものもなく、明日の生死さえ分からないような状況を生きてきたからこそ、皆で楽しくご飯を食べられることこそが幸せだと感じていたのかもしれないと思う。

ただ、戦争をしてはいけないとか、平和が大事とか、口にするだけじゃ何も変わらない。戦争によって、多くの命が失われた事実を受けとめ、私たちに何が出来るのだろうか。一人の力は、小さく、弱いかもしれない。でも、一人ひとりが自分に出来ることを行動していかなければ、何も変わらない。

今の私たちの幸せは、先人たちの苦しみや、つらい経験があったからこそ成り立っている。戦争を経験していない私たちには、実体験を語ることも、苦しみを伝えることもできない。けれど、先人たちに感謝し、戦争の悲惨さについて後世に伝えていくこと、考えてもらうことは出来る。私は、改まって祖父から戦争について話をされたことはなかったが、それでも、戦争経験者の生の声を聞き、折にふれて大切なことをたくさん教わってきた。だから今度は私が、日々を真摯に生き、この先も安心して平和な世界に暮らせるよう、次の世代へと平和のバトンをつないでいきたい。

小学生の部　大賞

藤山　彩乃（東京学芸大学附属小金井小学校６年生）

「今の私にできること」

「戦争なんて私には関係ない」

これは、戦争に対する私の第一印象でした。しかし、今思えば、この考えは浅はかだったと思います。平和な時代に生きる私にとって、戦争が身近なものに感じることができなかったために持った考えだったからです。昔とは違い、今は関係あると思うようになったきっかけはいくつかありますが、その中でも最大の要因は沖縄県にある、ひめゆりの塔・平和祈念資料館に行ったことです。ひめゆりの塔とは、沖縄戦で亡くなった女子学生、教員の慰霊碑のことです。そこに行って私が学んだことは、戦争の悲惨さや愚かさ、そして改めて何よりも命が一番大切だということです。平和祈念資料館の資料で一番心に残っているのは、体験者の証言の中にあった、

「私たちに何の疑念も抱かせず、むしろ積極的に戦場に向かわせたあの時代の教育の恐ろしさを忘れてはいません。」

という言葉です。当時は国のために戦うことは誇りであり、日本人としての務めでもあると教育されていたそうです。そのため、ひめゆり学徒隊の人達は病院に動員される時、何の抵抗もしなかったそうです。私はこのことを知った時、とてもおどろきました。確かに国を守ることは大切なことですが、それ以前に国民の命の方が大切なはずです。

この考えすら通用しなかった戦争。本当に悲しいことだったと痛感しました。

そして、もう一つ資料館に行って知ったことは、空爆された町の様子です。想像し

ていた様子をはるかに超えるものだったため、私は信じられず言葉を失ってしまいました。雨あられのように降ってくる焼夷弾や逃げまどう人々、そして地面に倒れこむようにして亡くなっていく姿。今、私達の目の前がこのような光景であったとしたら誰だって目を疑ってしまうと思います。

こんな状況にさせるほどの戦争を誰が望むというのでしょうか。

こうしている間にもまだ世界では争いが続いていて、多くの人が命を落としています。でも、国の問題は武力で解決するしか方法がないわけではありません。話し合いで解決できるはずです。

戦争とは、人間が犯す最大のあやまちなのです。ですが、このまま時間が経過して戦争体験者が少なくなっていけば、世界はまた同じあやまちをくり返してしまいます。もう二度と繰り返さないようにするためには、戦争体験者の貴重な体験談に耳をかたむけ、一人一人が良く考えることが必要です。そして、そこで知った戦争の恐ろしさを後世に伝えていくことが大切です。

それこそが、唯一の被爆国として今の私達にたくされたことであり、できることだと思います。

小学生の部　優秀賞

金丸　桃子（緑小学校１年生）

「わたしのへいわ」

へいわってなんだろう。よくわからなかったので「へいわってどんなこと？」という本をよみました。その本は、たくさんえもかいてあって、かみのいろ、かおのいろがちがう子どもたちがあそんでいました。みんなでいっしょにごはんをたべたり、あそんだりしていました。そしてわたしもかんがえてみました。ごはんをたべられること。ぐっすりねむれること。おふろにはいれること。おでかけできること。ともだちとあそべること。学校にいけること。これがへいわなのかな。まだまだよくわからないのでじしょでもしらべてみました。へいわとは、しずかでのどかであること。おだやかなこと。とかいてありました。むずかしいです。いまのわたしは、へいわなんだとおもいます。

「へいわ」のはんたいは「せんそう」といって、ばくだんがおちたりして、人がたくさんしんでしまうことだってパパとママにおしえてもらいました。せんそうとは、くにとくにがけんかをすることだそうです。

わたしのママはながさきうまれです。小さいときからへいわのことをたくさんべんきょうしていたそうです。学校でもへいわのしんぶんをつくったりほかの学校の人たちとこうりゅうかいというものをしていたそうです。へいわをかんがえることはとてもだいじだとママはいっています。わたしはなつ休みに、ながさきのげんばくしりょうかんとへいわきねんこうえんにいきました。わたしのひいおばあちゃんはながさきでげんばくにあいました。もうしんでしまいましたが、ママやおばあちゃんから、は

なしをききました。げんばくがおとされたばしょのちかくにいたけど、たすかったそうです。でもいっしゅんで町がなくなったそうです。人もたくさんしんだそうです。げんばくはとてもこわいばくだんです。しりょうかんでみたものはぜんぶこわいとおもいました。かわいそうです。ママもわたしもかなしくなってなみだがでました。でもまたいってもっとべんきょうしたいです。わたしがすんでいる小金井市にもむかしばくだんがおちて、たくさんの人がなくなったそうです。へいわだったら、こわいおもいをする人もばくだんがおちることもありません。

なんで、くにがけんかをして、せんそうをするのか、わたしにはわかりません。わからないけど、もしわたしがまほうをつかえたらみんなのこころをいい人にします。おこったり、けんかしたりしないようにしてあげます。そしてまずじぶんができることで、おともだちとけんかをしないようにします。

パパとママが、いつもの日がずっとつづきますように、まい日こころの中でとなえること、へいわはだいじということをわすれない、ひいおばあちゃんのことをわすれないようにすることが、へいわをまもることだよとおしえてくれました。

そしてみんなでわらう。たくさんわらうことがへいわなんだとおもいます。

4　平成29年度小金井平和の日記念行事発表作品

中学生の部　大賞

須藤　帆香（東中学校２年生）

「平和について考える」

「平和」という言葉の意味を調べてみると「戦いや争いがなくおだやかな状態」とでてきます。私は今、とても平和な毎日を送っています。家族や友達とたくさん笑い、私の生活はおだやかな状態にあるからです。ですが、世界に目を向けるとどうでしょうか。紛争に苦しむ人、満足にご飯を食べられない人、とても平和とはいえない状況にあると私は思います。

世の中で最も悲惨な出来事と言って良い戦争やテロは、世界の平和を奪います。多くの命が犠牲になり、多くの人を悲しませる。平和な未来を築くために、私達人間にできることとして挙げられるのは、過去から学ぶということです。戦争やテロは、自然災害と違い、一人一人の意識によって止めることができます。戦争などを経験したことのない世代が増えている中で、過去の失敗を学び、それを未来に繋げていくことはとても大事なことだと思います。例として、経験者から話を伺う、原爆ドームやグラウンド・ゼロなど、戦争やテロが起きた跡地へ行き、自分の目で見る、そして、本や教科書などを通して学ぶことが挙げられます。将来世界を引っぱっていく私達若い世代には、「平和」という言葉の意味を、自分だけを基準に考えるのではなく、常に世界に目を向けて考えることが必要とされていると思います。今、世の中で起きてい

る過酷な状況に向き合うだけでなく、過去の過ちを二度と繰り返さないように一人一人が意識をする。これらのことが「平和」な未来を創り上げていく第一歩になるのではないでしょうか。

私は、小学校六年生の時に、アメリカ同時多発テロ事件の跡地である、ニューヨークにあるグラウンド・ゼロを訪れました。この事件が起きた2001年、私はまだ生まれていなかったので、この出来事の恐ろしさというものを知りませんでした。ですが、いざグラウンド・ゼロを訪れてみると、言葉を失ってしまいました。ビルに囲まれている大きな噴水、そしてその周りに刻まれている約三千人の犠牲者の名前。実際に、航空機がワールドトレードセンターに激突している場面を見たことはなかったのですが、跡地を訪れただけでこの事件の悲惨さは伝わってきました。調べたところによると、この事件は、ワールドトレードセンターの北棟と南棟、そしてアメリカ合衆国国防総省本部庁舎ペンタゴンの三か所が、イスラム主義を主張するスンナ派ムスリムを主体としたテロ組織であるアルカイダにより攻撃され、三千二十五人もの命が奪われ、六千二百九十一人以上が負傷したそうです。

私は、アメリカ同時多発テロ事件についてもっと知りたいと思ったことから、この事件で崩壊したワールドトレードセンターを舞台にし、実話を元に製作したノンフィクション映画「ワールド・トレード・センター」を観ました。人々を救出するために向かう警察官二人が途中生き埋めになりますが、奇跡的に助かるという映画でした。また、航空機がビルに激突するシーンや、人々が煙などによる苦痛のあまり、ビルから飛び降りるシーンなどもあり、衝撃的な映画でもありました。この映画のストーリーが現実に起きたと思うと、ショックでたまりませんでした。

警察官二人が救出されるまでの間、二人がお互いの家族について語り合う場面があります。当たり前のように過ごしている毎日がどれだけ素晴らしいものか、家族という存在がどれだけ大きいものか、このシーンを通じて考えさせられるものはたくさんありました。

グラウンド・ゼロを訪れて、そして、この映画を観て、改めて「平和」について考えるようになりました。これほど多くの命を無差別に奪ってしまったアメリカ同時多発テロ事件を、決して忘れてはいけない。また、二度と同じ過ちを犯してはいけない。そのようなことを、私たちに訴えているように感じました。

今、世の中で問題になっていることはたくさんあります。北朝鮮核問題、難民問題。その他にもたくさん。今すぐにこのような問題を解決していくことは不可能です。しかし、少しでも今の状態が改善するように、一歩でも平和な世界に近づくために、私たちにできることはたくさんあります。同じ人間として、今の世界の状況を理解し、助け合う。そして「平和」について意識をする。私も、微力ではありますが、募金やその他の支援活動に積極的に参加していきたいと思います。また、戦争やテロなどの悲惨な出来事がこれからの世界に起きないように、理解をより深めていきたいと思います。いつか「戦いや争いがなくおだやかな状態」がこの世界に実現することを願っています。

山口　珠央（東京電機大学中学校２年生）

「幸せな生活とは何か？」

私は戦争なんてしたくない。他の国からミサイル攻撃を受けたくない。まして他の国に攻撃をするなんていうのはもってのほかと思っています。戦争なんて絶対に無い方が良いと思います。毎朝、普段通りに起きて朝ご飯を食べ、電車に乗って学校に行き、放課後にはクラブ活動をして、家に帰ると当たり前の様に夜ご飯があって、好きなテレビを見て、宿題と勉強をして、暖かい布団で寝る。普段はこの当たり前で普通の日常、いつも通りの毎日、もしかしたら何かもっと面白いこと無いかなと退屈に思えてしまうこともこれまであったかもしれません。改めて今回戦争や平和について考えてみると、どれほど自分が幸せな環境で生活しているのか、思い知らされた様な気がします。世界には私たちの様に、当たり前にご飯を食べたり、学校へ行ったり、暖かい布団で寝たりすることが出来ない国があるそうです。その理由として、戦争や紛争、発展途上、経済の悪化など様々な事情が挙げられます。世界中多くの地域で起きている民族紛争、宗教の違いによる紛争、お互いに自分の土地であると争っています。経済の発展が先進国に比べて低い水準にあるため、国民の生活や教育などに行き届かない。様々な理由により経済が悪化し、私が思う当たり前の生活が出来ない人々が多くいることに気付かされました。

個人差はあると思いますが、多くの人が平和な生活を望んでいると思います。多分紛争中の地域の人々もそうだと思います。しかし本当のことは当事者でなければわかりません。幸せで平和な生活をするには、条件や前提があるのではないかということです。

私はこれまでなぜ戦争なんてするのだろう。なぜ人と人が殺し合いをするのだろう思うだけで、理由まで考えてみたことはありませんでした。

例えば、昔から先祖代々生活してきた場所があると思います。その場所に知らない人々が来ると、ここは私たちのものだと争いが起こり、先祖代々生活してきた場所を追い出されたとします。果たして、追い出された人々は違う場所で生活できるのでしょうか？例え違う場所で今まで通りの生活が出来たとしても、その人々からしたら違う気持ちになると思います。なぜなら先祖代々生活してきた土地で生活することが条件として幸せな生活ができると考えることができるからです。これは一つの例であり、戦争や紛争は至る所で様々な理由で起こり、このままでは絶えることが無いのかもしれません。

どうしたら戦争の無い平和な世の中をつくることが出来るのでしょうか？確かな事は、もめ事や争いごとを解決する手段として、人を傷つけたりする戦いでは絶対に解決できないということです。今までに勉強してきた日本や世界の歴史をみても分かるかと思います。歴史をみると戦いの繰り返しであり、現在でも戦争や紛争が起きています。だとすれば戦うことはお互いに傷つけ合い、戦いが終わったとしても結果とし

て憎しみを残してしまいます。その憎しみが残る限り争いが絶えることが無い理由になるからです。私は、もめ事や争いごとを解決する手段はお互いが納得できるような話し合いだと思います。そうしなければ争いごとは解決できません。

これからの私たちの未来は、話し合いを軸として、どうしたらお互いが納得していけるのか考えていく必要があると思います。またどうしたら戦争をしなくてよい世界をつくれるか。長い時間をかけて、また世代を超えて真剣に取り組んでいかなければならないと思います。

現在日本では、憲法改正について議論されています。特に第９条「戦争放棄、軍備及び交戦権の否認」についてです。条文には、「日本国民は正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し国権の発動たる戦争と武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては永久にこれを放棄する」とあります。しかし、現在日本は、ミサイル攻撃の危機にさらされている状況にあり、しかも対話の実現も難しい状況にあります。対話の実現に向けて努力していくのか、憲法改正により自国を守る方法をとるのか早急に判断しなければなりません。しかし、私は早急に判断していくことと長い時間をかけて対話に取り組むことが必要だと思います。

もう他人事ではありません。当事者として、私たち子供から大人まで世代を超えて平和について考え、そして当たり前の生活という幸せができる様に、努力しなければならないと考えさせられました。

小学生の部　大賞

原口　有葵（東小学校５年生）

「家族の記憶」

私は、自分の家族が大好きです。

一緒に住んでいる、両親や兄はもちろんの事、九州にいる祖父母やいとこも大好きです。みんなが元気でいるのが当たり前でいつもいっしょにお出かけしたり笑いあったりしています。

いままでの、家族の思い出は、私の記憶の中や、写真などに一杯残っています。

でも、私の祖父には、お父さんとの思い出が全く無くお母さんときょうだいと大変苦労した事を、真っ先に思い出すそうです。

なぜなら、私のひいおじいちゃんは、第二次世界大戦で召集され遠い異国の地フィリピンで戦死してしまったからです。

ひいおじいちゃんは、とても心優しい人で、小学校の先生だったそうです。日本を離れる日、ひいおばあちゃんに「必ず帰って来ます。それまで三人の子供達の事よろしく頼みますよ。」と言ったそうです。

でも、ひいおじいちゃんは、戦地で敵の鉄砲の流れ玉に当たって帰らぬ人となってしまったそうです。

ひいおじいちゃんの戦死の知らせを聞いたひいおばあちゃんは、三人の幼な子を連

れて人気の無い丘まで駆け上がり張りさけんばかりの声で泣いたそうです。
　でも、それを最後にひいおばあちゃんは涙を見せなかったそうです。
　この話は、私の母がひいおばあちゃんから聞いた話です。母はこの話をするといつも涙ぐんでいます。
　私も、会ったことのないひいおじいちゃんが大好きな家族ともう二度と会えないであろうお別れをして遠いフィリピンまで決して居心地の良くない船に乗せられ戦地に向かう事を想像すると、ひいおじいちゃんの事がかわいそうでかわいそうでたまらなくなります。
　もし、今がその時と同じような状況で、お父さんやお兄ちゃんが召集されると思うだけで、いやでいやでたまりません。
　今、当たり前と思っているこのしゅん間が「平和」なんだなと思います。
　しかし、外国では、「平和」な状況ではない国が沢山あります。
　日本でも自然災害で「平和」で無くなる事もあります。
　私が思う平和とは、家族がいつも笑顔で楽しい記憶をつないでいく事だと思います。
　全人類がこの楽しい記憶をつないでいける世界になればいいと思います。

小学生の部　優秀賞

大久保　藍（小金井第一小学校３年生）

「世界の平和を守るために」

　せんそうって何だろう。せんそうにかかわる本を読むまでは、せんそうがどんなにくるしくて、悲しいかが分からなかった。
　本を読んでも、あまりつらいっていうのが分からない。けれど平和っていうのは、ごはんがしっかり食べられることなのかな。わたしたちのあたりまえはごはんがしっかり食べられて、学校にしっかりかよえること。じゃあ、せんそうにまきこまれた子は、わたしたちのあたりまえが出来ていないのだろうか。
　学校でならったちいちゃんのかげおくりを思い出した。ちいちゃんの家族の中のお父さんは、いくさに行く事になった。この時のちいちゃんのお母さんは、とても悲しんだだろう。その後、ちいちゃんの住む町に、ばくだんが落とされた。にげていると中、ちいちゃんはお母さんとはぐれてしまった。この時わたしは心をうたれた。お母さんとはぐれたというのに、あきらめないで、お母さんはいるとしんじているのだから。この時のちいちゃんを考えると、ちいちゃんは強いと思った。命がせんそうでうばわれてしまったかもしれないのに。わたしは、ちいちゃんの力強さに、ちいちゃんは幸せになって、家族全員とわらってすごしてほしいと思った。そして、ちいちゃんの体は空にすいこまれ、家族に出会えた。どんなにうれしかったことだろう。ちいちゃんの心は、家族と会えて、温かくなったのではないかと思い、初めて、せんそうのつらさや悲しみが分かった。
　これから、食べ物がなくて、こまっている子がいたら、食べ物を分けてあげて、そ

の子を一人ぼっちにしたくない。これからもその子が幸せになって、いっぱいわらってほしいと思った。

でも、せんそうを始めてしまうと、わたしたちではかんたんに止めることは出来ない。だから、食べ物をおいしく食べられることや、学校に楽しくかよえること一つずつを大切にして、今のくらしに平和があること、食べ物を作ってくれる人など、今のくらしを作ってくれてる人に感しゃしたい。多くの人々の命をうばわれないようにしたい。世界の全員をえがおにしたい。これからも、世界中の人の平和がだれにもうばわれませんように。

4　平成30年度小金井平和の日記念行事発表作品

中学生の部　大賞

北原　直樹（東中学校３年生）

「戦争について考える」

日本は今、戦後七十三年が経過し、年々戦争経験者が減少しつつある。私は戦争のことを考えるたびに若い世代である我々が後世に戦争の悲惨さを語り継がなくてはいけないと思うのだが、毎日の生活の忙しさに紛れているうちに、一週間後には忘れてしまっている自分がいる。現に私の周りの友達が、反戦を訴えかけてくることもないし、戦争について話題にすることもない。そのような状況の中で、本当に我々若い世代が戦争について語り継いでいくことができるのか不安に思うのである。

今年六月二十三日の「慰霊の日」の沖縄全戦没者追悼式では、私と同い年である相良倫子さんが「生きる」という平和の詩を披露した。私はその詩を聞いて、同い年とは思えない語彙力の多さやメッセージ性の強さに驚かされた。力強い内容に心を打たれ、一人でも多くの人にこの詩を読んで欲しいと思った。

しかし、私には今、彼女のような詩が作れるかといったら作れない。戦争の悲惨さは勿論理解できる。ただそれをどのように言葉にし、どのように伝えていけばよいのだろうか。

私は沖縄に行ったことがある。沖縄は本当に美しい島であり、海は透き通っていて、沢山の動植物が暮らす自然豊かな島である。しかし、七十三年前、太平洋戦争で唯一の地上戦となった沖縄戦が行われたとても悲しい歴史を持つ島でもある。私は戦争の爪跡の一部を資料館などを訪れて学んできた。

旧海軍司令部壕では、人々が実際にその場所で戦争中の日々を過ごしていた様子が生々しく伝わってきた。医療室では負傷者が死んでいく様子が感じられた。幕僚室の壁には、手榴弾で人々が自決したときの破片の跡が残っていて、実際に人が自決していった当時の空気が感じられ、胸が苦しくなった。

平和祈念公園では、市民を巻き込んでいった地上戦の恐ろしさを学んだ。戦争で苦

しんだのは兵隊だけではない。普通に暮らしていた何の罪もない多くの人々が殺されたのだ。その中には私と同じくらいの年の子もいただろうし、もっと小さな子どもも大勢いたのだ。そう考えると今の自分がいかに幸せかを感じることができた。摩文仁の丘からの景色はとても美しかった。かつて最後の激戦が行われていた場所などとはみじんも感じられなかった。

ひめゆりの塔では、当時私と同じくらいの年齢だった女学生について知ることとなった。戦争では女学生までもが大変な思いをしていたのだ。当時の生徒たちは軍国主義教育を受け、それに誰一人として逆らえる者はいなかった。その後、看護要員として動員され、病院壕と呼ばれる地下壕で多くの重症患者の手当てをしてきたという。私は血を見るのが怖いが、当時の人たちはそのようなことなど言っている場合ではなかったことだろう。そしてひめゆり学徒の多くが地上戦に巻き込まれて死んでいったという。戦争の悲惨さと愚かさを肌で感じることができた経験となった。

しかし、我々は普段の生活の中で戦争と触れる機会は少ない。そのためか、若い世代だけではなく、多くの世代の戦争に対する意識は確実に薄れていると感じる。例えば、沖縄県内でもチビチリガマという戦跡が少年らによって荒らされるという事件が起きた。チビチリガマは九十人近くの一般市民が集団自決に追い込まれた場所だ。少年らがガマに侵入した動機は「肝試し」だったという。千羽鶴は引きちぎられ、骨つぼは破壊され、平和と書かれた額は叩き壊されていたらしい。どうしてこのようなことをしたのか意味が分からないが、少なくとも彼らに平和を担う責任感などみじんもないことが分かる。自決をした人々やその遺族はどのような気持ちだろう。さぞ憤りを感じたことと思う。

このような事件は起こさなくても、我々から戦争の記憶が薄れていっていることは確かだろう。私たちは戦争を語り継げる人がいなくなりつつあることに対して、もっと危機感を抱くべきである。その第一歩としては、まず戦争のことをより多く、もっと深く知ることが大切だと思う。戦争に関する本を読んでも良いし、資料館に行っても良い。身内や知り合いに戦争経験者がいれば、貴重な話が聞けると思う。そうして得た知識や感じたことを、自分よりも若い世代の人たちに伝えていかなくてはならない。

私は先日、修学旅行の中で、外国人と平和に関する意見を分かち合う企画であるピースメッセージを行った。このように、人種や国籍を問わず、平和について考え合う、意見を共有するということはとても大切なことだと思う。私はこれからも戦争のことをもっと知り、色々な人の意見を聞き、伝えていくことで、後世に平和を維持できるよう貢献したいと考えている。それがこれからの日本を担う我々若い世代の義務だと思うからである。

中学生の部　優秀賞

奥野　綾音（東京学芸大学附属小金井中学校２年生）

「語り継ぐ大切さ」

平成最後の夏に沖縄へ旅行に行った私は、「ひめゆりの塔」を訪れました。30度を超える暑さの中、塔の前にはまだしおれていない数百もの花束が添えられていました。七十年以上の月日が経った今でも、それだけ沢山の人の心を動かし続けているのです。それはどうしてなのでしょうか…。

ひめゆりの塔は、終戦直後の物資が少ない時代に建立。その隣接地には平和祈念資料館が建てられ、2004年にはさらに平和の想いを未来へつなぐための「平和の広場」が増築されています。私はそんな新しくなった平和祈念資料館の一室一室を丹念に見学して行きました。

「ひめゆり」の愛称で親しまれていた２つの女学校の、設立から終戦までが、細かく展示されていました。その中でも特に印象に残ったこと。それは、自ら手榴弾で命を失った学徒がいたということです。米軍の沖縄上陸戦争が始まった時、沖縄陸軍病院に配属された学徒達。そこでは負傷兵たちのために、死体埋葬や水汲みなどの過酷で辛い仕事をしていたと知りました。

第四展示室でひめゆり生存者の証言本を読んだときに、「手術で切り離した負傷兵の手がずっしりと重かった」という言葉が目に入り心にずしんと響きました。負傷兵が増えると、手術で助手をすることもあったそうなのです。

そんな戦場の中で自ら命を絶った少女たち。考えるだけで、どれだけ苦しかったのか、悲しかったのか、体験していない私でさえ胸がつぶれるようでした。

今まで私は、戦争で本当に大変な思いをしたのは、前線で戦った人がほとんどだと思っていました。でも、私と少ししか歳が変わらない女の子も、ここまでつらい思いをして生きていたということを痛いほど感じました。

そして、自ら命を絶とうと考えたことがない私は、今の世界は「あたりまえ」のことだと思っていました。でも、この今の世界は、とても幸せで平和である事、ひめゆりで戦場を必死に生きてきた少女たちが望んでいたような世界だったのだと感じました。こうして、第五展示室までを回った私は、とても大きな衝撃を受けました。それと同時に、今私には何ができるのか、どうすれば良いのかが分からなくて、自分の無力さを思い知りました。

そんな中最後に、2004年に増築された「未来の広場」へ行くと、はっと目が覚めました。元ひめゆり隊だった方々が、戦争の体験のことを伝えるために様々な講演会を開いていることが分かったのです。それだけではありません。さらに、同じように戦争で辛い体験をしたドイツのユダヤ人の方々とも交流をし、思いを交わし合っていたことを知りました。

ひめゆり隊として戦場を戦いぬいた方々が、「戦争の恐ろしさ」をただの想いとして胸にとどめておくのではなく、何年経った今でも、次世代に発信し続けていると分

かりました。

私はひめゆり隊だった人たちのように実際に戦争を体験したわけではありません。でも、戦争を知らない世代が過半数を超えた今だからこそ、私なりにできることをしていかなくてはならないと思います。今の私たちにできることそれは、戦争の悲惨さを「知ること」。このひめゆり資料館に行く前の私のように、戦争の辛さ、悲しさを知る人は少なくなってきています。なのでまず最初は、一人一人が「戦争」にしっかりと目を向けなければいけません。そして、自分だけが「知る」のではなく、大切なのは自分が聞いたことや感じたことを一人でも多くの人に伝えていくことだと思います。戦場で戦った人たちが今でも次世代に発信し続けているように、私たちも平和の尊さを発信していくべきなのです。

小さな子供までもが自らの命を絶とうとまで考えてしまうほどの、沢山の悲しみを生む戦争。そんな恐ろしい悪夢を、再び繰り返してはいけません。次は私たちが、平和であることの大切さを語り継いでいく番です。もう二度と、同じ悲劇を生むことのないように。

中学生の部　優秀賞

五嶋　ゆり（東京学芸大学附属小金井中学校２年生）

「七本のけやきが教えてくれたこと」

東京学芸大学には、六つの門があります。正門、東門、西門、北門、ドラえ門、そしてプール門（グラウンド門）です。しかし、以前から不思議に思っていたのですが、プール門にはプールがありません。最近では「グラウンド門」としか表示していないことも多くあります。では、なぜ「プール門」という名前がつけられたのでしょうか。

中二になったばかりの社会科の授業で、地図がかかれた一枚の紙が配られました。しかし、なぜかその地図には空白があり、とても驚きました。こんなに奇妙で怪しい地図は初めて見ました。授業が進められていくうちに、ここは昭和十年代の今の東京学芸大学の土地だとわかりました。当時、ここには陸軍の技術研究所があったようです。地図に空白があるのは、そこが一般には公開できない極秘の土地だったからでしょう。この日、私は八年間通って一度も触れることのなかった東京学芸大学の歴史の扉を開くことになりました。

このあたりの土地は、陸軍の技術研究所ができる前、もともと農家の方が十数名住んでおり、家や農耕地、山林原野がひろがっていたといいます。しかし、昭和十五年二月十五日から二回にわたって、今の市営グラウンドあたりから稲穂神社にかけての土地が、陸軍の軍用地として買収されたそうです。従わなかった人も即刻強制買収の手続きをとられて、一言の抵抗もできなかったそうです。農地も木々も、先祖累代の屋敷も、やっと新築したという家でさえも、百七十五ヘクタールという広大な土地が強制買収されました。

この買収で、最大の犠牲を払ったのが荒畑さんという方でした。荒畑藤吉さんは、昭和十五年陸軍の土地買収当時、今の東京学芸大学陸上競技場の南側周辺の地主でした。その祖先は遠く武蔵野新田開発時代、この地に土着したそうです。荒畑さんは、母屋・物置・小屋・倉・蚕小屋・庭・屋敷林すべてを買収されました。荒畑さんの土地は、第三研究所の一部になりました。今の附属小金井中学校の土地は兵器庫でした。研究所の敷地全体にコンクリートの塀が張り巡らされました。

戦争が終わって土地から人々がいなくなり、荒畑さんたちは再度この土地を開墾しようとしました。しかし国から、「国有地とされたため、大学を作り、日本がこれから力を入れていかなければならない教育のための土地として利用する」と言われ、開墾できず、当時の東京学芸大学の学長に裁判を起こしました。しかし訴訟は長引き、荒畑藤吉さんもご高齢ということで、なんとか決着をつけようということになり、荒畑さんは条件として、碑を建てるということを提案したそうです。

私達は先生と、実際に学校を出て、荒畑さんが住んでいた場所を見に行きました。そこは、小学生の頃から何度も通ったことのある場所で、陸上競技場トラックの前のちょっとした林でした。そこには今まで気がつかなかった小さな小さな碑がありました。「けやきの碑」という碑です。荒畑さんのご子孫が描かれた略地図を頼りに、家の屋敷林を構成していた七本のけやきを確認しました。どれも他の木に比べてとても太く大きい木でした。「けやきの碑」には、武蔵野の農家は防風のため一般に屋敷林に囲まれ、その森の中心をなしていたのがけやきだったと書かれています。荒畑さんは、一メートル以内のもので自費という厳しい条件の中で、その小さな碑に、自分が生きた証、ここに家があった証を残していったのです。

当時の陸軍技術研究所の地図を見ると、今のプール門の近くに、なんと「プール」という表示がありました。斜めの傾斜が付いた兵器の試験用のプールがあったのです。しかし、今ではだんだんとグラウンド門という名前に変わり、当時の記憶もうすれてきました。

私は小学生・中学生として通った八年間、この大学の歴史を全く知らずに過ごしてきました。まさかこの地にこんな悲痛な歴史があるとは思いもしませんでした。

戦争とは、日々真面目に平和に生きてきた人々の生活を、突然いとも簡単に奪ってしまうものなのだ。荒畑さんのその小さな小さな碑と七本のけやきの木々が伝えようとしていることは、きっとそういうことなのだと私は思いました。私たちは、この学校で学ぶ者として、この悲痛な歴史を後世に伝えていかなければならないと思います。これからは、この歴史をもっとたくさんの街のみなさんに知っていただき、このけやきの碑と七本のけやきを大切に守り、その歴史をずっと未来に伝えていくべきだと思います。

そして、二度とこのような辛く、苦しい思いをし、犠牲になる人が出ないように、他人事ではなく私たち一人一人が平和について考え、戦争という過ちを繰り返さないようにする意志を持っていく必要があると思います。

小学生の部　大賞

山浦　万穂（緑小学校３年生）

「ひばく者水野さんのお話を聞いて」

八月四日にひばく者の水野さんのお話を聞くきかいがありました。

水野さんは、今年九十さいで七十三年前に広島で原子ばくだんをけいけんしました。ばくしん地から一キロの所でひばくしたそうです。その当時、十七さいで広島女学院に通っていました。

水野さんの十七さいの時のせい服すがたの写真を見せてくれました。せい服には、大きな名ふだがついていました。名ふだには、名前と血えきがたが書いてあったそうです。もし、ばくだんでけがをしたり、なくなってしまった時に、すぐに家族に知らせるためだそうです。わたしは、せん争でけがをしたり、なくなってしまうかのうせいがあるから名ふだをつけているのかなあと思うと、こわいなあと思いました。

中学生になった水野さんは、勉強よりも工場などで働くように国からめいれいされたそうです。水野さんは、ひ服しょうで働かされていたそうです。ひ服しょうとは、軍服を作る工場のことです。せん争のために中学生い上の子どもや女性たちががんばっていたなんておどろきました。わたしは、ふ通に学校で勉強ができたり、友だちと遊べることができてとても幸せだなあと思いました。

水野さんは、ひばくした日についてくわしく教えてくれました。広島に原子ばくだんが落とされた昭和二十年八月六日は朝から晴れて、とてもいい天気だったそうです。まさか、原子ばくだんが落とされるとは、ゆめにも思わなかったそうです。その日は、国が勉強をしてよいと指示があり広島女学院に通学したそうです。朝のれいはいがあり、ちょうど終わった時に、ぴかっと光り、ものすごいばく風で一しゅんでたて物がくずれ、すなやレンガがふってきたそうです。暗やみの中で「お母さん。」「お父さん。」「たすけて。」とこの世のものとは思えないじごくのさけび声が聞こえたそうです。水野さんは、死んでしまう前にきれいな空気をすって死にたいと手で口をふさいだそうです。きせきてきに助かった水野さんは仲間と協力して、やっと外に出られたそうです。水野さんは、外に出てまたおどろいたそうです。広島女学院だけにばくだんが落とされたと思っていたのですが、外の様子は、一面やけ野原になっていて、人のかみの毛がさかだっていたり、黒こげになっている人や赤いひふが見え、たれさがっている人がいたり、川につくとへいたいさんが「いたいよ。」「水をくれ。」とさけんでいたり、とてもひさんな風けいが広がっていたそうです。原子ばくだんは本当にこわいものだということがよく分かりました。

わたしは、水野さんに「お母さんに会えたんですか。」としつ問しました。水野さんは、お母さんを原子ばくだんで失ったそうです。水野さんのお母さんは、国のめいれいでたて物そ開へ行っていました。たて物そ開とは、空しゅうにより火災が広がるのを防ぐためにたて物をとりこわす作業のことです。原子ばくだんが落とされて、一か月後に母を兄の友だちが見つけてくれたそうです。一つの原子ばくだんで一しゅん

に家族や友だちを失い二度と会えなくなってしまうなんて悲しいことだなと思いました。

原子ばくだんは、とてもおそろしくてこわいので二度と使ってほしくないです。昨年かくへいき禁止条約が作られたそうです。ですが、日本は原子ばくだんが落とされた国なのに加入していないそうです。どうしてなんだろうとぎ問に思います。水野さんもかくへいきがない世界にしたいと何回もくり返し話していました。

広島と長さきに原子ばくだんが落とされたことは知っていました。水野さんのお話を聞いて、一つの原子ばくだんがどれくらいのい力でおそろしいものなのか、とてもよく分かりました。き重な話を聞けてよかったです。おそろしいかくへいきが使われないよう、せん争がなくなってほしいです。まだ世界では、せん争をしている国やかくへいきを作ったり、実験している国があります。わたしは、せん争を知らない人たちに水野さんに聞いたことを伝え、せん争をおこさないようにしたいです。いつか世界がかくへいきがなくなり、せん争がない平和な日がきてほしいとねがいます。

小学生の部　優秀賞

森田　英路（小金井第三小学校６年生）

「戦争に学ぶ」

紀元前からこれまで、戦争は何度も繰り返されてきた。千九百年からの戦争・紛争は約百回、今も絶えることなく各地で起きている。このような世の中を「平和」だと言えるだろうか。私はそうではないと考える。みなさんも「平和」ではないと考えるだろう。そして、全ての人が完璧だと言える「平和」は、地球に七十二億人という多くの人々がいるかぎり、おとずれることはないだろう。しかし、戦争を少しでも起こさないようにすることは、可能なのではないだろうか。そのために私は、歴史、つまり今までの戦争に学ぶ、ということが必要だと思う。歴史を学べとよく言われるが、「平和」を目指すために学べといわれていることとイコールではないかとも思える。

そもそも戦争とはなんだろうか。私は、多くの命をうばう大きな過ちだと思う。私がいう戦争に学ぶ、ということは、その大きな過ちからなにかを得て、戦争という手段を減らし、「平和」の世界をつくりあげようとすることなのだ。私は人権について学校で学んだ。人の命の重みを知り、それを大事にすることの大切さを改めて考えることができた。この考えは戦争にもつながってくると思う。戦争として、被害が大きなものに、第二次世界大戦がある。この戦争は、約八千万人にものぼる数々の命をうばい、大きな被害がでた。これは、命の重みを皆が知っていれば、このような被害は出なかったと思える。また、第二次世界大戦を経て、国際連合という、平和のための機関が発足した。現在百九十三ヶ国加盟し、「平和」の世界をつくりだしている。日本でも第二次世界大戦による被害はたくさんある。空しゅうによって東京都で約十万人、広島では、約十四万人の命がおとされた。戦争に勝つためには仕方ない、と考える人もいるが、人が死んでは意味がない。戦争以外の解決方法も考えることは、できるのである。そのために戦争に学ぶことが大切なのだ。私は、広島市で「黙祷」を捧

げているニュースをテレビで見たのだが、すばらしい行動だと思う。今までの戦争という大きな過ちを、五十年以上経った今でも忘れず、犠牲者に対し、心の中でいのる。そのような行動を私は大いに尊敬する。

しかし、大きな発言力を持たない我々が、今まで私が述べてきたことを思ったとしても、何も起こらないのではないだろうか。私は、それはちがうと思う。少しずれているかもしれないが、「塵も積もれば山となる」とあるように、一人一人の個人が少しでも、戦争について、考えを持つことによって、やがては高大なものになる。また、今平和を目指す私たちにとって、戦争を止めようとする人が増えていくことは、大きな進歩につながり、大事なことなのである。戦争は、平和を祈る人にとって、あってはならないものだ。いくら発言力がなかったとしても、命の重みを知り、戦争をなくそうとすることは、決して意味がないわけではないのだ。

今、世界の人口は増えつづけ、文明も発達してきている。そんな中、世界大戦のような惨事がおこったらどうなるだろうか。考えてみてほしい。おそらく、今まで以上に大きな被害をもたらし、負傷者が数多く出るだろう。たくさんの命をうばうような戦争は今後、絶対にあってはならない。今まで起こってきた数々の人達を犠牲にする戦争に学んでほしい。これは、「平和」を祈る私たちにとっての願いであり、使命なのである。

戦争体験談

1　平成26年度小金井平和の日制定記念式典講演

「小金井平和の日」制定の検討経過について

（小金井市平和施策検討委員会座長　根岸茂夫）

根岸でございます。今、ご紹介いただきましたように、小金井平和の日の策定の施策検討委員会の座長をさせていただきました。実は私は戦後の生まれで、太平洋戦争の記憶があるわけではありませんが、小金井市史の編さんをお手伝いさせていただいている関係で座長を務めさせていただきました。太平洋戦争から70年が経過して、戦争体験者が高齢化し、戦争の悲惨さを語ることが難しくなっており、戦争の記憶を風化させないために、また改めて平和の尊さ、戦争の悲惨さや平和についてさらに考えていく。これを目的としました小金井平和の日を、制定を含めて小金井市の平和施策のあり方について検討するために、小金井市平和施策検討委員会というものが設置されまして、今、登壇されていらっしゃいます鴨下先生、永井先生、林先生に、戦後生まれの私が参加することになりました。式典の次第にも書かれておりますが、施策検討委員会は４月以降６月まで４回開催されまして、小金井の平和の日の策定、小金井の市の平和の施策についての検討を行い、市長に報告いたしました結果が、本日の式典に結実したわけです。特にここでは、平和の日の制定の経過を報告させていただきます。

策定を検討するために、まず小金井の太平洋戦争における被害の状況、また空襲の記録などを検討いたしました。実は記録に見える空襲というものは４回しか出てまいりません。昭和19年（1944）11月24日が最初の空襲の記録であります。ちょうど１ヶ月前の昭和19年10月24日にレイテ沖海戦で海軍の連合艦隊の主力がほとんど失われている。さらに25日には初めて特攻機が米艦に体当たりをする、そういうような戦闘が始まりました10日前の11月14日に、東京は初めて空襲を受けました。以後、106回の空襲を記録の上では受けたことになっています。記録では、小金井が初めて空襲を受けたのは11月24日で、東京が初めて空襲を受けた10日後になります。警視庁の公式の記録ですと、この日は小金井ゴルフ場の前の道路に爆弾が１個落ちたということしか、出て参りません。爆撃の第一目標は、武蔵野・三鷹に所在した中島飛行場の工場や研究所でありました。このとき米軍は215トンの爆弾、焼夷弾を投下しまして、周辺では死者が73名、重軽傷者が84名出ています。特に隣の武蔵野市ではこの日を平和の日と制定しております。このときの空襲を鮮明に記録されておられる方もおられますし、また後でお話しもいただけるのではないかと思っております。

その後の公式記録では、12月３日、翌昭和20年（1945）１月９日に小金井町に爆弾が落ちたとありますが、その記録を見ますと、実は花小金井など小平のあたりに落ちており、小金井市内ではないようです。明確な小金井市内の空襲の記録は、昭和20年の１月27日、武蔵小金井駅から西約300メートルの線路上に大型焼夷弾が１個落ちまして、線路を切断し枕木を焼失させた。また電車が不通となりましたが、同日復旧したという警視庁の記録がございまして、実はこれだけで、この４回で公式な記録から小金井の空襲の記録は無くなっております。

ところで、空襲の中でもっとも著名な昭和20年３月10日の東京大空襲についての被害は、小金井としては記されておりません。けれども、東京大空襲の記憶はさきほどの黒井先生のお話にもありましたように、鮮明な記憶として多くの方々が持っておられ、後でお話しいただけるかと思いますが、小金井に当時住んでいた方々の記憶にも深く刻まれたようですし、その後の始末に小金井の方々も動員されていくという意味では、小金井にとっても大きな問題であったと考えられます。

公式な記録、政府ですとか、東京都、警視庁などの記録はここで途絶えておりますけれども、小金井第一小学校の日誌を見ますと、以上の４回の空襲の後に、２月16日、17日、４月７日、４月12日、４月24日、４月29日、５月29日、６月11日、６月23日、７月30日、８月１日、２日と10回にわたる空襲が記録されております。この間に艦載機、空母から発進した戦闘機から機銃掃射を受けたという方々のお話、また爆弾が落ちたという話も聞いておりますが、公式記録には見えておりません。考えますと当時の公式記録というものは被害をなるべく過小に評価する傾向がみえ、人的な被害がなければほとんど報告はされない。そういうような形で、実態を示している内容とは言い切れない部分があります。公的な記録と、住んでいる方々や生きた方々の記憶との違い、記録と記憶の差というものは乖離する部分が大きく、その意味で、記憶にこそ当時を生きた方々の戦争の悲惨さを語り継ぐものとして、重視しなければいけないのではないかと思います。

このような記憶を、当時の米軍の空襲の傾向に照らし合わせますと、その意味はよりいっそう明確になると思います。現在の研究などでは、米軍の空襲というものは大きく３つの時期に分けられているといわれています。第１期は、昭和19年11月から昭和20年の３月の初めくらいまで、つまり東京大空襲の前までです。このときの米軍の作戦は、昼間比較的高いところから軍需工場などを標的とした攻撃をするというのが第１期の特徴であります。第２期、昭和20年の３月10日から６月の半ばまでは、夜間に前よりも低い位置から大都市を焼夷弾などで焼き払うということが行われ、そうした中で最も象徴的なものが東京大空襲でありました。第３期、６月半ばから８月まで、今度は、地方の中小都市を焼き打ちする、焼き払うというように被害が全国に広がるというように、３つの時期に分かれております。一方で昭和20年２月から３月にかけまして、ちょうど硫黄島を米軍が攻撃しているとき、そこに空母が集まってくる。その空母から発進しました戦闘機が本土にやってきまして機銃掃射を無差別に行っていく。特に６月から８月までは中小の都市が狙われるだけではなく、飛び回る戦闘機の機銃掃射で多くの方が命を失われているというようなことがあります。機銃掃射に狙われたお話もこれからも語られるかと思いますけれども、そのような人々の記憶こそ、公式的な記録にはありませんけれども、問題にしなければならないことだと思っています。もちろん70年の時間を過ぎて失われたものや記憶違いなどもあるとおもいますが、それは次第に風化してしまうものでもあり、その記憶をいま語り継ぎ記録しておくことが、後世に残す資料として重要になってきます。だからこそこのような機会が現在いっそう必要になってくると思います。

ところで、小金井平和の日の策定の検討委員会におきましては、それを語り継ぐ記念の日をどこに設定するかが、まず大きな検討課題となりました。そうした中で、例えば初めて空襲があり、その記憶を鮮明にされている方々もおられる昭和19年の11月24日にしてはどうだろうかという検討もなされました。実は、戦後になりましてから小金井町は、小金井町戦没者慰霊碑を建設して平和への思いを込め、現在でもそれを引き継いでおります。その後第１回の慰霊祭が行われました昭和28年の11月20日も、平和の日の候補として検討にのせておりました。しかし、当時の方々の記憶に東京大空襲が深く刻まれている。これからお話していただける委員の先生の方々の記憶からもそれは鮮明です。また今までたびたび小金井市は戦争の悲惨さを語り継ぐ文集を作っておりますが、その中でも東京大空襲の記憶に関する文章が多く載せられています。小金井は戦後人口が増えて参りましたけれども、戦後の移り住んだ方々の記憶にも東京大空襲が深く刻まれているということが文集に散見されます。そうした中で、東京大空襲が小金井のかつて住んでいた方にも現在の住民の方にも決して無縁ではない。また先ほどお話ししましたように１期から２期へというような以後の空襲の変化の契機となっており、さまざまな戦争の悲惨さの記憶を語りつぐための意義も大きいのではないか。特に先ほど申しましたように、記憶と記録は乖離して

いる。記録というものは残りますが、記憶は風化してしまう。この記憶を風化させないための施策をどうしたらいいのかということを考えながら、平和への思いを込めまして、委員会では３月10日を小金井平和の日といたしました。

以上、委員会で出ましたさまざまなご意見や重要なご指摘を忖度いたしまして、特に小金井の空襲の記録については、市役所広報秘書課の方々が尽力され収集された資料をもとに、私個人でまとめて付け加えましたが、以上が小金井市平和施策検討委員会の課題の報告です。黒井先生のお話にもありましたように、これを契機に平和を前進させるためにはどうしたらよいか、それを今後考えていかなければいけない。特に戦争の記憶を風化させることなく、この制定を契機にしまして小金井のなかで特に若い方たちが平和を語り継ぎ、平和を考え、平和を前進させていくことを期待するとともに、このような機会に少しでも微力ながらご協力できましたことを、平和を心から願い前進させていただきたいと考えているものの１人として光栄に存じます。ありがとうございました。

戦争体験談（小金井市平和施策検討委員会副座長　林茂夫）

ご紹介をいただきました林でございます。今日は私たちに与えられた時間は10分間でございますので、時間がありません。思いの丈を全部話すことはできないと思いますが、東京大空襲に特化してお話をしたいと思います。太平洋戦争、日本の私たちの第二次世界大戦というのは、昭和16年12月８日、1941年の暮れに起こりました。朝から大本営の発表のけたたましいニュースが流れて戦争状態に入ったと、真珠湾でのかくかくたる戦況が報道されまして当日は日本全国が大変活気に満ちた日でありました。私はその日の夜の出来事が、未だに鮮明に残っておるのですが、当時私どもは小国民、小さな子どもたちですね、小国民といわれた軍国少年でした。もう例外無しで軍国少年でした。それは教育のしかるべくなした業だというふうに思うわけでありますが、長じていろいろ思うところがありまして、そういうふうに私は思っておりますが。その日の夜ですね、食卓を囲んでおりました。そのときに父親が一言ぽつんと「こんな戦争勝てるわけがない」と言ったのです。軍国少年の私は耳ざとくそういう言葉を聞きつけてですね、お膳から立ち上がって、父親に指を刺してお父さんは非国民だと、非国民という言葉が皆さんよく分からないかもしれませんが、国民に非ずと書くわけですね。当時は、国の方針あるいは軍部の方針に反してものを語れば非国民になる。私たちはもちろんそんな認識はありませんでしたから、父親に向かってそういいました。母親や私の兄弟はびっくりした顔をして一瞬箸をとめて私を見ましたけれど、父親がおもむろに顔を上げて私の顔をじっと見ました。何も言いませんでした。悲しそうなさびしそうな目で私を見たのをいまだによく覚えています。健全な思想を持った大人たちはあの戦争が無謀な戦争だということが初めからわかっていたのですね。だけど、それを声を大にして語ることができない時代だった。そういう時代が再び来ることを私たちは許してはならない、というふうに思っております。自由にものを言える時代、それがなかったらその国はうまく立ち行かないでしょう。いずれどこかで難しい局面を迎えることになる。歴史の過ちを繰り返してはならないというそういう教訓を得たということです。以後、父親は戦争に関しては一切口を利きませんでした。それがきっと親父の覚悟だったのかもしれません。時間がありませんので、東京大空襲の話になるのですが、1944年、昭和19年の暮れごろ、11月ごろから東京の空襲が常態的になってきました。翌年の３月10日というのは、東京大空襲の年ですが、夜中にですね、母親から、茂夫さん、学校が燃えていると起こされました。学校というのは今の第一小学校です。当時、小学校は一つきり小金井にありませんでした。私の家は小学校から100メートル足らずの距離にありましたので、びっくりしてとびおきて寝巻きの上にマントを着て、そしてはだし

で下駄を履いて学校に駆けつけました。学校は燃えてはいませんでした。しかし、当時、非常に立派な木造校舎が東の脇に南北に建っていましてその東側のガラスに炎々と燃えているような炎の反射があったのですね。私も母親も学校が燃えていると思いました。行って見たらそうではなかった。翻って後ろを見たら、後ろというのは東側です。愕然としました。東京の空全体が燃えているという感じでした。一瞬息を呑みました。子供心にもぎょっとしました。空全体が燃えているような印象でした。小金井の上空まで炎がかぶさっているような印象でそれはそれは大変ショッキングな私の体験でした。そのとき、ふと思ったのはお父さんはどうしているのだろうか。父親は東京の新宿にあります今の東京医科大学の前身の東京医学専門学校というところに行っていました。そのころはほとんどうちに帰ってくることはなかった。この空の下でお父さんは死んじゃったのだろうか、というふうに直感しました。そのとき胃が急にきりきりと痛くなって、脂汗が出てきて息ができなくなりました。たぶん自分では軍国少年で、竹やりを持ってでも戦うみたいなことをいっていたのですけれども、おそらくそのショッキングな光景にたぶん相当ストレス、ダメージを受けたのでしょうね。胃痙攣を起こしたんです。脂汗が出てきて、息が詰まって口が利けない。呼吸ができない。気がついたらひざを地面について、両手でこう体をかばっていました。私にとっては、大変、悲惨な経験でしたから。で、母親が後から来て、どうしたのといって、抱き起こして家に連れ帰ってくれたのですが、父親は３日目に帰ってきました。生還したんです。空襲の状況の話は一切しませんでした。黙って帰ってきてもう服はぼろぼろというか焼け焦げだらけ。かぶっている似合わない戦闘帽も焼け焦げだらけ、顔はすすで真っ黒です。火災にあうとあんな顔になってしまうのかなというくらい真っ黒な顔でした。もうすすだらけ。そのまま横になって、２日間くらいずっと寝っぱなしでした。以来、絶対に戦争の話はしませんでした。東京大空襲で飛来した飛行機というのはボーイングB29という当時私は全長も横幅も含めて40メートル以上の飛行機だというふうに聞いていました。それが300機、次から次とやってくる。低空飛行なんですね、夜間の。サーチライトで照らしますとともものすごい低空、ものすごい大きい飛行機が飛んでくるんです。次から次へと。それは、やっぱり一種の恐怖心へ変わった。そういう状況です。それでまあ東京に落とした焼夷弾の数、300機の飛行機が1,665トンの焼夷弾を落としたんです。300で除してみると１機が5.5トンの焼夷弾をつんできたという計算になるんですね。ボーイングB29といのは巨大な空の要塞といわれている飛行機ですから、そのくらいのものはつめたのでしょう。下町、なぜ下町が狙われたのかというのは、日本の軍需産業を支えている中小の企業が町工場がたくさん下町にはある、あんなところに爆弾を落としてももったいない。焼き払ったほうが早いというのがアメリカの戦略だというのは、その後いろいろな資料で明らかになってきたことです。ですから、大変な火災になった。そのとき、日暮里に住んでいたという、大学に行き始めて出会った友人が、俺は日暮里にいてあのころは法律とか勅令とかで、空襲にあって火災が出たら逃げてはならんと、そういう縛りがあったそうです。まず、火を消せ、と。バケツなんかもって行って消せるようなそんなもんじゃないよ、というんですね。もうみんな逃げちゃったと。逃げ惑ったと。それで火災が終わったあと、現地に行ってみたら、消防車のまわりにはあちこちもう焼けこげだらけの人が転がっていたというんですよ。そういうときには何も無感覚になっていて、死んだ人間を見ても何とも思わなかったというんですね。それで消防車が１台あってよく見たら、運転士がハンドルを抱えたまま黒焦げになっていた。それで、消防車にちょっともたれかかったら、かさかさかさと音がして、あっという間にその影が崩れたというんですね。ぞっとしたというんですね、そのとき。俺はあの時戦争の悲惨さを痛感したといっていました。同じころ、富士宮に疎開していた人間でやはり大学で一緒になった人間が、あのころは富士宮に疎開していた、東京の３月10日の大空襲がよくわかったとい

うんですね。もう向こうから見て、空が赤くなって、ああもう東京がやられているというので一晩中大騒ぎだったと。まさか、あんなところから東京の空襲は見えないだろうと僕が言ったら、何言ってんだ、東京から富士山が見えるだろうといわれました。あのころ妙に納得させられた話でしたけれども。それほど大火災だったのですね。その日のうちに一晩で亡くなった人が、確認されて記録に残っているだけで、10万5,000人です。現代の戦争というのは戦地や戦場だけが戦いをする場所ではないんですね。銃後、銃後ってご存知ですか。銃の後ろと書く。つまり戦地や兵隊さんや国を支えている国の中の市民社会のことをいうわけですけれど、そこに住んでいる市民たちも。もう戦地も戦場もない。銃後もみんな戦場になるんです。銃も何も持たない。戦争というのは結局殺し合いなんですね、言ってみれば。もうあの時は、はっきりあの戦争は歴史の過ちだった、というふうに、私はそういう認識を持っています。それを繰り返してはならん、ということを実感させられました。あのころ、はじめから終わりまで1944年の11月ごろから東京空襲が始まりましたが、終戦のところまでで飛来した爆撃機の数が4,900機だそうです。これは、いろんなところで記録されて書かれている、新聞報道でも何度もされている数字です。4,900機、それだけの飛行機が来て東京に爆弾を落としたんです。落とした爆弾が１万1,000発。落とした焼夷弾が38万9,000発。そういう記録が残っています。それだけのものが東京にばら撒かれたんです。むしろ、戦地や戦場よりもよほど悲惨だったのではないでしょうか。私はそういう体験を踏まえて、戦後、自由と民主主義の教育を受けて、あの戦争がいかに過ちの戦争であったか、ひとたび戦争が起こると市民社会もみんな戦場になるんだという、そういう実感を持ちました。結局、戦争というのは人と人の殺し合いです。私は、やっぱりなんとしても平和は守らなければならない。平和の尊さを実感しました。それで戦争の悲惨さというのは、殺したり殺されたりという犠牲者が出るというだけのことじゃないんですね。戦後の生活にまで影響が出ました。私たちは、食糧難に見舞われて、道端にある貧乏草といわれる草まで摘んで食べました。さつまいもの苗を取ったたねがらの芋を主食の代わりに食べました。すじだらけで中身はスカスカです。配給になったすけそうだら、配給になったアンモニアくさい、半ば腐ったような鮫の肉、主食代わりにさんざん食べさせられました。あの食糧難、あれは大変な体験でした。そうして、ご承知のとおり戦後最大なインフレが起こりました。貨幣価値が紙くずみたいになりました。戦前に営々としてためられた国債を買ったお金が、みんなパーになりました。もう市民社会の悲惨さというのは実感したもの、経験したものでなければ分からない。さらにそれだけではなくて、皆さん方聞くとえっと思うかもしれませんが、シラミの問題です。生活が不衛生になって、日本全国どこに行ってもしらみがうじゃうじゃたかっているという状況でですね、さすがに進駐してきたアメリカ進駐軍はまずこれを何とかしなければならんということで、DDTを散布しました。今、あんなことをやったら、それこそ、副作用とか公害の問題で大騒ぎになると思いますが、とにかく部屋の戸を全部立てて布団は全部出して、畳の上に全部広げると。たんすは全部開けろと。引き出しも全部開けて。私どものまず頭から一列に、肩を並べて頭からしゃっしゃっと噴霧機で、DDTを掛けられて、それで背中の後ろのところに先端を差し入れてさっとやる。部屋の中にざっと撒いて、押入れの中にも撒く。部屋の中は真っ白です。それであっという間にいなくなりましたよ。シラミもノミも。虫は一切いなくなりました。まああれも悲惨な体験だった。戦争はあんなところまで影響が出るんだ。シラミも沸くんだと。私に与えられた時間は10分です。時間が、もうちょっとすぎますので、大変恐縮ですが、まだ他にも私は艦載機で銃撃を受けたことや、いろんな他にも体験がありますが、それを話している時間的余裕がありませんから、今日は1945年３月10日の東京大空襲に特化してお話をさせていただきました。やっぱりあの体験から平和はなんとしても守らなければならない、自由にものが言える世の中にならなけ

ればだめだと。それを痛感しています。それが私のあの戦争によって与えられた人生観です。ありがとうございました。以上です。

戦争体験談（小金井市平和施策検討委員会委員　永井孝子）

戦争が終結して70年が過ぎましたのに、私の記憶の中ではつい先日の出来事であった様な形で消えることはありません。私は本来ならば小金井の小学校で６年間をすごすつもりで居りましたが、５年生の時に受験を夢見て武蔵野の小学校に転校しました。その頃は、まだ本土空襲は予想しておりませんでしたので大丈夫と思っていましたが、昭和19年に入り戦況が悪化し、現実となってきました。

11月24日の東京空襲は、武蔵野と三鷹に在りました中島飛行機製作工場をめがけての爆撃が激しく続きました。６年生の２学期も終りに近い頃、この日授業中に警戒警報のサイレンが鳴り、一斉下校となりましたが、私は電車通学でしたので吉祥寺駅まで一目散に走って電車に乗りましたが、空襲警報と同時に電車は止まり、乗客は窓から飛び降りて避難場所を探しましたがなかなか見つからず、大人の中に混じって探していたその時「ここに入りなさい」と呼んで下さったおばさんがいました。その後について行き防空壕に入れていただきますと、中に小学生２人と大きなお兄さんが入っていて５人になりましたが、防空壕が小さくてぎりぎりいっぱいでした。間もなくして物凄い爆音と共に頭上をB29の編隊が通過し、お兄さんが覗いてみますとかなりの編隊が南に向かって進んで行ったとおっしゃいましたが、私達は見るどころではなく、脅えながら３人肩を組んで伏せていますと、落雷の様な地響きと同時に防空壕が崩れ、天井に載っていたものが全部中に落ちて泥まみれになったまま伏せていましたところ、気がついた時には３人の上に大きなお兄さんがおおい被さる様に支えていて下さったおかげで生き埋めにならず助かりましたが、お兄さんは泥まみれでした。その時「この人こそ命の恩人だ。」と感激し、３人は口を合わせたように「有難うございました」と言いますと「大丈夫だったか、良かったな」と言って下さいました。

今迄体験したことの無い恐怖に脅えつつ壕の中に潜んでおりますうちに空襲警報が解除され、外に出る事が許されましたので電車の開通を待つことになったその時、「ではみんな気をつけて帰るんだよ。大丈夫かい？」と言い残してあっという間に立ち去ってしまい、お名前を聞く間もなく「有難うございました」の一言でお別れし、残った子ども同士は名残りを惜しみつつそれぞれ帰途に着きました。家に入りますと両親は私の帰りを待ちきれず、母は自転車で私を探しに行くと言って家を出ようとした時、父に強く止められて間もなくすると物凄い音と共に近くに爆弾が落ちたようだったと言いました。後にわかったことは現在の江戸東京たてもの園前の陣屋橋西側百メートル程の玉川上水北側土手にかけて爆弾が投下され大きな穴が出来て五日市街道は通行止めとなり、若しもあの時母は父が止めるのをふり切って私を探しに出て居たならこの恐ろしい出来事に遭遇していたのではないかと知った時、気が遠くなる思いで、「生きていてよかったね」と親子３人抱き合って泣いた時のことは今も昨日の事の様に心の中に生きています。その後は日を増す毎に空襲は激しさを増し、授業中に警報が発令された場合は歩いて帰宅することにしたのですが、武蔵製作所を目標とした爆撃のときは防空壕が見つからず逃げまどっていました。60メートル程先に壕があると聞き避難するところでしたが、突然の轟音に足がすくみ走れなくなったその時、爆弾は壕の隣に落ちたと知らされ、たどり着けなかったおかげで命拾いしました。

またある時は吉祥寺から三鷹方向に歩いて帰る途中空襲になり、身を隠す場所を探していた時下水の中に避難することを知り、子どもは次々に入りました。中は水が流れていま

すので濡れるのを覚悟で入り、這って進みました。空襲が解除になるまでうまく時間を費やして、家にたどり着いた時はどろんこ、びしょぬれで実に惨めな有様でした。この様な体験をくり返すうちに６年を卒業し、東京に近い学校の受験は諦め、家から近い都立高女に入学しましたが、夢見ていた女学校生活とは裏腹に、日毎激しさを増した本土空襲の中での授業は妨げられ、防空壕に避難していた時間の方が長く、天井の無い長い溝の様な壕の中からは低空飛行で機銃掃射をしながら飛んで行く姿を目の当たりにした時、「私達はいつまで生きられるのかしら」と友達同士手を組み合ってささやきました。その時近くにいらっしゃった先生は「いざと言う時には会津白虎隊の様に刺し違えて死にましょう」と仕草をなされたときは呆然となりました。

銃剣術、竹槍、薙刀の稽古にも手のふるえる思いでした。生死を共にと生きた学友も今ではめっきり少なくなり、語り合う機会もありませんが脳裏からは決して消えず、今迄したためて来た記録をひもとき、命の大切さ、平和の尊さ、人の絆の有難さを若い世代の方々に語り伝えるべく、残り少ない命の声を大にして叫びます。みなさん平和の幸せをかみしめて守り続けてください。

戦争体験談（小金井市平和施策検討委員会委員　鴨下勇）

大正15年の３月の生れですから、数え90歳になりましたので、前でしゃべることも非常に下手になり、そういう男の思い出しながらの戦争体験ですのでそのつもりで聞いていただきたいと思います。大正15年生まれというのは、昭和の数え年でゆきますと、昭和20年のときにちょうど20歳なんですね。ですから、いわば生れてからほとんど戦争の影を背負って生きていたわけです。しかし、子どもはそんなことは感じないで戦争ごっこのときに兵隊の真似をするとか、そんな程度の割合のどかな日常でした。申し遅れましたが、小金井で生れてずっと小金井に住んでいるんです。それで今度選んでくださったのだと思うんですけれど。考えてみますと、昭和18年ですか、18年の２月にガダルカナル島の撤退というのがありました。実はこれを聞いたときに日本はもう負けたと思いました。というのは、そのガダルカナルの攻防戦のときにラジオなどでも将校さんがあるいは向こうから帰ってきた人たちが「ここがせめぎ合いの最前線なんだ。ここでアメリカを退ければこの戦争は山がみえるんじゃないか」とそんなようなことを言っていたんですね。それが撤退ということになって、つまり負けて逃げ帰ったわけです。大木惇夫という詩人が餓島、餓えの島だという詩集を発表して有名でしたね。それを見てこの戦争は負ける、負けていってもしょうがない。負けたと言って逃げ出すわけには行きません。周囲は一生懸命戦っている。そういう中で中学時代を過ごしていったわけです。

その年の９月、イタリアが降伏、無条件降伏ですから、欧州戦線の片がつき始めたんですが、ガダルカナル撤退だということを聞き入れて、旧制中学でしたけれども、これでは、早々戦争の役に立たなければいけないんじゃないか、私もずいぶん考えまして、東京府立航空高等学校というのを希望し、幸いそれが受かりましたので立川の中学を卒業し、南千住のほうへ通いました。ちょうど私たちが進学するときが境目でして、東京都制に変わりましたので、すべてそれから都立に変わったんです。高等工業という制度も専門学校に変わり、それからは都立航空高専生という名前で戦争を体験することになりました。行ってまず驚いたのは建物の強制疎開に勤労奉仕することでした。広い密集したところは、道筋のようにうちぬいて壊し、焼けてきてもそこまで止まるようにしようというわけで、かなりいろんな物が入っている家なんかを壊しまして、悲惨だなと感じました。

航空高専には航空事情に関心のある友達が入ってきていました。飛行機の音を聞いただけであれは何だと発動機の音で機種を聞き分けるのです。そういう連中ですから色々戦況

についてもひそひそ話しました。もうだめだなというと、そうだなと言う。欧州戦線を片付けたらB29をインドを通って早く日本戦線に持って来る。持ってくるのに飛行場を大きく作らなければならないから、サイパンに必ず上陸してくる。サイパンを攻略されたらもう日本はだめだぞ。めちゃめちゃにやられちゃうぞ、ということを話し合っていたわけです。そのサイパンにアメリカ軍が上陸してきたのが翌年19年６月の15日で、３万人が全滅したのが、７月何日かです。ほとんど１ヶ月で攻撃されちゃったんですが、その頃は火炎放射器で穴を焼き焦がしちゃう荒っぽい方法でどんどんサイパンを占領しちゃったんです。攻略したら、穴ぼこは鋼鉄板でふさいで飛行機が発着している。そういう話を聞きまして、まあかなわんなと感じました。サイパンを落とすとすぐに２～300機のB29が東京あるいは日本のあちこちの都市を大空襲しだした。その頃には爆弾が日本の家屋には能率がよくないというので、生ゴムを仕込んで壁や柱にくっついてそこで燃え出すというものを発明してそれをポカポカと落としましたから、もうとても手に負えないわけです。まあともかくもサイパンが落ちてから大変なことになったと思いました。

その年の８月23日に法令で学徒動員が発令され、今までのような細かい勤労奉仕は打ち切られ、長期動員の学徒という身分になりました。行く先は中島飛行機三鷹研究所です。現在のキリスト教大学あたりが中心で南と西に３倍くらい敷地をもち、中島の本荘群馬の太田から引越しをし、設計試作を進める部署でした。航空機科40、発動機科40、計80名は細かく分かれて配属されました。私は機体設計に２人組で割りあてられたのです。設計をやっていた人たちが応召していく。その後をわれわれ多少製図ができたり、飛行機関係の計算の相手ができる者が埋めているのですが、私らには自信がなく、俺たちがやるようじゃだめだろうな、三菱（ゼロ戦）はすごいらしいぞ、とひそかな情報交換をしていました。私たちが行ったときは、キ－87と登録された戦闘機の機体の完成段階で、最後の破壊試験を徹夜で実施するのを見せてくれたりしたのですが、これは要求された性能が出なかったため、没、つまり正式採用されませんでした。キ－87はB29を撃墜する目的の高高度戦闘機だったので、B29を落とすことは出来なくなったわけです。足元に火がついた状況で、機体設計部はキ－115というのを手がけたのです。私は水平尾翼を任されました。学徒なりに張り切って図をかきました。略して誰でもがタカケンと呼んでいた研究所は西端が小金井市境でしたから、私が生まれ育ったはけの道の突き当たりがタカケンの西の通用門でした。動員が始まってから、私は徒歩で20分あまり、門番もいないこの通用門から出入りしていましたから、徹夜に近い仕事も平気でした。キ－115の試作と併行して研究所全体の疎開も細かい計画に従って進みました。予定地は東北、岩手県の黒沢尻です。

３月10日の東京大空襲はそんなときでした。「東京が燃えている！」小金井の畑からは遠くではあるが東の空の半分くらいまでが赤く染まっていました。翌々日くらいか、町の警防団に要請があり、焼け跡の始末にトラックに乗せられて被爆地に出向いた兄たちは真黒な姿で帰ってきました。焼死体を放り投げてトラックへ積むのに焼けぼっくいの木のように「ガサッガサッ」と音がしたこと、屍臭が沁みこんで飯が食えなかったことくらい、僅かな話しかしませんでした。タカケンに出勤はしましたが、僅かの学友が出てきていて、大火の物凄さを聞かされました。タカケンで用意して、かなりの人数が利用していた新宿の寮は焼け失せたのですが、死者は柴山という中隊長格のいい男が防火の炎の中で不明になった１人でした。設計にいた竹川は非常に衰弱して声もはっきり出せないままで出勤しました。焼け跡へ行って、防空壕の中に入れといたレコード盤の山が白くその形を保っているので、指で触ったら灰の山ですぐ崩れてしまった。1,000枚近くあったのに、と非常に残念そうに話をしました。こうして、実際に負けた側の立場になって、「戦争って何だろう、勝つ負けるということではなくて、文化を破壊する。文化を破壊していくのが戦争じゃないか、もちろん人も殺すし、向こうの財物も壊しちゃったり奪おうとする。

しかしこれはね、人間が営々と築いてきた文化を破壊するものであるということをつくづくそのとき思いました。もうこういうことはやっちゃいかんというふうに思った。

タカケンはキ－87がだめになったあと、キ－115という応急的な飛行機を手がけ、私たち航空高専生も全員この完成に力を貸したのです。３月の何日かに調布飛行場の一端で「進空式」のようなお披露目をし「剣－Ｉ」と正式名称を受けました。

上陸してくる敵に小型爆弾を落として食い止めようという狙いで「隼」より小さめの機体に、保有中の隼のエンジン200近くを活用しようというものでした。剣－Ｉが生産過程に入るのをにらんでかもしれませんが、学徒も疎開に同行してくれと頼まれましたが、機体科の僅か５名が応じただけです。５月の初旬に黒沢尻の呉服屋に同宿先を割り当てられ、黒沢尻女学校（機外設計部）に通いました。ここまで来たのに、艦載機の機銃掃射を受けました。８月15日の終戦の詔勅はここで聞きました。３月10日のときに心に受けた傷、これは戦争というものはどういうものであるかということをつくづく反省というか、突き詰めて考えた一日になったわけです。

2　平成27年度小金井平和の日記念行事講演

昭和20年３月10日の東京大空襲で家族を亡くして

塩路　耕次（80歳代　男性）

私は、「戦争体験者」といっても、被害者の立場でのお話をいたします。

私は、昭和20年（1945年）３月10日の「東京大空襲」で家族を亡くしました。

ただ、本当はお話ししたくない。私にとってあまりにつらい思い出なので、家族にぽつり・ぽつり当日の様子を具体的に話しだしたのは、70歳を過ぎてからでありました。30年近く勤めた職場でもその後の職場でも、誰１人にも話してきませんでした。

しかし、私もこの１月に84歳になりました。戦争体験者が少なくなってきている。黙っていては伝わらない。そこで、私も思い切って、皆さんの前でお話をする決心をいたしました。

私は、いまから71年前の昭和20年３月９日の深夜から10日の未明にかけてのアメリカ軍のB29という大型爆撃機による「東京大空襲」で家族４人を亡くし、私一人が取り残されることになりました。

昭和７年（1932年）１月生まれの私は、当時旧制の都立中学校の１年生で満13歳でした。当時56歳の父、47歳の母、旧制の高等商業学校２年生で20歳の兄、国民学校（いまの小学校）４年生で９歳の妹の４人の家族と突然永遠の別れをしなければならなくなりました。

東京大空襲で東京の中心部の広い範囲が焼け野原になったといっても、想像がつかない方が多いと思いますが、鉄筋コンクリート造りだった国民学校、警察署、少しの民間ビルなどの焼けビルが点在する以外は、本当に野原のようにまっ平らになってしまいました。住宅も商店もほとんどは木造建築物で容易に焼き払われてしまったのです。この日、焼夷弾による爆撃で約10万人の人が亡くなったといわれています。

私が住んでいたのは、この多摩地域からみると東京の東部で、いまの中央区日本橋、当時の日本橋区の浜町１丁目というところです。現在は、都営地下鉄新宿線で「馬喰横山」の次に「浜町」という駅があります。隅田川に接した下町です。

「浜町」駅の地上に出ますと、あとでお話しする「明治座」という立派なお芝居の劇場があります。

日本は、昭和12年（1937年）から中国と「日中戦争」を戦っていたのですが、さらに、

私が国民学校４年生だった昭和16年（1941年）12月８日には、アメリカ、イギリス、オランダなど「連合国」を相手に宣戦布告し、「太平洋戦争」を始めました。はじめのうちは真珠湾攻撃などで戦果をあげていたのですが、アメリカ軍にだんだん攻め込まれて、昭和19年（1944年）７月にはサイパン島がアメリカ軍の手に落ちました。そして、アメリカ軍の超大型のB29爆撃機が東京に飛んでこられるようになり、東京空襲が現実味を帯びてきました。

東京への空襲は、昭和19年の11月下旬から三十数回あったのですが、比較的小規模で、被害もそれほど大きくありませんでした。

私の家族はみんなのんびりとした気持ちで生活していました。両国橋を渡っていまの墨田区にある中学校に徒歩で通っていた私は、B29が１機青空高く飛行機雲の尾を引いて飛んでいるのを見て美しいなと思ったりしていたくらいでした。妹は、１回１人だけで知り合いの農家に預けられ、疎開したのですが、なじめなくて１か月くらいで帰ってきてしまいました。

昭和20年３月９日の夜は本当に真っ暗な夜でした。夜遅く警戒警報が10時30分に鳴り、それがいったん解除されてからしばらくして突然数多くの、超大型のB29爆撃機の轟音が鳴り響きました。かなり超低空という感じでした。地響きがするくらいに思えましたが、後で調べるとサイパンなどのマリアナ諸島から房総半島を経由して、325機が高度2000mくらいで襲ってきたということでした。０時７分に爆撃が開始され、空襲警報が出されたのは、爆撃が開始された８分後の０時15分だったようです。

この日の空襲の主だった爆撃対象は本所、深川、浅草など隅田川の東側の各区と、隅田川の西側の、私たちの住む日本橋区の一部で、アメリカ軍に「焼夷第一地区」と名づけられていて、いわゆる「じゅうたん爆撃」によって住民を狙いうちにした無差別爆撃でした。

３月９日の夜、真っ暗闇のなか私たち家族は、父母をはじめ５人が立ったまま話し合い「いよいよこれは逃げるより仕方がなさそうだ」ということになったのですが、父は「自分は家を護る」といって自宅に残りました。私の家は「金座通り」（いまは「清洲橋通り」という名前に変わっています）から４～５軒入ったところでした。母と兄、妹と私の４人はリアカーに荷物を積んで家を出ました。しかし、これは20mほどのところ、金座通りの手前ですぐ放棄しました。父のその後の行方は分からないままです。

いま考えると、「お父さん一緒に逃げましょう」と声をかけなかったことが悔やまれます。そのころ、戸主は、自宅を守るべきだという軍の通達が出ていたのだという話をテレビで比較的最近みておりますが。

焼夷弾は六角形の筒状の長さ50cmくらいの油脂焼夷弾（ゼリー状の油が入っている）などで、数十本をひとつの束にした「クラスター爆弾」と呼ばれるもので、飛行機から落とされて途中、空中でばらばらになって落ちてきます。私の家の近くには落ちませんでしたが、周りに落ちて起きた火災に囲まれる形で逃げ場を失いました。焼夷弾は戦略地図上の升目の交点に落とされ、周りからの火で追われることになります。

母、兄、妹と私の４人で金座通りに出て、最初は右手の浅草橋方向に向かって逃げようとしたのですが、浅草橋のあたりは煙が上がっていて、もうかなり燃え上がっているように見えました。

これは無理だということになって、逆の左方向に向かって歩き出しました。少し先の交差点で右の人形町方向に金座通りを渡ったのですが、右側の久松消防署の前で、消防自動車が２台、歩道から乗り出すような形で燃え上がっていました。「ああこれではこっちの方向も駄目だ」ということになり、もう１回、もとの交差点を左側に戻り、交差点を明治座方向に渡って、明治座の前の歩道を明治座の方に向かって歩き出しました。

明治座の前の歩道には、いつの間にかどこから集まったのか、歩道の幅一杯に大勢の人がいて押すな押すなといった感じでした。この頃、まだ歩道沿いの家々は燃えておらず、火の粉が降ったりということもありませんでした。

４人は手を繋いで歩き出したのですが、少し行った小鳥屋の前で、繋いでいた私の手が家族の手（多分、母の手）から離れてしまいました。ほんの一瞬のことでした。その時点では、大勢の人びとが前へ前へと向かって押し進んでいく感じで、私は、その集団の中に巻き込まれて家族から遅れてしまい、あっという間に母たちの姿を見失ってしまいました。

大勢の人たちの人波の流れのなかで押し流されて、私はこの人たちと一緒に「明治座」という劇場の建物に正面入り口（当時は金座通り側に入り口がありました）から入りました。私は、１階正面入り口からすぐ左手にある廊下の奥の角（すみ）まで行って座り込みました。ちょうど明治座の外壁・興行看板（役者絵）の裏側あたりだったと思います。私以外、数人の大人がかたまって車座の形で座っている中に座っていました。あとで思うと１階廊下にいて、地下に降りたり、観客席に行ったりしなかったのが命拾いできた一因でした。

しばらくすると、だんだん煙が充満しだしました。タオルで口をふさがないと息が苦しい（タオルを持っていてよかった）。そのうち、どこからかバケツの底のほうに水が少し入ったものが廻されてきました。タオルにその水をしみ込ませて口にあてて苦しくなるのを防ぎました。

その場所は薄暗くて、誰の顔も見えませんでしたが、そうかといって真っ暗でもなく、うっすらと明るかったように思います。人数は７～８人程度だったと思います。

どのくらい時間が経ったか分かりませんが、しばらくして、男の甲高い声で、「緞帳（どんちょう）に火がついたぞー」と叫ぶのが聞こえてきました（緞帳というのは舞台に下がっている幕のことです）。私は、この声を聞いて、このままここにいては駄目だと思いました。そこで、立ち上がって、うずくまっている誰かの肩をまたいで廊下を戻り、入ってきたのと同じ正面入り口に向かい、そこから外に出ました。

今にして思えば、この時の一瞬の判断のおかげで命が助かったのだと思います。このとき立ち上がっていなければ助からなかったと思います。他に立ち上がった人はいませんでした。

明治座の正面入り口の前の道路の真ん中に安全地帯がありました。金座通りは自動車道路なのですが、道幅が広く「18間道路」と呼ばれていたくらいでしたので、横断歩道の途中、中央部分に歩行者用の安全地帯がありました。都電の停留所と同じように細長い形で、両端に湾曲した囲いが造られていました。ちょうどうずくまり、身をかがめると隠れられるくらいの高さです。その囲いのうち、北側の浅草橋側にうずくまって朝まで何時間か過ごしました。長い時間でした。他に誰もおらず、まったく１人だけでした。

明治座の入り口を出て、安全地帯に渡ってすぐ後ろを振り返ると、女の人が出てきました。その人の背中にぱっと火がついて燃え上り倒れそうになって、入り口全体が明るくなったのを見たような気がします。幻影だったと思いたいところなのですが。

安全地帯に座っていますと、浅草橋方面、すなわち北の方向から無数の焼けトタン板がびゅーん・びゅーんと音を立てて、次から次へと、ものすごい勢いで頭上をひっきりなしに飛んでいきます。防空頭巾をかぶっていましたので耐えられましたが、首をすくめてやり過ごすしかなく、大変長い時間に感じました。

当夜の強風の上に、火事で風が起きたのかもしれません。兄のお下がりの厚手の学生オーバーも役立ちました。その頃の木造家屋には外壁や屋根にトタン板がたくさん使われていて、それが飛んできたのです。防空頭巾をかぶっていたお蔭で、首筋に火の粉が一つついただけで、やけどをせずにすみました。安全地帯の囲いは防御壁になってくれまし

た。

そのうち、明治座とは道路を挟んで向かい側に並んでいた３階建てのいくつかの建物が燃え上がりだしました。ぼんぼんと音がしてすごい勢いで燃え上がります。その様子はいまでも眼に焼きついています。これは非常に怖いものでした。熱さもかなり熱かったように思います。じっと耐える以外なく、かなり時間がたってから建物が焼け落ちて勢いが弱まったときはほっとしました。

内部が燃えたのに、明治座の建物の外壁は、幸い焼け崩れませんでした。こちら側も燃えていたら、助からなかっただろうと思います。安全地帯にうずくまっていた時間はとても長い時間でしたが、朝が白み始めたときはやっと安堵の気持ちになりました。

先ず、わが家のあった場所に戻ってみました。裏にあるお蔵は無事のようでしたが、わが家のところはまっ平になっていて、父の商売であった印刷業の廃業前に買い込んであった印刷用紙が灰になって、積み上げた用紙の形のままに残っていたのだけが眼につきました。

私の母、兄、妹も、私同様人の流れに押されて明治座に入ったものと思っています。いつかは戻ってきてくれるものと期待しましたが、どこから現われることもなく、むなしい期待でした。自宅に残った父とともに「戦災死」として扱われました。

明治座に入った人々のほとんどは亡くなったようで、亡くなった人たちの人数は千数百人ともいわれます。しかし、混乱状態で確かな人数は分かりません。明治座はその頃としては数少ない鉄筋コンクリート造りの頑丈な建物でしたので、安全な避難場所として推奨されていたようです。ごく少数、幸運にも私のように出入り口やあるいは窓から外に出て助かった人たちもいるようです。

明治座横（現在の正面入り口側）の遊歩道の片隅には明治座のなかで亡くなった空襲犠牲者を悼んで建てられた小さな観音堂があります。

また、３月10日には毎年、東京都内であったすべての空襲で犠牲となった人びとを悼む慰霊の法要が東京都の主催で、両国横網にある慰霊堂で開催されております。この慰霊堂の敷地には、「東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑」が造られ、碑の内部には、亡くなった人たち一人一人のお名前を墨で書いた和綴じの「東京空襲犠牲者名簿」が安置されております。

明治座の裏手には、「浜町公園」という大きな公園があった（いまもあります）のですが、そのころ陸軍の高射砲陣地になっており、立ち入り禁止で避難民は入れませんでした。明治座の窓から出て、公園近くの防空壕に入って助かった人はいるようです。

久松国民学校は、立派な鉄筋の校舎で、安全な避難場所と考えられ避難民が入りましたが、校舎内や校庭で多くの人びとが亡くなりました。浜町国民学校でも多くの人びとが亡くなりました。

久松警察署では、最初のうち避難民を中に入れなかったのですが、途中から中に入れたようで、多くの人が助かりました。警察署は焼けなかったのです。

久松国民学校で私と同学年では、約160人の生徒のうち、６人が亡くなりました。

中学校の同学年では、約300人の学生のうち、23人が亡くなりました。爆撃の一番激しかった本所、深川、浅草などに住んでいた学生が多かったのです。中学１年の同じクラスで仲良しだった浅草に住んでいた秀才の友人も亡くなりました。

日本橋と本所、深川、浅草の間を流れる大きな隅田川の川面や両岸、そして言問橋、新大橋など多くの橋の上での犠牲者の数はおびただしいものだったようです。浅草の観音様の近く言問橋のたもとには犠牲者を悼む碑が建てられております。

この日の東京大空襲のあと、終戦の８月15日までの間に、東京も何回も空襲を受けたほか、大阪、名古屋、神戸などの大都市、それに中小都市も含めて日本国中のほとんどの都

市がアメリカ軍の空襲で焼き払われました。

いろいろの偶然に助けられて１人生き延びた私は、埼玉県の栗橋から利根川を越えたところにある知り合いの農家で１か月間ほどお世話になった後、母の一番上の姉である伯母と連れ合いの伯父に引き取られ、伯父の商売の呉服屋の手伝いをしながら中学校に通い、高校、大学まで卒業しました。

そして、社会人となり、結婚して２人の子供に恵まれ、２人とも立派な社会人として活躍してくれています。また、２人の孫が頻繁に遊びにきてくれて幸せな毎日を送っております。

自分たちも同じ日の空襲で罹災して住宅をかねた呉服の店を失い、苦しい生活のなか、他の親戚が見向きもしなかったなかで、私を引き取って育ててくださった、当時既に70歳を過ぎて高齢であった伯父伯母に心から感謝しております。中学校、高等学校、大学と進学、卒業して社会人となることができました。

中学校のクラス担任で数学の祥雲先生には頻繁に私を自宅に呼んでいただき、小さいお子さんたちとご一緒に食事をご馳走になりました。このような先生の励ましがなければ、私は立ち直ることができなかったと思っています。私が今日まで生きてこられたのは先生のお蔭です。中学の友人たちも折に触れて声をかけ励ましてくれました。先生は２年ほど前、97歳で天寿を全うされました。

今日の平和な日本で、戦争の悲惨な現実はなかなか感じとりにくいとは思いますが、私の願いとしては、国家の間での紛争は、絶対に「戦争」という、小さい小競り合いから始まっても、いったん始めてしまうと人と人が際限なく殺しあうことになる、このような手段に訴えることなく、粘り強い「外交交渉」で解決すべきだということです。私たちも頑張らなければいけませんが、70年間続いてきた平和を皆さん、特に若い皆さんのお力で護りきっていただきたいと思っています。

以上で、私のお話を終わります。

お聞き頂き有り難うございました。

〔参考〕「東京大空襲・戦災誌：都民の空襲体験記録集」第１巻―第５巻
1973年３月10日発行。財団法人「東京空襲を記録する会」

国民学校１年生の見た戦時下の暮らし

千村　裕子（70歳代　女性）

私は国民学校１年生のとき、終戦になりました。国民学校１年生は、今の小学校１年生ですから８歳ですね。自分の記憶としては７歳からがちゃんと思い出せることなので、もうそのときはもちろん戦争がありました。それで私の話すタイトルは、「国民学校１年生が見た戦時下の暮らし」。戦争というと、昔の歴史のドラマなんか見ると敵と味方が前線で鉄砲や槍で戦う、そこが戦場であり、戦争であると思うのですが、だからそこに関係なければ、戦争はもう自分に関係ないというふうに思いがちなのですが、実はそこの戦争に出ている人たちのうしろには、両親もいるし子どももいるかもしれないし親戚もいるかもしれない。それで鉄砲を撃ったり、槍を投げたりそういう人たちのうしろを「銃後」といって、私たちは「銃後の人たち」と言われていました。それで私はずっと「じゅうご」って、15歳のことかなと思っていたのですが、ずっと後になって銃の後ろにはたくさんの身内の人が続いているのだと、そしてその人たちはいわゆる普通の市民なんだということで、もちろん幼稚園の生徒も小学校の生徒もみんな戦争があるならば戦争に関わっているということを言っていると思うのです。

色々な思い出があるのですが、今言ったように幼稚園の時からの思い出を一つだけ憶え

ていて、幼稚園に入園した時に仏教幼稚園だったのでお釈迦様の盛大なお祭りがありました。母と行ったのですが、お釈迦様に供えて甘茶をかけて、そしてお供えした物が、なんとそれでも嬉しかったのですが、小指ぐらいのさつまいもの茹でた物が４、５本でした。それでも母はもっと欲しいから、みんなの中に入っていって母の凄まじい姿、さつまいもの小指くらいのを１本でも多く取ろうとしている母の凄まじい姿が今、一番最初の戦争の時の思い出となるのです。このようにもう食べる物がまったくありませんでした、まったくないのですよ、何もないのです。配給というのがあって配給はその家の家族の人にカードが来て、それを見せて配給を取りに行きました。何が配給されたか今私が思い出すままに書くとしたら卵の黄身、茹でた卵の黄身が粉になったもの。さつまいものつるを５センチぐらいに切って干したもの。葉っぱはありません。葉っぱは食べたいけれど、もっと偉い人しかないと言われていました。みかんの皮、みかんの皮は刻んで、豆のかすのおからの干したのも配給になったのでそれと混ぜて食べました。

そして実は私は東京に住んでいたのではなく、新潟市にいました。地方にいたのです。新潟というのは佐渡の向かいですからお魚もいっぱい獲れるし、お米、なんといっても越後平野が連なっている米所です。けれど幼稚園の時、お米なんか見たことがありませんでした。けれど、そこからたくさんのお米が船で運ばれて、戦地に行ったり色んな所に行くので、そのお米の船が沈没するのです。たくさん沈没した船の中のお米が海の底に貯まるので、それをさらって持ってきて配給になりました。「濡れ米」といいました。濡れ米はずっと海の底にあった場合もあるし、１週間だけあった場合もあるのでしょうけれど、皆さんご飯を炊く時に１日も２日も水に浸けたお米はてんでもうご飯としては成り立たないように、海水に１週間も10日もそれ以上浸かったお米がどんなにたくさん配給になっても、それは本当に食べられる代物ではありませんが、食べなければ食べ物がなかった。それをどのように保管したかといいますと、大量に配給になるので、畳を上げるのですね。底の板が出てきます。そこに藁で作ったむしろ、昔乞食が座っていたむしろみたいなそういうのを敷いてそこに濡れ米を広げます。夏ですとすっぱい匂いが立ち昇ってきますが、唯一の食べ物ですから、やっぱり大事にして食べました。私は名前は「ひろこ」というのですが、あだ名は「ひょろこ」でした。今思うと小学校にあがったときも体重22キロでしたので、今22キロの１年生なんているかなと思いますが、「ひょろこ」ってずっと中学くらいまでのあだ名でした。そしてもちろんお味噌やお醤油やお塩はありません。お塩は食べないと生きていけないからほんの少し配給になりました。お塩の配給取りに行きました。けれどそんなものじゃとても足りません。私の家は７人家族でした。子どもが３人に、母と父と祖母と、それからまだ結婚しない父の妹がいました。あとになって戦争が終わってすぐにもう一人妹が生まれたのですが、その７人を養うにはとても大変だったのです。そして、要するに燃料なんてありません。ガスなんか今は点ければパチッとつく、電気を点ければ電気のヒーターが何か煮たりできる、そういったものは一切ありません。何が燃料だったかというと「亜炭」というものをご存知ないかどうか分かりませんが、石炭になる石炭という素晴らしい黒いダイヤモンド、あれは土の中に大昔、何千万年前の昔、木が埋もれて化学変化して石炭という黒いダイヤモンドみたいになって、それを燃やすとすごい火力が出るわけです。そこになる途中の「亜炭」、それが配給になるのですが、もう全然火がつかないし、くすぶるし、いぶるし、もうあれで火を起こすということは至難の技でした。台所に張り付くようにして皆で必死で火を育てるって感じでした。そしてマッチなんかは配給ですからもったいないですから、マッチは宝物ですから、シュッシュと擦れません。そこではがきを切って縦に10枚くらいに切って硫黄を溶かしてそれを塗って、付け木というのをつくってそこに火をつけてマッチが１個失敗しても少し付け木に火をつけてそれを使っていました。けれど、囲炉裏でもないですから次の日お料理する時は

付け木は使えませんからマッチをまた使うわけですね。そしてこのように煮炊きも大変でしたし、なによりもお米もない、濡れ米であるし、お魚なんて見たこともない。新潟は今は鮭が素晴らしい塩引きというのが村上というところに採れるのですが、子ども時代に鮭なんて見たこともありませんでした。見たのは鮫、鮫が配給になりました。鱈が配給になりました。鱈って今、鱈なんか鍋に使うけれども、昔、鱈にしらみがいて、そのしらみって、寄生虫なのです、そんなのを食べていました。

そして祖母と海水を汲みに行きました。一升瓶を子どもも１本持って、祖母も１本持って私と弟と、妹は３歳くらいでしたから、３本、海水を汲んできます。そして帰り道に松林を通るのですが、松の葉が落ちて枯れています。松の葉は皆さんご存知かと思うけれど、普通の植物の葉っぱと違って針ですね。しかも緑のうちは弾力性があって柔らかいのだけれど、枯れてしまうと全部針です。けれどそれを祖母は大風呂敷に包んで、その上に３歳の妹をおぶうのです。松の針が刺さるので、痛い、痛いというのですがそのうち慣れるのですね。でもしばらくして裏返しにしておぶうのです。そうすると今度は、背中が痛い、痛いと。そういうふうにして海岸から家までは３キロぐらいあったかな、そこに一升瓶を持って、そして松を持って帰ってきて、一升瓶の塩水はお味噌汁といっても味噌はありませんから、野菜もありませんから、配給になった変なものの、変なみかんの皮とか、さつまいものつるをふやかしたようなものを食べて、子どもは泣いていました、いつも泣いていました。そしてお腹が悪くなるのです。いつもおいしい物が食べたいと言っていました。それでそこら中のお庭は畑になるのですが、実は私の父は小学校の教員でした。母も教員でしたので、いつも生活の中には父も母も学校に行っているのでいませんでした。父は教員でしたから、戦争に行かなかった点は良かったのですが、とても貧乏な生活をしました。庭を畑にして慣れない畑仕事をするのですが父は鍬で足の指に怪我をしたり、すごく能率の悪いことをしてかぼちゃなんか育てていて、育てるなんて言っても肥料なんかないのですよ。あの時の肥料はなんと柄の長いひしゃくでボッチャンとトイレから汲んで、お水を足してかき混ぜてそれを撒くのです。それでかぼちゃが育って、「ああ、もうじき収穫できるな。」と思うと必ず盗まれるのです。自分たちが作った野菜を食べたことはありません、盗まれるのです。じゃあ早めに採るかというとそんな早めのものは美味しくないので今度は大丈夫と期待するわけです。

そんなふうに食べる物がないので、祖母はリュックを担いで買出しに行きました。越後線の列車の屋根までみんなが乗るのです。屋根どころかドアなんか閉まらない、窓にみんなくっ付いて、そして祖母は買出しから帰ってきてほんのちょっとだけじゃがいもだか玉ねぎだか買ってきて、列車の屋根から飛び降りて骨を折って歩けなくなってしまいました。祖母のことが本当に可哀想で私たち子どもながらに、今考えると60歳になったばかりぐらいかな、50代の終わりかな、そんな祖母のことを思うとね、本当に涙が出ます。

そして母は自分の着物を３、４枚持って、たたんで大風呂敷に包んで担ぐとすごい重い、１枚でも重いのですよ。それで３、４枚持っていって10里の道を歩きました。10里って、その頃母は10里だというのですが１里が４キロでしたから、40キロ、マラソンコースくらいかなと私は思うのですが、小学校１年生でそれを朝早く暗いうちに起きて歩きました。靴なんかないのですよ。靴なんか売ってないのです。何を履いたかというと長靴を下のほうだけ切ったようなゴム短靴というのが売っていて、それを履くのです。母たちは下駄でした。下駄の鼻緒というのもないですから、自分で縫って履いたのですね。それでその短靴に靴下なんかありませんから、がばがば裸足で履いてとうとう私は40キロの道を短靴を履いて、靴擦れが出来て、そして帰ってきてからその靴擦れが膿んでしまいました。薬なんか全く売っていません。薬屋さんもありません。どうしたかというと、どくだみの葉を取ってきて洗って、それをいちじくの葉っぱに包んでしっかり針金で縛ってお風呂を

焚くとき、お風呂といったって今みたいにガスをつけてシュッと焚くのではなくて、薪なんかないのです。大工さんの所から鋸で引いた木屑をもらってきてそれに火をつけるのですよ。考えられないですね。くすぶって、いぶってお風呂の番は涙しながらだったのですけれど、そこに入れるのです。そうするといちじくの葉が熱でもって中のどくだみを溶かします。しばらくしてそれを取り出して中を見るとどくだみの葉がどろどろと練り薬みたいになります。今でも東城百合子先生という自然治癒の先生の本にはどくだみの葉が良く効くと書いてありますが、和紙を丸く切って、まん中に穴を開けてそこにどくだみのどろどろを塗って、靴擦れに貼るのです。けれど栄養も悪いし、ばい菌もそれでは取れないのでとうとう私は幼稚園は全部休みました。中学生になってからお友達に「どこの幼稚園だったの。」って、「〇〇幼稚園だったよ。」って、「あんたなんか見てないよ。」と言われました。それは私は本当にお釈迦様の日から数日しか幼稚園に行ってなかったので、幼稚園の中の友達は私を見ていなかったわけです。

そんなで食べる物が本当になかった、それでこの間、南小の学童のお父さんたちがさつまいもを作って、さつまいもの芋掘りをして、葉っぱと茎を捨てて山のように捨てて行ったのです。今は肥料が良いですから葉っぱも茎もすごく繁っているので思わず近寄って、昔を思い出したら、用務主事さんがきて「それごみだよ。」と言われて、昔は食べたかったのにって感じでその場を離れたのですが、そんなような食べるものもない、そういう生活でした。本当に今思っても、戦後70年なので記録を書いておこうと思って、夏にこれを書いていました。そしたら、お中元の贈答用のカタログが来ました。いくら、蟹、色々、ものすごく贅沢に見えました。今これを私が書いている時に、今配られているカタログのそれらは皆が買ったりして食べているのです。私はそれははっきり、買っていません、買いません。質素な暮らしというのをそれから戦後ずっと守って続けてきた、それが大切な戦争体験を活かすことだと思っています。贅沢な外国から取り寄せた帆立貝だか、なに蟹だかそういったものは食べません、一切食べません。平和というものを守るのだとしたら、そういうことだと私は思っています。

次に２番目として、生活の様子なのですが、生活の様子は時間の関係もあるので少し省略して話したいと思いますが、家にあったお鍋やお釜類、金属は全部、献納しました。献納って何かな、鍋や釜を班長さんに出すことなのだけれど、今日これを書いて、一応広辞苑を引いてみたら、献納というのはこの正しい意味はびっくりしました。献納、国家に金品を奉ること。奉ったんじゃないのですよ、班長が来て、「銅で作った釜、出しなさい。」、「この鍋は銅で出来ているから、出しなさい。これは鉄。」、ステンレスなんかありません。銅と鉄だけですから、ほとんど全部持っていかれてたった一つのお鍋で全てのことをしました。それを献納といいます。

それで私の家は全然贅沢でなかったけれど、贅沢な人たちはものすごい指輪だとかネックレスだとかそういったものを献納しました。だから班長の家に行くとダイヤの指輪とかサンゴの首飾りがざっと置いてあるのですね。子どもながらに見たこともない贅沢品にそこで触れました。そして生活の中で暮らしているうちにあちこちで空襲があって、次は新潟だと言われていたので、家族みんなで疎開しました。新潟はちょっとした小都会ですけれど、全員が疎開しました。７人の家族はリヤカーに、リヤカーというより大八車だったのです。お借りして、大八車って歴史ドラマに出てくる大きな車に死体を乗せてやっているあの大八車で、家族が６人疎開しました。私一人は祖母が預かりたいということで、新潟県新津市というところに一人だけ疎開して家族６人は大八車を引いて、白根というところの田舎に行きました。途中で日が暮れて野宿したそうです。野宿なんて考えてもみないことだったのに、野宿したそうです。まだ私が小学１年ですから、弟は私より２歳下です。妹はまたそれより２歳下ですから、赤ん坊連れて大変だったと思います。そしてそん

な所に疎開して私は祖母の家に疎開したのですが、祖母の家に疎開してB－29は来ました。けれど、防空壕なんていう感覚はないので祖母はB－29の警戒警報というのが鳴ると押入れに入るのです。それで行李の蓋開けて柳行李の中に入るのです。あんなことしても何にもならないのに、祖母は必ずB－29の警戒警報のサイレンが鳴ると行李の中に入りました。今考えるととっても滑稽なのですけれどね。

祖母は子どもが６人いました。長女が私の母で、教員、長岡師範というところで教員になっていました。長男は戦争が終わる５年前に20代で戦死しました。てつおさんというのですが。そして次男は大佐という役付きになって戦争に行っていました。そして三男と四男、つねおさんにとしろうさんという人が20になったばかりなのですが、戦争が終わる１年前に三男が応召しました。応召っていっておじさんが応召したといって、なにかなと、これを書くにあたって広辞苑を引きました。そしたら、お召しに応ずるなのです。赤い紙が来たら、さっさと戦争に応召しました。そして応召したら出征しました。出征というのは敵に向かって戦いに行く。それでその三男は予科練に入っていたので途中でヴェトナム（仏印）というところから帰ってきて予科練のすごくかっこいい七つボタンで帰ってきて、おじさんすごいと思いました。２人のおじさんがお日様の差す縁側で寝転んで足の蹴りあいをしてるのですよ。20になったばかりの少年に近い青年がまだ戦争に行かない時に、日の当たる縁側でふざけっこして取っ組み合って足でけっぽりあって、間もなくすぐ、戦死しました。それで次の四男ですが、四男は戦争が終わる年の６月ごろ応召しました。召されて出かけていきました。そして６月20日に死にました。死ぬときは戦地に行く、外国の、どこか硫黄島のようなそういう戦地に行く予定でしたが、船も飛行機も無くて、港に待っている時に盲腸炎になって、盲腸が腹膜炎になって、治療の甲斐どころか、治療なんかできないというので「お母さん、お母さん、お腹が痛いよう。」と言って死んだと友人からあとで祖母が聞きました。人の死に方が犬死なんていう言い方は本当に失礼でもあり、そんな言い方はしたくないのですが、もう８月に戦争が終わるのに６月に応召されて、出征してそして船を待っている間に腹膜炎で手術もされないで死んでしまったおじのことを思うと、私はこれに応募する原稿を書いて涙が出ました。犬死なんて言葉はしたくないけれども、ですから祖母の４人の男の子のうち、長男はさっさと戦争で死にました。この間戸籍謄本を取り寄せて一体何歳で死んだのだろうかということを調べましたら、ほとんどみんな24歳とか23歳でした。それで次男は大佐になっていたのでどこかに行っていました。三男と四男はそういうわけで死にました。そして母の一番下の妹は長岡女子師範の生徒でしたが、富山県に軍事工場があって、そこに風船爆弾というのを作りに行って、毎日風船爆弾を作っていたのですが、戦争が終わる間際には材料がなんにもなくなって、毎日ねじを整理していたそうです。大きいねじ小さいねじを並べ替えるだけの仕事だったというのですよ。でも別に元気で戦争が終わったら帰ってきましたが、全く勉強をしない師範学校生徒だったので、それから小学校の先生になる自信がないとか色々なことがありました。そしていよいよ８月の15日、終戦ということで、天皇陛下のお言葉、玉音放送があるということでした。なんのこっちゃわかりませんでしたが玉音放送の日が来ました。その前の日に二つの戦死の報せと骨壷が来ました。骨壷は一つでした。一つは来ませんでした。なんと戦死した三男四男の、四男は６月ごろ応召して６月にもう既に亡くなったのですが、三男はその前の年に死んでいたのに、二人の死の報せが終戦の前の日に届きました。そして新潟の新津というところでは「門牌」というものを立てます。人の背丈ぐらいの立て札を立てます。そこに「何々何々夫何歳」と書いて、そして近寄れないように枠を作ります。それが二つ立ちました、終戦の日に。私は、うろうろしていました。母は別な所に疎開していますから来れません。車なんかもないわけですし、列車もろくに走っていない時でした。そして玉音放送が始まる時には、お隣の家に立派なラジオがあっ

たのでそこに20人ぐらいの人が集まって、天皇の声を聞いてほとんどの人がそこに泣き崩れました。私は小学１年生でしたから、なんのことか分からずに母もいないし、父もいません。おじたちも一人もいません。ぐるぐる回って時間の来るのを過ごしていて、そしていよいよ納骨でお墓に行きました。お墓に行って骨壷が一つ届いていました。もう一つの骨壷は来ていません。いよいよ納骨になって骨壷を開けたら、中から出てきたのは黒い石ころでした。ころっと一つ、骨じゃないのです。石ころでした。そして祖母はその石ころをお墓に埋めるのが耐えられなくて、もう石ころを取って頬ずりしたり、舐めたり抱いたり、もう和尚さんがもうやめなさい、もうおしまいと言ってもその石ころを抱きしめて、自分の四男の骨と思って抱きしめて離さなかった、それがもう忘れられません。そして祖母はお墓を建てるときに、どのお墓も全部同じ方向を向いて建っているのに、自分の家のお墓だけは自分の家の方を見るように建てました。だから今私お墓参りに行くと、たくさんあるお墓の中で向きがおかしな一つを探せば、それが祖母が建てたお墓なのです。変な方を向いてしかも高々と建っています。だから自分の家を自分の子どもたちが見ているというふうな気持ちになったのだと思います。

そのように戦争の体験も話せばきりが無いほどありますが、私はおじたちが、おじといったって少年の続きみたいな青年たちでしたが、おじというとおじさんみたいだけど、そうじゃなくて若い人たちでした。その人たちが何歳で亡くなったのだろうかということを知る為に戸籍謄本を、まだ長男の奥さんが生きているので、取り寄せてもらって見ました。皆20代半ば、あるいは20になったばかりに死にました。それでその時はなんだおじさんが死んだのだ位に思っていました、小学生ですから。でも祖母の年になってきたとき、祖母の年を越えてきたとき、３年ぐらいの間で３人も息子が死んで、４人息子がいるうち３人が戦争でわけが分からない死に方をして、どこで死んだかも骨もないような死に方をしました。今一人の息子を交通事故で失ったりしても、あれだけテレビなんかで悲しむ親の姿を見て、祖母が３年間で本当に少年みたいな息子を、３人失ってしまったその心中ってどうだったのだろうかと思ってそのことがすごく気になりました。それで知っている人を訪ねますが、祖母の年令の人はほとんど生きていません。それで知る限りの人に聞いたら、三男はオリンピックに出たいといってスポーツに励んでいたというのですよ。でもオリンピックは実際行われなかったのですが、スポーツ青年だった。四男は国鉄に勤めて、お母さんを日本中に案内したいというのが夢だったというのです。それで祖母はずっと「三橋美智也」の「夕焼けとんび」というレコードをかけて息子を偲んでいたのですね。

本当にその心の中はどうであったか、これはこれからの私の課題であり、その３人の戦死した子ども達を思っている祖母がどう生きたかというのが全ての私のまとめの中のこれからの課題として残っています。

以上が私の戦時体験ですが、もっと語りたいことがいっぱいあるのですが、また書くことによって伝えていきたいなと思います。どうも聞いていただいてありがとうございました。

ひとつ、ごめんなさい、千人針ね。私寅年なので、寅年の人は千人針で忙しかったのです。寅は千里を駆けて千里を帰ってくる、どこまで行っても千里を帰ってくるというので寅年の人は千人針を作りました。母も寅年、おばも寅年なのでいつもさらしの布がたくさん来ました。そこに自分の年だけ赤い糸で丸を作ってこれを巻いて行ったのだけれど、こんなものなんにも効きませんでした、巻いていった人たちは死にました。千人針というのがあったことを憶えていていただきたいと思います。

3　平成28年度小金井平和の日記念行事講演

十四歳の特攻兵

村瀬　杜詩夫（80歳代　男性）

❊ アプローチ（序論）

本日の私の演題は「十四歳の特攻兵」です。年配の方はお判りでしょうが、若い方にはわからないかもしれませんね。第二次世界大戦が終わって七十一年になります。七十歳の方はまだ生まれていませんし、八十歳の方も小学一年生ぐらいでしたから判らなくて当然です。特攻兵というのは特別攻撃隊員ということで、飛行機や小型潜水艦に爆弾を積んで敵艦に体当たりする攻撃法で、もちろん操縦している人は必ず死にます。目的は違いますが、現代世界を恐怖に陥れている自爆テロと、方法においては酷似しています。

❊ 学徒動員令

太平洋戦争（第二次世界大戦）のはじめは日本軍は真珠湾奇襲、マレー半島上陸などと優勢でしたが半年程経つと連合軍の総反撃が始まりました。当時私は小学五年生でしたが、今でもはっきり覚えていることがあります。それは連合艦隊司令長官・山本五十六元帥の搭乗機がソロモン群島のブーゲンビル島上空で撃墜されたことです。日本海軍の英雄の戦死は子供心にも不吉な影を落しました。

こうした戦局に呼応するように学徒動員令が公布されました。これは大学生や中学生を軍需工場や兵士として動員するという法令です。

このとき私は旧制中学一年に進学していましたが正規の授業は少なく、退役軍人の配属将校による軍事訓練が中心でした。

入学から三ケ月後に私たちは学徒動員令により、当時東洋一の規模と言われた豊川海軍工廠へ動員されました。私の配属先は光学部で、作業は軍艦に装着する測距儀の最終点検で、北海道大学の学生と一緒でした。

❊ 通信訓練を拝命

ところが、配属して一週間ほど経った朝、突然母校の校長室へ呼ばれました。

校長室には長剣を吊るした配属将校が陪席しており、只ならぬ雰囲気でした。

校長は重々しい口調で、「先月末、軍令部より愛知県下の中学から通信指導者の養成訓練に代表一名を派遣するようにとの通達があった。実は清水中尉ともご相談して君を推薦しておいたら、昨日正式決定があった。おめでとう」

❊ 父母の反応

家に帰った私は、父と母に通信訓練生に選ばれた経緯を報告しました。

父は「学校の代表で海員養成所へ行くのか。海軍工廠に動員されるより良いじゃないか。海兵（海軍兵学校）の受験に有利になるかも知れんぞ」と言った。だが、母は黙っていた。

当時、貧しい家の子弟は志があっても月謝の要る上の学校へは行けないので、陸幼（陸軍幼年学校）や陸士（陸軍士官学校）、海兵へ進む人が多かった。

我が家では次兄の武が陸幼から陸士へ進み、現在は関東軍騎兵隊の中隊長を務めていました。しかし長兄弘は、お話するのをためらうような悲しい道を歩いてしまいました。弘兄は兄弟の中でもズバ抜けた秀才で、家庭教師のアルバイトをしながら浜松中学を卒業し、海兵を目指していました。その頃、海兵へ入るのは東大より難しいと言われていましたが、学校をはじめ誰もが兄の合格に太鼓判をおしていました。……しかし、兄は合格しませんでした。学科はダントツでしたが、体格検査でひっかかったのです。兄はアルバイトの無理がたたって肺結核にかかっていたのです。

家に帰った弘兄は、一か月後、睡眠薬の誤飲で亡くなりました。しかし、後になって母が私だけに見せてくれた紙片には、兄の文字で「母さん、ごめんなさい。あの世で孝行するからね」と書いてありました。兄は自殺したのです。

※ 高浜海員養成所へ

申し遅れましたが、校長から代表決定の話をされた際に、赤い紙の出頭命令を受け取っていました。当時は、一般兵士の召集令状は赤い紙に印刷してあったので「アカガミ」と呼ばれていました。それを見た母は、「なんだか戦争に行くみたいだネ」と悲しい表情を見せていました。父は、「それを見せれば電車賃はタダだ。良かったじゃないか」…と。

高浜海員養成所は、愛知県知多湾の衣ヶ浦に面していました。生徒は殆んど戦線に出ているらしく、所内には我々と同年輩の子供と教官だけでした。

宿舎は木造の細長い部屋で、一室が十名。夜は、柱にハンモックを吊って眠りました。「おい、まるで軍艦の中みたいじゃないか」はしゃいで騒いだのも一日だけ、翌日からは激しい訓練が待っていました。

まず、最初が次のような五省の暗記です。

五省（せい）
一、至誠に悖（もと）るなかりしか
二、言行に恥ずるなかりしか
三、気力に欠くるなかりしか
四、努力に憾（うら）みなかりしか
五、無精に亘（わた）るなかりしか

私は海兵受験を目指していた兄の部屋にあったものを毎日見ていたので、覚えました。（実物を見せる）

そのせいか、私は班長に選ばれました。

通信訓練は、モールス信号、手旗信号、手まね信号（ジェスチャー）の三つでした。モールスと手旗は中学の教練でも習っていましたが、実戦用の信号は全く違っていました。

特にモールスは最初からやり直しです。中学ではイの・—は伊東（いとう）、ロの・—・—は路上歩行（ろじょうほこう）、ハの—・・・はハーモニカのように言葉に直して覚えていましたが、実戦では却ってこれが邪魔になり。「それを忘れろ！ツートンの音を聞いて直ぐに言葉が浮かぶようにするんだ!!」……できなかったり遅れたりすると海軍精神注入棒がお尻にとんできます。これは太い樫（かし）の木で作ってあり、後で聞いたのですが、太いほうが怪我（けが）をしないんだそうです。

手旗信号は片仮名を手の形で表した信号で、このようにやります。（イロハを実演する）

手まね信号は砲煙弾雨の中ではどなっても聞こえないので、ジェスチャーで知らせるのです。（上甲板火災（じょうかんばんかさい）、消火器もってこいを実演）

※ ある日、突然！

全員が必死で取り組んだおかげで、通信訓練は二ケ月で終わりました。

そんなある日、皆が講堂に集められました。「おい、いよいよ卒業だぞ」「やっと豊川へ帰れるかな」皆がガヤガヤ騒いでいると壇上に海軍の制服を着た所長が現れました。

「諸君、おめでとう。これから大切な知らせをする。諸君は本日をもって通信訓練の課程を無事終了した。本日から、……通信訓練生から特別攻撃隊員に昇格する。細（こま）かいことは、特攻隊長から説明する。

代わって登壇した隊長は現役の軍人らしく、制服に大尉（だいい）の肩章（けんしょう）をつけていた。（海軍で

は大尉をダイイと読む）

「諸君、おめでとう。細かいことは訓練のとき話すが、今日は重要なことを一つだけ話す。しっかり聞いて必ず守るように…。この特攻隊作戦は、軍事上の重大な機密だ。従って、この件に関しては先生方や友人は勿論、親、兄弟といえども絶対に口外してはいけない。これだけは、絶対に守ってくれ。」

隊長の真剣な表情と話しぶりで、ザワついていた講堂が忽ちシーンと静まり返りました。

※ 軍国少年

特攻隊員がどんな役目かは、私も判っていました。しかし私は、死ぬということを少しも怖(こわ)いとは思いませんでした。小学生の頃から、軍國少年として育てられたからです。その教育法はいろいろありますが…例えば小学生の頃は「戦死すれば靖国神社の櫻に生まれかわれる」と言われましたし、中学時代は「戦死すれば神様になれる。そして靖国神社に祀(まつ)られ、かしこくも天皇陛下がお参りしてくださる」など。また養成所に入ってからは「人間は百万長者でも貴族でも、必ず死ぬんだ。どうせ死ぬんなら野タレ死するより、戦死して神様になるほうがいいぞ」とか「赤穂(あこう)四十七士は敵(かたき)の吉良(きら)上野介(こうずけのすけ)を討って主君の恨みを晴らしたが全員が切腹をさせられた。その代わり忠臣の鑑(かがみ)として三百年以上の後(のち)の現代まで、物語や芝居で褒(ほ)め称(たた)えられている」など言わば死の美学を散々教え込まれてきました。だから、その時代の私は戦死が怖(こわ)いどころか、誇らしく思う軍國少年になっていたのです。

※ 特攻訓練の実態

まず最初は索敵(さくてき)（敵を探す）訓練

例えば敵の潜水艦を見つける訓練では、大きな板上に潜望鏡に見立てた黒い棒を薄暮(はくぼ)の海に流し、それを岸から凝視して「敵潜水艦発見！東南方百メートル！」などと叫ぶ。その距離が間違っていると、「バカ！三十メートル違っているぞ、体当りしても無駄だ!!」とどやされる。こんな訓練を必死に続けているうちに、ほとんど全員が遠視になってしまった。

※ 上陸用舟艇への体当り

当時の米軍が敵前上陸で使った舟は四十人乗り程度だった。それに爆弾を積んだ小舟で体当りする。大人が乗ると沈んでしまうようなエンジン付きの小舟の舳先(へさき)に二十キロ程度の爆弾を積んで突進する。敵船に近づいて自分が撃たれたら失敗するので、近づいたら舵(かじ)を固定し、自分が死んでも敵船が爆発するように訓練された。

敵戦車をタコ壺(つぼ)で待つ

戦車には通常二つの銃が装備されているが、その威力は遠方の目標には大砲のような威力を発揮する。しかし砲身を低く下げられないので近い目標は射撃できない。対戦車攻撃では、この弱点を狙って近距離まで引き付けてから攻撃する。海岸に人が隠れられる程の穴（我々はタコ壺と呼んでいた）を掘り、その中に枯草で偽装(ぎそう)をした鉄兜(てつかぶと)をかぶって潜(ひそ)む。

そして、相手が砲を下げさせられない死角に近づいたのを見届け、穴から飛び出してキャタピラー（戦車の車輪に巻いた鉄の回転ベルトの下に飛び込む。このタイミングが、なかなか難しい。爆弾を胸に抱いて俯(うつむ)きに飛び込むと自分の体が邪魔をして爆発力が弱まる。だから、飛び込む瞬間に体をクルリとひるがえして、爆弾が体の上にくるようにする。これが完全に出来るまで何回も練習するのだが、その度に自分の体の上で炸裂(さくれつ)する爆弾のイメージが浮かび、さすがに余り気分の良い訓練ではなかったです。

※ 少年特攻隊は、なぜ生まれたか？

軍の上層部は、米軍が途方もない作戦を考えているらしいとは薄々(うすうす)感じていたようだ

が、原子爆弾の開発に成功していたとは思い至らなかったようです。当時の上層部がいちばん警戒していたのは、東京に上陸され、皇居が攻撃され、最悪の場合は占領でもされたら…と思っていたのではないでしょうか。その場合は、真珠湾の苦い経験から、東京湾内には直接入らず、京浜海岸と千葉県九十九里浜に上陸して、両方から東京を挟み撃ちするのではと考えていたようです。

ところが精鋭部隊は前線に出払っていたり玉砕してしまって、東京を守る戦力が無かった。そこで、一か八かの戦術として、上陸する舟艇と戦車に子供を使った玉砕戦法を考えたようです。

※ 私が敢(あえ)て恥しい話をした理由

実は、今まで話したことは、私が初めて口にしたものです。私は結果的に騙(だま)されて少年特攻隊にされたのですが、当時の私には全く騙されたという気持ちはありませんでした。

それどころか、前にもお話ししたように、特攻隊に選ばれたことを誇りに思い、死ぬことに喜びさえ感じる軍國少年だったのです。だから、そんな自分が恥ずかしくて、一言も口にしなかったのです。この私を変えた二人の人がいます。一人は鶴見俊輔先生、もう一人は友人の川澄哲夫君です。

お二人については、時間がないので省略しますが、私は本日の話をドキュメンタリーとして執筆中ですので、そこでは詳しく紹介させていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

恐怖の日々を生きのびて

永井　孝子（80歳代　女性）

色々と学生さんのお話とか、講師の方のお話をお聞きしましたけれども、私の話すことはなくなってしまったかもわかりませんけれど、お手元にメモをお持ちでいらっしゃいますか？プリントはありますか？短歌にちなんで肉付けしてまいりますので、拙い話ですけど。

私は昭和16年12月８日、太平洋戦争が始まった時は小学校３年でした。本当でしたら小金井の小学校を卒業したかったのですけれども、戦時中…前からお医者様が少なくなりまして、男の方は皆あちこちに行ってしまわれて、小金井には女性のお医者様が残っていらっしゃるくらいだったんですね。それで、父が、私が小学校５年になるときに、男の人がいなかったらお医者様がいなくて後が大変になってしまうから、これは内緒だけれど、将来医者を目指して、学校を転校して東京の学校を受けるようにしたらよいのではないかという風な言い方で、５年生の時に武蔵野の小学校に転校してしまいました。そうしましたら戦争の初めは大変穏やかで、ただ戦争と聞いただけでも全然わからなかったのですけれども、町はちょうちん行列とか旗行列で、旗行列は昼間ですけれど、ちょうちん行列は夜になりますと、ちょうちんを持ってみんなお祭り騒ぎで、おめでとう、おめでとう、とやるんですね。そんな状態だったものですから、戦争なんて怖くないわと思っていましたところ、それがだんだん戦争が激しくなってまいりまして、私は武蔵野に転校したころからは、先ほどの方のお話にもありましたように、私どもは、通信とか手旗信号、全部学校でやりました。そして授業の合間には剣術とか竹やりですね。そういった物もやりました。だんだん情勢がおかしいなと思いながらも電車通学をしておりました。そうしましたら勝ち戦が、途中でいろいろと嫌な話に段々だんだん、変わってきたのです。そうしまして昭和19年になりましてからは、本土空襲ですね。いままでは本土以外の各地で戦争が多かったのですが、そちらの方は勝ち戦でやっていたのですね。それが今度はだんだん本土に近づいて、本土空襲になるかもしれないというような話が来ました。そして小学校６年

生の半ば過ぎからは段々だんだん不安が高まってきまして、そして11月24日だと思ったのですけれども、その日は東京が空襲になりまして、その時私は６年生の２学期の終りに近い方ですけれども、学校で警戒警報が鳴ったのです。そうしましたら学校は一斉に下校させました。でも私の場合は電車通学ですから、電車に乗って帰るのは、普通よりも時間がかかりますので、一応電車に乗ったことは乗ったのですけれども、途中で降ろされまして、窓から飛び降りて逃げたのです。そして避難するところを見つけましたら、近くの人がここにお入りなさいと呼んでくださいましたので、防空壕に入れさせていただきました。そこに小学生が３人仲間がいました。そして大人の人が２人、５人で入ったのですけれども、一生懸命もぐって避難している間に、ものすごい音がしまして、近くに爆弾が落ちたのだそうです。そうしましたら防空壕は屋根が全部崩れてしまって、私どもは泥まみれになったのですけれども、その時に中にいた男の方が３人小学生を抱き込んでくれまして全員にかぶさって、落ちた泥を取ってくれたのですね。本当だったら、ここで生き埋めになってしまうんではないか、と思ったくらいに泥んこだったのです。で、助けていただいて、サイレンが鳴って、今度は空襲警報が解除されたときにお別れすることになったのですが、何も聞くことも出来なく、ただお礼を言うだけでお別れしまして、その後はどうなったのかも聞くどころではなかったんですけれども、そんなことがありましたので、その次からはサイレンが鳴って下校になると、電車に乗る気がなくなりました。怖くって。そして吉祥寺の学校ですから、学校から道路をまっすぐに来れば家にたどり着くというふうに言われておりましたので、電車に乗らないで、走るか歩くかどっちか、足を頼りに家に帰った方が心配ないだろうと思いまして、今度は警戒警報のときに、直ぐ道路に飛び出して歩いて帰ったのです。防空頭巾を頭にかぶって、ここに救急袋を下げまして、救急袋の中には、非常食で、お米を煎ったり、豆を煎ったり、それから乾燥芋とかそういう非常食、火を使わないですぐにかじって食べられるようなものを入れて、常に持って歩いておりまして、それを抱えて帰った途中で、今度はまた爆撃があったのです。そうしましたら三鷹はいま基督教大学がありますけれど、あの辺りに中嶋飛行機製作所というのがありまして、そこを狙った反れ弾があちこちに落ちたらしいのですけれども、私が走って帰るときに、ものすごい音が、その辺にボカンボカンとすごいんですね。そして逃げまどっているうちに、隠れる所がないので、飛び込んだところが下水だったのです。水は少なかったのですけれども、下水にとびこみまして、そして入ったところがずっと道路に沿って下水がずっと長く続いていましたから、かなり家の近くまで来ることができたのですけれども、それはもう見事にみんなやられました。そしてまた、度々空襲はありましたから、ある時はいま武蔵野市役所になっているあの辺りにも避難したんですけど、思い出してもどこがどうだか全然もう訳が分かりません。逃げまどってあちこちもぐりこんで、そして防空壕探しが大変なんですね。あそこに行けば防空壕があるよと教えていただいたので、そこへ行こうとしたところでまた爆弾が落ちました。あとで、教えてもらいましたその防空壕は全滅だったそうです。ですからなんども死ぬ寸前までいったところで助かったものですから、これから先どうなるのか本当にもうどうしたらいいのかわからなかったのですけれども、最初の警戒警報で避難するだけのときには心に余裕がありましたので、ここに俳句にも書いてありますけれども、これは小学校６年の時の始めのあたりの空襲のあまりひどくないときの、こおろぎの鳴き声が胸にしみまして、「蟀の　啼く音がいやす　壕の中」このとおりなんですけれども、本当に慰められました。これで力をもらいまして、また次の日を過ごすことができたんですけれども。ちょっと前後しますけれども、ここに「おさげ髪　頭巾につつみひたすらに　戦勝祈り壕に　明け暮る」このとおりなんです。もう単純ですから、戦後のはなしでこれ小学校６年の時ですから、本当に単純で、読んでいただいて、そのとおりでお分かりになっていただけると思いますけれども、これは本当

に、むかし、おかっぱさんって言ったんですけれども、おかっぱさんで、防空頭巾に頭を包んで、壕の中に入ってただみんなでお祈りしていました。それは、東京大空襲を前後にしてちょうど、むかし高等小学校って言ったんですけれども、今で言う中学ですね。女性の場合は中学って言わなくて、高等女学校って言ったんですけれども、高等女学校に入学が決まった後の東京大空襲だったものですから、その前後はすごい空襲で逃げてばかりおりました。そして、下水道が少しは防空壕の役をするということが分かったものですからそれからは、ちょっと頻繁に、何も入る所がないと下水を目当てにもぐっておりましたんで、どろんこぐしゃぐしゃだったんです。

それから今度は高等女学校に入りましたら、私も憧れて入ったんですけれども、その前は都内の学校に入る予定でいたんですが、吉祥寺でもそのとおりですから、今度は東京に近い方だったらもっと怖いということで、近い武蔵野の都立の高校に入りました。そしたらそこは、またこぼれ弾がいっぱい周りに落ちました。それで、高等女学校って言ったらすごくワクワクして、興味深々で入ったんですけども、とんでもなくて、本当に、「学び舎は　かりそめの名か戦傍　明日をも知れぬ　友と伏せ居り」本当に毎日、授業といいますと、農耕という授業になってましてね、勉強の時間が農耕になっているんです。それでグラウンドは全部畑になってしまってそこに、お芋とかトウモロコシとか、菜っ葉とかそういう色んなものを蒔いて、それで自給自足のようにすることで、授業が潰れてしまってるんですね。それで勤労奉仕がありまして、農耕するにも肥料がありませんので、今のようなトイレじゃなくて昔は汲み取りトイレでしたから、そこから桶に入れまして担いで撒くんです。でも物のない頃で、桶を繋いであって担ぐところが、縄が、途中で切れてしまいまして、もう水浴びというどころか肥し浴びになっちゃったんですね。本当に今だと笑い話になるんですけど、洗うといっても石鹸は無くて、それでもう石鹸は物を燃やした後の灰を利用して使うんです。雑用してくださる方のところに行くと燃やしたカスがあるので、そこからいただいて、肥しをかぶったものを洗いました。体もちょっとそれで拭いたりしたんですけども、家に帰っても匂いが落ちませんでした。ものすごいひどい目にあったことがあるんですけども、そして学校で畑をして、授業の合間には空襲が来ますから、小学校と違って警戒警報が鳴っても家に帰らせていただけませんから、空襲の時は、学校の裏の防空壕に入るということで、それで防空壕といっても、ただ穴を掘ってあるだけで、屋根がなくて、防空壕に入って空を見るとB29の編隊がダーっと頭の上を飛んでいくというような状態の防空壕だったんです。そこに忍んでおりましても、なかなか空襲が解除されませんし、学校の上のあたりがB29のコースだったと思うんですけども、通る度にその上を見上げて、編隊の通り過ぎるのを見てるっていうのは非常に辛かったです。それで近くは、攻撃を受けなかったんですけど、武蔵野女子学院の中に爆弾が落ちた時は、ものすごい、ちょっと離れているんですけども、すごかったですね。それで、女子学院もかなり損害があったみたいですけれども、その後そこで亡くなった方もいらっしゃると聞きましたけれども、私どももその現場の方に友達と一緒にお参りに行ったのを覚えております。そして、４月には高等女学校に入学はしたんですけれど、入学しても本当にもう勉強していいものか何をしていいのかさっぱり分からなくて、ここに書いてありますように「あくる日も　来る日も敵機おそい来て　一人二人と　友は逝きけり」だんだんそういったような感じになってしまいました。そして、友が居なくなって 「かなしみを　分かち合うすべ今はなく　慰め言も　泪交うのみ」本当に慰めても全然もう、自分の方が泣いてしまうし、相手も泣いてしまうし、もうお話になりませんでした。もう本当に女学校の１、２年と言いますと、感情が高ぶるときもかなりありますし、ですから、本当に何と言っても、もうどうしようもなかったんです。そして先ほど小学生中学生の方から色々お気持ちをお聞きしまして、戦争というものはどんなものか分からないとおっしゃりました

けれども、私が体験した年は小学校６年から中学校１年にかけての時でしたので、ちょうど何かダブってしまって感無量でした。

最初は、吉祥寺までは空襲がひどかったですけど、武蔵境あたりはもう大丈夫だなと思ってましたら、そうでもなかったですよ。それで小金井の方はもっと東京から離れているから、小金井だったら大丈夫だと思っていたんですけれども、ちょうど私の家の裏は小金井公園になるんですが、今の小金井公園のちょうど真上ぐらいがB29のコースのときもありました。そしてそこをB29が編隊を組んで東の方へ、ですからそこのコースを通って三鷹の方から、中島飛行機製作所の方に爆撃に行ったらしいですけれども、それで小金井公園の上の方を通るときにそこに爆弾がいくつも落ちました。それでちょうど私の家の墓が裏にあったんですけれども、そのすぐ近くに落ちました時にお墓が全部埋まってしまって、それで引っ越したのを覚えております。ですから小金井公園と言っても昔は大緑地帯なんて言ったんですけど、そこにいくつも落ちたっていうのは、みんなご存じなくて、お花見とかお月見とか色々と四季の行事に見えていらっしゃると思うんですけれども、それで最後の方の短歌にあるんですが、「忘られし　戦火の跡に咲きし花　哀しき思い　知らぬ如くに」本当にもう桜が満開の時にその下に何があったか、そこは弾の跡の上に桜が植わっているのにそんなことは花は知らないという気持ちで、わたしは詠んだんですけれども、この短歌を作るにつきましても、これは小学校二年のときに、昔は、奉安殿というのがありまして、朝礼の時に先生が和歌の朗読をなさるんですね。その時に、２年生の時に謳って下さった丸山先生とおっしゃる先生がものすごい美声で、それで和歌が何とも言えなくこう重みがありまして、すっかりもう熱中してしまいました。それで先生に、あんまり素晴らしいのでお話ししましたら、「あらそんなに興味があるんだったら教えてあげるわよ」とおっしゃって、それからもう先生にご指導いただきながら、短歌作りと俳句作りに夢中になっちゃったんです。そして、物を倹約するという時代だったものですから、俳句とか短歌に残しておけば、ノートのページもあまり要りませんでしょ、ですから俳句とか短歌、特に倹約ができるんで、こうして刻んでいったんですけれども、それで、その書いてあった短歌によってポツリポツリと思い出すというようなことを長らくやってまいりました。それで、高等女学校の時には友達は本当にゆっくりする間もなく慌ただしく過ぎてしまったんですけれども、その後で同窓会とか同期会をやるについても、なかなかまとまりませんで、しばらく経ってからそういうのがあって皆集まることが出来ました。そうしましたら、やっぱり昔の思い出話ばかりだったです。

先ほどお話なさった方の、特攻隊志願ということがございましたけれども、私が後に結婚しました相手は、やっぱり特攻隊志願兵で出撃してまして、11月に特攻兵として出動するんだったらしいんですけど、終戦になってしまったので、志が果たせなかったんですね。それで、特攻隊に行って、日本を救いたいなんて言ったら大事だからそんなことは言わないけれどもと言ってましたけども、でも本当に、今で言う中学生のときに出征したんだそうです。そうしまして、霞ヶ浦の、予科練の航空隊があったんですね。そこに入隊しまして、そしてあちこち配属されて、点々として動いていたらしいんですけれども、その特攻隊にいたときに渡り歩いたところ、それが、戦後、みんな仲間の、戦友の集まる所として、また供養の場として、全国に置かれました。そして私も、そこの戦友会に、参じていただいたんですけれども、ここに後ろの方にあると思いますが、敗戦が昭和20年の８月15日だったんですけれども、敗戦というか終戦といいますか、私どもは敗戦と言われました。「敗戦と知りつ　平和のめぐり来て　安らけき日々　夢かうつつや」これは本当に電灯が灯火管制といいまして、暗い電気のもとで食事をしたり勉強をしたりとしてたんですけれども、それが無くなったことによって、これで良かったのかな、本当なのかなというような不安も感じましたけど、それから今度は結婚しまして、子供が出来てから、小金井

公園に遊びに連れて行ったんですね。正月に。そうしましたら、みんな凧揚げをしていまして、その凧揚げを見てもやっぱり、何か全部絡んでしまうんですね。頭の中が。それで「けんか凧　からみて切れて落つるごと　人のきずなの　哀れにも似て」その凧が絡んで、ケンカしてるんじゃないですけど、絡んでしまうのを見ても、戦争と絡み合って、ああこれはいけないなというふうに感じました。ですから何にでもそうして引用してしまったんですね。もう忘れることはなかったんですが、言いたくないことがありましたから、そうですねえ、60ぐらいまでは、あまり人様には話しませんでしたけれども、だんだん年を重ねて来ますと、先が短いですから、これも風化しちゃいけないなと思いまして、書き溜めてあるのを全部整理なんかしたんですけども、今こうして話せるようになりましたが、一時はもうそれに触れたくない、その場所を通りたくない、そんなふうに思いました。でも今はそれが肥しとなって、強い生き方も覚えましたし、命あるかぎり頑張っていこうというような気にもなりましたので、まだまだ頑張ります。そして若い方のお気持ちがいまもう本当によくわかりましたので、こういう方たちがいらっしゃるから、もうこれからは大丈夫だと何かほっとしました。ですからこれからぜひ、それを皆さんに伝えていただいて本当に平和を愛する人になっていただきたいと思います。みなさんは学校でも、色々とそういう繋がりを持って、話し合うときもあるんでしょうけど、戦争というのは、想像しているよりも、それどころじゃありません。すごいです。私の家の近く、みなさんご存じだと思いますけれども、いまの小金井公園の入り口の前に陣屋橋というのがあるんですけど、陣屋橋の西の方に170～180メートルくらいいったところに爆弾が落ちたことがあります。そのときに空襲があんまりひどいので、うちの母が自転車で私を吉祥寺まで迎えにくるということで、出そうと思ったところで父が止めたんだそうです。そうしまして思い留まって避難しているところに爆弾が落ちて、ですから時間的には父が止めなかったらちょうどそのあたりにいっていたらしいんですね。それを聞いたときに本当に足がすくみました。それでそれだけ親が心配してくれているんだから、私も頑張らなきゃとは思いましたけれども、でも親のすすめで転校して、そのためにそういう経験もしたし、色々な思いで複雑だったんですけど、もう今となってはその思い出をしたためるか、皆さんにお話しするか、それしかございませんけどれも、本当に想像する以上のものがあります。ですから、どうぞこれからもこの平和を守っていただいて、お友達同士でもきずなを強く持ってください。そしてあなたたちが大人になったときに、本当にいい世の中だと言われるような国にしていただきたいと思います。お願いします。私も皆さんの前で話すのはこれが最後だと思いますけれども、日記は小学校１年から書いてますが、いま手を怪我してしまって何も書けなくなってしまいました。ですから左で書いているんですけど思うように書けませんで、今日も皆さんに話す原稿を書きたかったんですけれども、とてもそんなこと出来ないものですから、とりとめのない話で申し訳なかったですが、この短歌から連想していただいて、当時の様子を思い出していただければ有難いと思います。思い出すなんて言ってごめんなさい。何もご存じない方が多いですから。でもその雰囲気に浸っていただくことはできるかと思います。ですからそういう思いを二度としないように、世の中を若い方の力で、お願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

【参考：短歌集（永井　孝子作）】

蟋蟀（こおろぎ）の　啼（な）く音（ね）がいやす　壕（ごう）の中　　昭和十九年

学び舎（や）は　かりそめの名か戦傍（いくさばた）　明日（あす）をも知れぬ　友と伏せ居り　　昭和二十年五月

あくる日も　来る日も敵機おそい来て　一人二人と　友は逝きけり　昭和二十年七月

けんか凧　からみて切れて落つるごと　人のきずなの　哀れにも似て　昭和三十年
（戦争とかけて詠む）

かなしみを　分かち合うすべ今はなく　慰め言も　泪交うのみ　昭和二十年
（空襲で家族を亡くした友へ）

零戦に　命託して　果つる日を　夢にえがきて　いくさ終りぬ　昭和六十年
（夫の心境を想う）

おさげ髪　頭巾につつみひたすら（唯一途）に　戦勝祈り壕に　明け暮る　昭和二十年三月
（東京大空襲の後に詠む）

地下壕に　友と肩寄せ過ぎし日々　今なつかしく　文をひもとく　平成三年
（小学生の頃から書きためた詩、短歌、日記に思い出が甦える）

忘られし　戦火の跡に咲きし花　哀しき思い　知らぬ如くに
（現在は小金井公園として何事もなかったように・・・）

乱れゆく　世相の移り感じつつ　変りなき日の　忙しさに暮る

何気なく　聞き居りしロシヤ民謡も　陰に悲しむ遺族ありしと（高校在学中にて）

亡き戦友を　しのぶ集いの　筑波路は　居並ぶがごと　彼岸花紅し
（夫の戦友慰霊祭に参加して）

若鷲の　命燃やせし丹波市　思い出草は　今も茂りて
（戦時中夫が入隊していた兵舎は現在も天理市に在り面影をとどめている）

この地こそ　敵機は来ぬと思いしに　命からがら逃げまどう　日々　昭和二十年三月（小六）

敗戦と知りつ　平和のめぐり来て　安らけき日々　夢かうつつや　戦後間もなく（高女一）

4　平成29年度小金井平和の日記念行事講演

被爆体験記

川崎　利秋（90歳代　男性）

熊本の陸軍予備士官学校に入校しましたが、卒業を目前にして、怪我のため広島の自宅に帰って療養することになりました。

広島に帰ってからは「療養」ですから、毎日のんびりと過ごしていました。私は男ばかりの三人兄弟です。原爆当日の朝八時十五分頃は、真ん中の弟は何時もならば、その時間帯には百％安全な工場で仕事についている時間でした。養子にやっていたものですから、当日、休暇をとって広島県の三次（みよし）というところにある養家に、遊びに行くということで出掛けたところでした。原爆が投下された時間帯には、原爆投下の真下に近い地点で広島駅行きの電車を待っていたのです。

私はその時刻、暑いものですからメリヤスのパンツ一丁で、その下に＜越中褌＞をしめて、下の弟と並んで寝そべっていました。私が原爆が投下された時のショックで覚えているのは、「何か光ったためにびっくりした。」ということだけで、音の記憶は全くありません。瞬間的に顔を上げた時、屋根瓦の一角が吹き飛んで、真っ赤な火の玉が浮いていた……という記憶が鮮烈に残っています。一体、何がおこったのかサッパリ分からない。壁やガラスは吹き飛んで、家の中は砂塵がもうもう。その中を弟と夢中で玄関先に飛び出しました。軒先で弟と顔を見合わせたところ、弟が驚いた表情で「お兄さん。どうしたの。」というのです。弟の体は埃を被っていましたが異常ありませんでした。ひょいと自分を見たら＜全身血だるま＞になっていました。隣の家に遊びに行っていた母が、その家から飛び出してきました。母は埃を被っただけでしたので、私の体を見てびっくりして、「とにかくお医者さんに行かなければ。」ということで、私の手をとって近所のお医者さんに連れっていってくれました。お医者さんもやられているわけですから、どうしようもありません。それで、また手をとってもらって帰ってきたんですが、帰る途中で町内の親切な人が、「こりゃー川崎さん大変だ。盥に水をはってあげるから、先ず体を洗いなさい。それから薬を付けたら。」といわれ、私は盥にはってもらった水で体を洗いました。

母は先に家に帰りましたが、家の中は大変な惨状で、何とか衣類を引き出して、私の帰りを待っていたようです。

私は自宅まで帰って、母の顔を見たとたん失神してしまいました。思い返すと原爆投下時、私は総ガラスの雨戸に平行に寝ていたんですね。その雨戸に直角に爆風が当たり、ガラスの破片群がパアーッと室内に吹き込んできたのです。私が立ち上がった時に、ガラスの破片群が私の全身に当たったのです。弟はガラス戸に近い場所に寝ていたのですが、かすり傷一つしていません。それは弟が起き上がる前に、ガラスの破片群が通過したからです。ところが私が寝ていたところに、物凄い大きなガラスの破片が突き刺さっていました。よくよく考えたら、小さいガラスの破片は、軽いから先に飛び、重いガラス片は遅れて飛んできたということです。一寸タイミングがずれていたら、重いガラスに頸動脈でも切られ、出血多量で死んでいたかもしれません。それとは反対にタイミング次第で、かすり傷一つ負わずに、外に逃げ出していたかも知れません。たまたま、その傷が私の命を救うきっかけになりました。後でメリヤスのパンツに開いた穴を数えたら、百以上ありましたから、全身では数百箇所になるだろうと思います。まだ二十歳位の若い体ですから、小さいガラスの破片が体に当たっても、おそらく、みんな跳ね返したようですね。傷口を洗う時、足の膝の内側が変だ…と思って傷口を見ると、光っているものが見えました。ガラスの破片が刺さっていたのでした。これをピンセットを借りて引っ張り出しました。その

後、ガラスの破片が体から出てきたことがありませんので、ガラスが刺さったのは其処だけだったようです。全身の小さい傷から、血が相当量流れ出ていたものですから、貧血状態だったのでしょう。母の顔を見たとたん気が緩んで気を失って倒れてしまったのだ…と思います。それからが大騒ぎになりました。たまたま、近所に赤十字のお医者がおられまして、注射器を持っておられたので、カンフル剤を注射してくださいました。ところが、注射をするのに先生の親指と人差し指の間が裂けており、「力が入れられないので、刺すだけ刺すから、後は弟さんあんたが液だけ入れて。」といわれ、弟が注射器を押したらしいんです。私は失神していたので、全然わかりませんでした。そのようなことで、しばらくして私は息をふきかえしました。

その晩は、家の周囲にあった畠の畝のようなところに布（きれ）を敷いて寝転んで過ごしました。

すぐ、近くまで全焼してしまったのですが、幸いにも私の家は屋根の一角、壁、雨戸などが吹っ飛んだりしましたが、なんとか残りました。骨組みもしっかりしていましたので、ある程度のスペースは、雨が降っても大丈夫でした。母と弟が家の中の一室を整理し、なんとか仮眠できる状態にしてくれました。その時、気が付いたのですが、洗濯物で白いものは焼けないで残っていたのです。黒いものは一瞬に火がついて燃えてしまったようです。

朝出かけたきりで消息の分からない弟を何とか探さなければ…ということで、私は翌日、体中が痛いのに杖をついて、末の弟と一緒に出掛け、白島町に渡る神田橋のたもとまで辿り着きました。とにかくたくさんの人が道の両側に横たわっていて、死んでいるのか生きているのかわかりません。大変凄惨な光景でした。橋を渡ろうとしたところで、体がついていかないのを悟り、弟探しを諦め、弟と共に家に帰りました。そして七日・八日と心配しながら……。

九日の日に、母が国民学校での炊き出しのお手伝いに行っていましたところ、親切な人が弟の消息を伝えてくれたのです。母は飛んで帰ってきて「和典の収容場所が分かった」という。「半ば諦めていた弟が生きている。」というので、傷だらけの体を忘れて飛び起きて、水筒に水を入れ、末の弟と二人で、収容されている場所泉邸（当時、浅野の泉邸といわれていました。今は縮景園という公園になっています）に駆けつけました。私の家から其処までは十分位かかりましたかね。行ってみたら、収容場所には火傷で体も顔も膨れ上がって、見分けがつかない状態で、沢山の人が所狭しと並べられていました。広いしどうしようもないので、私は係りの人に聞いてみたのですが、よくわかりません。「声を出して呼んで歩いたらどうですか。」といわれたので、大きな声で弟の名前を呼んで歩いていたら、片隅で反応があったのです。しっかりした声で「あ、お兄さん、僕此処だよ。」というんですね。それで近づいてみたら、焼けただれて顔も腫れあがり、ほとんど被服をまとっていない状態でした。その様子を見たとたん、私は万感胸に迫って涙が出てきて止まりませんでした。付き添ってきた収容所の人達が「貴方がそんなことでは駄目だよ。弟さんを早く介護して家に連れて帰ってやらなけりゃ。」といわれたので、とりあえず喉が渇いているだろうからと思い、水筒の水を飲ませました。沢山飲ますといかんので一寸飲ましてから、救護所の人達に応急の処置をしてもらいました。其処へ近所の人たちが担架を持ってきてくださいました。

弟は体が大きい男でした。当時、修道中学校四年生でした。担架にのせ私が先棒を担ぎ、何も傷ついていない元気な近所の男の方が二人で、後棒を交替で担いでくれたらしいです。私は先棒を一人担いで（傷だらけの体で横たわっていただけに『気力というものは恐ろしいものだ』とつくづく思いました）家まで運びました。その間に母が一室を綺麗に整理して、布団を敷いてくれていました。其処へ弟を寝かしました。火傷にはジャガイモ

を潰したのを塗り付けると良いというんですね。何処にそういうものがあったのか知りませんが、ジャガイモを潰したのを一生懸命、顔や全身に塗り付けた記憶だけが残っています。近所の赤十字のお医者さんにとりあえず診てもらいましたら、「此れは大変だな。とりあえず一生懸命介護しましょう。」といわれ、「なにかあったら言ってください。」ということでした。私と母が両側について団扇であおいでやっていたんですが、弟は、はっきりと自分が被ばくした時の状況を逐一話してくれました。口調もしっかりしていました。「僕は八丁堀でショックを受けて跳ね飛ばされ、瞬間気を失ったが、そのうち気が付いて、それからずっと家をめざして川沿いに逃げた。何処かの川で火勢に追われて水に飛び込んだ。その晩は川岸で過ごした。翌朝、家をめざして帰ってきたんだが、結局、力尽きて焼け電車の中で一晩寝た。」ということでした。「焼け電車の中で寝ているところを、今の救護所へ収容された。」というところまで話してくれました。「僕は此処まで生き延びたんだから、絶対に死なないよ。」とはっきり言っていました。一通り話をしたら、突然しゃべらなくなり、昏睡状態に陥りました。それで一晩、私と母は寝ないで団扇で、あおいで看護したのですが、ずーっとそういう状態が翌日の二時か三時頃まで続きました。昏睡状態が続くので、お医者さんに診てもらいましたら、「これはもう諦めた方がよろしいのではないか。」という言い方をされました。ところが、ある瞬間、突然大きな声で歌を歌いだしたんです。それは田端義夫のヒット曲なんですね。たしか「母」ものだったと記憶しています。当時、弟は田端義夫ばりの美声といわれていました。つづいて今度は、弟にせがまれて私が教えた石川啄木の歌を歌いだしたんですね。それを歌い終わったら、急に、もがきだして手で顔を引っ掻こうとするんですね。それで慌てて母と私とで両手を押えました。どういう訳で当日持って行かなかったのか分かりませんが、弟が愛用していた〈日の丸〉の扇子が手元にあったんですね。その扇子を開いて「おい見えるか。」といって見せて、「此れであおいであげるから。」といったら、腫れあがって閉じたままの目尻から、一条の涙がスーッと流れ落ちたんですね。扇ぎつづけているうちに段々とおとなしくなり、ピクりとも動かなくなりました。すぐ、下の弟にお医者さんに連絡してもらい、診てもらいました。「ご臨終です。」といわれ、間もなく二、三度大きな呼吸をしてから絶息しました。

弟の遺体は、近所の公園に焼却用の穴が沢山掘られていて、其処へ持って行って自分達の手で焼かなければなりません。そのために、重油の配給がありました。体を拭くといっても火傷の体ですから、どうしょうもないんですが、一応綺麗にして、探し出した浴衣を着せ、担架に乗せて公園の横穴まで運んで行きました。燃えそうな木等を沢山積みあげ、分けてもらった重油をかけ、私の手で火を点けました。うまく焼けないので二回位つけなおしましたかね、それでなんとか骨になってくれたので、その骨を母と弟とで拾ったわけです。

私が東京に出てきたのは昭和二十七年二月です。その後紹介を受け、母と弟と共に大仁温泉近くの医者に、「自家輸血」の治療を毎月一回、一年間受けた故か、症状が何も出ないで今日に至っています。

私は、原爆の症状が出ないものですから、原爆被爆者であるという意識が非常に乏しかったことと、生来のんきなものですから、なんのためらいもなく家内と結婚しました。家内自身はそういうことを知っていたものですから、子供が生まれてくるのが心配だったようですが、結局三人の子宝にめぐまれました。どの子も全く異状が見受けられず、今ではそれぞれ結婚しています。生まれてきた孫も異状がありませんので、ほっと致してる次第です。

私は、小金井市企画の「平和の旅」という催しに、被爆五十周年の前年、家内と一緒に参加させて戴きました。

初めて原爆の式典に参加、誠に感慨深いものがありました。たまたま、そういう企画に参加させていただく前に、伯父の跡を継いだ次男から、「四人（向こうの父親と長男と次女、私の弟）合同の五十回忌をやろう。」という呼び掛けがあり、七月三十日に法要を済ませました。

一旦広島から帰ってきて、あらためて八月五日・六日の小金井市の企画に参加。再び広島に行って参りました。そのことで「何か一つの区切り」がついたような気が致しております。

私の父は終戦の翌年の九月三十日に、満州から引き揚げ（葫芦島から博多に上陸）てきました。胃潰蕩の療養中、無理をして引き揚げてきたのでしょう、博多に上陸と同時に吐血し、そのまま友人宅で療養していました。私の所に父の本籍地の役場を経て連絡がきましたので、母と私と弟と叔母（父の実妹）と四人で、九州の友人宅へ参りましたところ、私達が着く三時間前に父は死んでいました。最後迄「子供達に会いたい。」といっていたようです。友人宅で葬儀を行い、茶毘にふしました。持ち帰った遺骨は、父の出生地の高田郡の八千代市の墓におさめました。

母は三十年位前に亡くなりました。もう一人の弟も二十七年くらい前に亡くなり、いずれも私が骨を拾いました。私一人で家族全員の骨を拾うはめになりました。私は今年九十三歳ですが、幸いに健康体で暮らさせて戴いています。これは家族四人の寿命を引き継いで、少しでも世のため、人のために尽くせということなのかなあ…と思いつつ、いろんな関わりの会で、お手伝いさせていただいているような現況です。

5　平成30年度小金井平和の日記念行事講演

東京大空襲の傷跡

中重　喜代子（80歳代　女性）

1．はじめに

３月10日。この日我が家では東京大空襲で亡くなった夫の両親と末の弟の命日を迎えます。この空襲を私自身は体験していないのですが、家族にとって忘れることのできない祈りの日です。

２人の娘が小学生の頃、毎年３月10日が近くなると「お家の人に戦争の話を聞いていらっしゃい」という宿題が出ました。ノートと鉛筆を持って父親のところへ聞きに行くのですが、夫は沈黙したままで何も語ってはくれません。この時、涙を浮かべてじっと黙っていた父親の姿を娘は覚えていると言います。仕方なく私が、「あなたのおじいさんと、おばあさんと、小さかった叔父さんは、大きな空襲で街中が火事になった時、逃げ遅れて、煙にかこまれて死んでしまったの」、「パパと伯母ちゃんたちは一生懸命走って逃げたので助かったのよ」などと話して聞かせるのですが、毎年この宿題が出る時期は気が重かったものです。

2．夫の家族と東京大空襲

1945年（昭和20年）３月10日、この時夫は中学３年生で15歳、江東区の、当時深川と呼ばれていた街に住んでいました。本所・深川はこの空襲が最も烈しかった所です。周囲に火が迫った時、父親に「体力のある３人は、それぞれの判断で逃げてくれ」と言われた。これが父親からの最後の言葉だったそうです。大津波の時に言われた“てんでんこ”ですね。２人の姉と夫の３人は風向きを見ながら走り、焼け落ちる橋に道を阻まれたり、川にとび込んで火の粉を消したりしながら逃げのびて、それぞれに月島の叔母の家に着くこと

ができたのだそうです。

両親は、数え年５歳の弟を連れて逃げ遅れ命を落としました。避難が遅れたのは隣組長としての責任があったから、とか、麻疹が治ったばかりの弟を夜風の中に連れ出すことにためらいがあったから、とか聞いていますが、何れにしても幼な子を連れての行動は思うに任せなかったことでしょう。父親が51歳、母親が46歳でした。

生きのびることのできた夫と二人の姉は近日疎開する予定になっていた群馬県の親戚の許に身を寄せることになるのですが、この時夫のすぐ下の弟は小学校（当時は国民学校）４年生で新潟県に学童疎開していました。幸に戦災から逃れることができて命拾いしたのですが、最も心に深い傷を負ったのがこの弟だったのです。

３．会話をしなくなった弟

東京大空襲から終戦、そして戦後の苦しい時代を経てようやく生活も落ち着いてきた昭和31年、私たちは結婚してこの小金井に家庭を持ちました。１年後に親代りだった上の姉と弟も呼び寄せ、私共には子供も生まれて、皆で暮らすようになりました。弟は家族とほとんど会話をせず、声をかければ短い言葉が返ってくるという同居生活で、毎日の食事もいつしか自分の部屋に運んで食べ、食器を洗って返してくる、というようになっていました。学校は普通に卒業したものの友人との付き合いもなく、仕事はアルバイト程度のようでした。

ある時、群馬の従弟が訪ねて来て話してくれたことがあります。東京大空襲の直後、上の姉と２人で弟を新潟の疎開先まで迎えに行ってくれたのがこの人で、その時の話をしてくれたのです。

「子供たちはね、大勢が宿舎の窓にへばりつくようにしてじっと見ているんだ。迎えに来るのが誰なのか、と。むこうから歩いて来るのが親ではない、とわかった時、瞬間に“親は死んだのだ”と悟るんだよ。この子はその時から口をきかない子になってしまってね…」と。

そうだったのか。私はこの話が心から離れませんでした。

学童集団疎開というのは、小学校単位で３年生から６年生までを対象に行われたものですから、深川区の平久小学校であればほとんどの家庭がこの空襲で被災したものと思われます。父母の迎えを受けた子は少なかったのではないでしょうか。

群馬の疎開先では、姉弟で協力し合って何とか生計を立てて行ったものの、上の姉はまだ24歳です。弟の親代わりとしてはあまりに負担が重かったろうと思います。弟が心に負った深い傷は癒されることなく、その後の人生を生きることになったのでした。

これに追い打ちをかけたのが28歳の兄の戦死の知らせでした。兄が帰って来てくれたら、と皆でどんなに待ち望んでいたことでしょう。でもこの時代は、このような体験をした家族は沢山いたわけですね。300万人余りの人が戦争で亡くなり、その１人ひとりが、かけがえのない人だったのですから。

４．弟の失踪

この弟が75歳で亡くなるまでのことをかいつまんでお話しますと、家族との関係を取り持ってくれていた姉が、弟40歳の時に亡くなりました。姉が亡くなる前に「住み込みで働きに行くことにしたから」と言って姉を安心させたそうですが、その後その気配もなく十数年が経ちました。仕事をしているのかどうかも解からないのですが、社会に迷惑をかけている様子もないので、共に暮らしていればまずは安心、と思っていたところ、或る日、家族が誰も気付かぬ間に部屋を引き払い、行き先も告げずに居なくなってしまいました。たとえ会話が一方的なものであっても、毎日姿を見ていれば安心感があったのですが、そ

れからは、どうしているのだろうかと絶えず気がかりでした。

私が電車の中で偶然に出会って言葉をかけたのは、平成６年に夫が亡くなって少し経った頃のことでした。夫のことを話し、「お線香あげに来て。」と言うと黙ってうなづき、武蔵境で降りて行きました。あれが弟と出会った最後です。弟が50代終わりの頃でしょうか。こざっぱりした身なりでした。ほど近い所に暮らしているらしいこともわかり、どなたか親切な方のお世話になって生きているのであればよいが…と祈るような思いでした。

５．弟の最期

また十数年が経ちました。武蔵野警察署から死亡の連絡を受けたのは平成22年７月末のことです。弟は75歳になっており、福祉事務所のお世話で一間のアパートに住み、医療も受けていたのですが、最後は誰にも看取られず自室で亡くなり、数日経ってから発見されたのです。検案書には、死因：虚血性心疾患、死亡に影響を及ぼしたもの：熱中症、と記されていました。

行方知れずになってから20年あまり経て、ようやく帰って来た弟を荼毘に付し、父母兄弟が眠る小平霊園に納めたことで、我が家の戦後に一つの区切りがついたのでした。この時の日記帳を繰ってみたら、お骨を家に持ち帰った日のページに、「帰って来てくれてありがとう」と書かれていました。

ホームレスとなってどこかで命を落としていたかもしれない弟が、最後は生活保護のおかげでそれなりの生活を維持することができ、兄弟姉妹の中で一番長生きをさせていただきました。この間、いろいろな方に援助していただいたであろうことを思い、深く感謝すると共に、平和の時代の有難さをしみじみと感じております。

終戦直後、あの疎開地で、窓に張りつくようにして、ひたすら親を待ち続けていた子供たちは、その後どんな人生を生きたことでしょうか。最後まで誰も迎えに来なかった子も居たことでしょうが、どう処遇されたのでしょう。孤児を引き取る施設も数少なく、ほとんど機能していない時代でした。また、最後の一人までお世話をされた先生方はどんなご苦労をされたことでしょう。弟の人生に思いを馳せる時、いろいろな思いが広がってゆきます。

６．おわりに

東京大空襲の話といえば、一夜に10万人が亡くなったとか、家を失った人が何十万人いてどの地域に被害が大きかったか、などの事実を知識として持っている方は多いことでしょうが、生き残った人たちの心に刻まれた傷跡に思いを馳せることはあまりなく過ぎてきたように思います。

戦後の復興の時代を生きて来た私たちは、少しでも良い暮らしを、と追い求めているうちに、暗い時代のことをいつしか置き忘れて来てしまったのではないでしょうか。去る８月、マスコミが取り上げた戦争孤児の話は、遠い記憶を呼び覚ましてくれました。朝日新聞が戦争の特集記事の中で浮浪児の体験談を載せ、次いでNHKスペシャル「“駅の子”の闘い～語り始めた戦争孤児～」が放映されました。ご記憶の方もあると思います。終戦直後、上野駅の地下道や上野公園には大勢の浮浪児たちが物乞いをして暮らしていたのです。飢えや寒さで弱い子から次々と命を落としていきました。「本当にたくさん死んでいったんですよ、子どもが」と、生き残った一人は語っています。研究者の聞き取り調査によって今、ようやく口を開いたもと孤児たちは、これまで妻や夫、子供にも浮浪児であったことを話したことがなかったと言います。

私どもの当時10歳だった弟も、学童疎開をせずに深川に残っていたら、親と共に逃げまどううちにはぐれて、上野の浮浪児になっていたかも知れません。おとなしい性格でした

から、食べ物をあさることも、盗むこともできず、生き残れなかったことでしょう。ここには、苦しみを語ることもできずに死んで行った子供たちが大勢いたのです。

当時の厚生省の調査によると、昭和23年、沖縄県を除いた全国の戦争孤児の総数は12万人余り。このうち約６％の7100人が浮浪児の経験があるとされていますが、それ以上の調査は見当たらないようです。

生き残ることのできた方々には、是非勇気を出してあの時代の貴重な体験を語っていただきたいと思います。それを私たちは後の世まで語り継いで行きましょう。戦争というものが、どんなに弱い者の心や体を容赦なく傷つけるものであるかを、実感できる形で伝えてゆくことが、今こそ、私たちに求められていると思っております。

平和行事参加の旅
参加者による
感想文

1　平成29年度小金井平和の日記念行事発表作品

平和行事参加の旅

岩田　結（30歳代　女性）

私は以前、広島に行ったことがあるのですが、他にも行きたいところがあってゆっくり見ることができなかったので、もう一度行きたいと思い、この旅に参加しました。

広島駅に着き、最初に向かったのは爆心地。T字の形が珍しい相生橋を目標に落とされた原爆は、風に流されて市街地の上空600mで爆発しました。

当時からある建物（原爆ドーム、レストハウス）を見て、広島市はモダンでにぎわっていたのでは、と思っていました。それが一瞬で焼け野原になった事を想像し、言葉を失いました。

写真を見たり、話をきくだけでもつらく悲しい事であり、原爆の力をまのあたりにした方々の苦しみは、想像することができません。

そしてその苦しみは今もなお、世代を超えた人々の心と体をむしばんでいるとわかり、原爆は本当に恐ろしいものだと感じました。

そのような中で、海外から広島への支援が思いの外手厚かったことも知り、驚きました。

広島に家を建てたアメリカ人のシュモー氏や、親を失った子供と私的に養子縁組を結び、養育資金を送る「精神養子運動」など、さまざまな救いの手が差し伸べられていたことに心が温まりました。

そして翌日の式典では、始まる前から色々な方が祈りを捧げていましたが、８時15分になり、80ヶ国もの人々が一斉に平和を願う様子を見て、どこの国も思いは一緒なのだと実感しました。

核兵器は使われた国だけでなく周辺の国、使った国にも悪い影響を及ぼします。

国同士が武力以外の手段で信頼を築いていける、平和な世界にしたいと強く思いました。

平和と安全

片倉　健太郎（50歳代　男性）

広島から戻って核への意識が高まると核兵器や原子力に対する感覚が敏感になったようです。ヒバクには被曝と被爆の単語が使われていて、どちらも「ひばく」と読みますが、意味は違い、曝（さら）されるという字の「被曝」は放射線を受け浴びるという意味で、爆発の字を使う「被爆」は原爆など爆撃によって被害を受けることを表

すと知りました。

平和記念資料館では大勢の子供や若者達や外国人の方々と共に被爆の悲惨さを見聞させていただきました。被爆体験を伝承者のお話で聴くことができ、展示パネル・ビデオ・遺品等を通して核兵器使用は人の道を外れ、人間にはできない、正当性の欠片もない事だと改めて感じました。

そして被爆者の捜索救助に広島に入り被爆された方々の壮絶な闘病体験を通して気付かせていただいたのは、私が今まで核兵器と原発を別々に捉えていたことです。原子力の平和利用としての原発の安全性確保は被曝作業されている労働者の方々により維持されていて、その被曝により肉体的・精神的に作業員の方々の命を蝕んでいること。そして実際に原発事故が起きていることを決して忘れてはならないと思います。

現在、核弾頭ミサイルが日本上空を飛び交う恐れがあり、今後も核兵器がある限り、邪悪な権力者・指導者により、いつ使用されるかわかりません。それでも希望を持てるのは広島の惨状を知ったことで不殺生を訴えるようになったという元朝鮮戦争従軍兵だったアメリカの平和学者の存在です。彼のように暴力容認から一転して非暴力運動に身を投じ平和に貢献されている人々は人類の希望ではないでしょうか。

被爆者の皆さんの願いの実現に一歩近づいたと言える今年７月７日の国連での核兵器禁止条約採択という世界平和の大潮流の中で、核廃絶と同時進行で反戦・非暴力社会を求め、世界中の人々と力を合わせて安全で平和な社会を実現してゆくことができると信じています。

あるニュージーランドの平和学者は、一般市民であってもその場所で平和のために貢献できると言っています。日頃から家庭や職場で誠実に穏やかに生活するように心掛けることが平和を保つことになり、平和は築かれるとして、教育・福祉制度・文化交流等が持続可能な平和な未来を築く大きな要素になると語っています。私も身近な平和を守り、育み、信じ、人や環境への貢献に取り組んでいきたいと思います。

核兵器のない世界

片倉　雅子（50歳代　女性）

昨年、広島を訪問したオバマ前アメリカ大統領が訴え続けてきたのが「核兵器のない世界」です。

今回、平和行事参加の旅で感じたのは「核兵器のない世界」実現のため命懸けで叫び続けてきてくださったのが被爆体験の語り部の方々であり、伝承者の皆さん方であるという事です。

同行して下さった職員の方の奨めで原爆死没者慰霊式と平和記念式の前日に寺前妙子さんの被爆体験の伝承者としてご自身の被爆体験も交えて語られている胤森久子さんの講話を聴く機会に恵まれました。

核兵器による実に恐ろしい惨禍の生々しい様子を想像いたしました。また式当日の小学生による「平和への誓い」も印象に残りました。「当時小学生だった語り部の方

は『亡くなった母と姉を見ても、涙が出なかった』と語ります。感情までも奪われた人がいたのです。」との部分に涙が溢れ出ました。

広島の街で、けたたましい蝉時雨の中、快晴の夏空を仰ぎ見るように真っ直ぐと立つヒマワリの花の姿を見かけた時、核抑止論や核肯定論の中、平和への強い信念を胸に被爆体験を語り続けていらっしゃる語り部や伝承者の方々の毅然とした生き方と重なりました。

被爆者の皆さんの願いが実を結んだその一つとして今年７月に「核兵器禁止条約」が採択されました。微力ではありますが、私もヒマワリがたくさんの種を実らせるように、戦争の悲惨さ、命の大切さ、核兵器の違法性を次の世代に伝えていきたいと思います。

２　平成30年度小金井平和の日記念行事発表作品

平和行事参加の旅

上杉　友美（40歳代　女性）

日本人として一度は訪れたい、訪れなければいけないと思っていた広島に今回初めて娘と一緒に訪れることができました。今年は災害レベルの暑さと言われた猛暑の続く中ではありましたが、念願の広島に娘をつれて母娘旅ができ、大変有意義な２日間となりました。

１日目、平和記念公園に行きました。資料館での様々な展示物や被爆伝承者の方の講話を実際にこの目で見たり聴いたりして、原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さを痛感しました。現地には世界各国のあらゆる人種や世代の方々が熱心に見学している姿がとても印象的で、私は日本人でありながらこの年になってやっと訪れる事ができたというのに、こんなに多くの海外からの旅行者が限られた日程のなかでこの地を選んで訪れている事に驚きました。唯一の被爆国である日本は、原爆の悲惨さを世界へ発信し続け、後世に伝えていく使命があるのだと改めて強く感じました。

２日目の平和記念式典では、小学生の平和の誓いが大変素晴らしく心に強く響き感銘を受けると同時に自分が恥ずかしくなりました。広島では多くの子供たちが小さなころから平和教育に触れ学び考える機会を多く与えられているからだと思いますが、広島だけでなくもっともっと多くの若い世代に平和教育が広がれば良いと思いました。被爆者の平均年齢が82歳を超え高齢になっている今、私たちそして次の世代に、被爆者の思いや戦争の悲惨さ、そして平和の尊さをしっかりと継承していくことが大切だと思います。

この２日間平和の旅に参加して、娘なりに何か感じてくれたであろう姿を見て、無理にでも娘を誘って本当に良かったです。このような機会を与えてくださった小金井市に深く感謝したいと思うのと同時に、今後も是非多くの方に参加していただき平和について考えるきっかけを作っていただきたいと切に願います。ありがとうございま

した。

広島原爆ドームを訪れて

上杉　月乃（10歳代　女性）

これまでも、教科書やニュースでは広島への原爆投下があったということを知っていましたが、今回母のすすめもあり、小金井市主催の「平和事業参加の旅」を通して、初めてその場に訪れることとなりました。

まず、一日目には原爆ドーム、記念資料館へ行きました。その当時の建物がそのまま残っているということ、ここに原爆が落ちたのだということを思うと不思議な感じがしました。資料館には、被爆当時の悲惨さを物語る遺品の数々や写真などが展示されてあり、原爆の恐ろしさを改めて感じさせるものばかりでした。これらを見て、二度とあってはならないことだと痛感しました。

二日目は、平和記念式典に参加しました。原爆が投下された時間、八時十五分に被爆者の亡くなられた方々へ、黙祷しました。原爆で亡くなられた方々の苦しかった思いに対して、どれだけ辛かっただろうと思いました。

原爆はとても恐ろしいもので、何万人の人を一瞬で殺してしまうという事実は、これからもずっと伝えていかなければならないものだと思いました。

ヒロシマ再訪---53年の空白を経て

T.S.（60歳代　男性）

原爆ドームや元安川の方から吹いてくる涼しげな風が頬をなでる。現在、８月６日午前７時55分。73年前の原爆投下時刻まであと、20分余り。

「とうとう来てしまった。ここに・・・」。時期が時期だけに、感慨も一入（ひとしお）だ。

平和記念公園に設けられた「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式（略称＝平和記念式典)」会場に着席した。テントの幔幕の外にもかかわらず、日差しはさほど強くない。

大きな木立ちで太陽が遮られているからだ。蝉の声も数多く聞こえる。典型的な、日本の夏模様がここにある。連日の炎暑猛暑のせいか、広島は小金井より暑い。式典が終了する午前９時ごろまで、このままの涼しさと日陰が続いてほしい、と祈る。

昭和40年７月26日。今から約53年前。高校２年生の時、修学旅行で広島を訪れた。午後から広島入りし、翌朝早くには次の目的地に向かう強行日程だった。平和公園を訪れ、広島平和記念資料館本館を見学したかどうか。今となっては記憶が定かではな

い。でも確かに、この地に来ている。

ただ、今回訪問した資料館東館は53年前にはなかった。当時は、本館だけが存在していた。式典前日の８月５日午後、東館で現地関係者に質問して分かったことだ。

修学旅行に参加した高校生達がガリ版（謄写版）印刷で創った、手作りのガイドブックが今、手元にある。その小冊子には広島を解説するくだりとして次のような文章が載っている。

「その爆心地が現在の平和公園であり、特に原爆ドームはその当時の恐ろしい様子を見ることが出来る。この平和公園には世界の平和を祈る数々の記念碑がある」。

この文章を読む限り、「核兵器廃絶」「唯一の被爆国」「世界平和の追究」といった強い問題意識は感じられない。この原稿を書いた高校生は、広島から遥か離れた東京に住む、普通のごく平凡な、心優しい青年だったのだろう。

再訪はこの修学旅行以来のことだ。「16歳」の時からことし９月に迎える「古希（満70歳）」まで、思えばほんの一瞬だったような感覚しかない。あっという間に半世紀以上が過ぎてしまった。この間、この国も、この街も、自分自身も大きく変容を遂げている。

平和公園には、多くの記念碑や慰霊碑、それに資料館などがあった。見学の目玉となった資料館東館（本館は改修中で入館不可）では、国内外からの多くの入館者とともに、貴重な原爆関連資料や展示を見て回った。ボランティアによる「被爆体験伝承講話」も資料館東館の地下にある会議室で、約１時間にわたって傾聴した。

今回見聞した被爆関連情報は半世紀以上前に広島を訪れた時と比べて、質、量ともに格段の差がある。このような印象を持った。

記念式典には約５万人が参加した。午前８時に始まり、死没者名簿奉納、献花と続き、運命の午前８時15分に全員による黙祷と平和の鐘が鳴らされた。引き続き、平和宣言、小学生による「平和への誓い」、安倍総理、広島県知事、国連事務総長の挨拶があった。

式典の最後に、出席者全員で合唱した「ひろしま平和の歌」は昭和22年の制作だが、古さを感じさせない。清らかな楽曲だった。

８時50分ごろから出席者による献花が始まり、小金井からの参加者も全員が献花を済ませた。

１泊２日の「平和行事参加の旅」の全期間を通じて、「戦後の平和な日本の原点がここ、広島にある。それも平和公園にある」と強く感じた。イスラム教徒は一生に一度、聖地メッカの巡礼を目指す、という。この倣いではないが、日本人なら一生に一度は原爆被災地の広島か長崎を訪れ、「これらの地で何が起きたのか」を目の当たりにし、この現実を五感で汲み取ってほしい。

今回の広島再訪で、「もはや戦争は断固として、起こさないと」いう「不戦の誓い」を改めて噛み締めた。余命があと何年あるかわからないが、今後もこの言葉を胸に秘めて暮らしていくだろう。私の真夏の「鎮魂の旅」はこれで終わった。でもまた、始まるかもしれない。

「平和行事参加の旅」に参加して

佐藤　百合子（60歳代　女性）

８月５日、小金井市役所の広報秘書課広聴係の企画である「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式、平和行事参加の旅」に参加するため、朝、６時15分に武蔵小金井駅に集合した。新幹線に乗り、午後12時半ごろに広島駅に着いた。その日は平和記念資料館や原爆ドームなどを見学し、次の日、朝早く慰霊式の式場へ向かった。帰りは、14時15分の新幹線に乗った。

今回、私は暑さに弱く、最初は参加する気はなかったが、夫に言われてなんとか参加することにした。広島は本当に暑く、駅に降りた途端くらくらしてしまった。アークホテルは駅から近かったようだが、ボーっと最後からみんなについていった。市の職員の方々も気を使ってくださり、ゆっくり歩いてくださったようだったが、私は参加しなければよかったと思った。

しかし、広島に来てしまったからには、何とかしないといけないと思い、思い切って職員の畑野さんと後藤さんに、私一人だけ後から行くから、集まるところは平和記念資料館にしてもらえないかとお願いした。畑野さんと後藤さんは快く承諾してくださり、私は一人ホテルに残って、休んでいた。そして、１時過ぎにタクシーを使って平和記念資料館にまでたどり着いた。休んだこともあって、私の体の調子もよくなり、暑さに対しても少し慣れてきた様であった。

４時15分から、原爆体験者の話を伝える会に全員で参加した。実際に話を聞くのは、経験者ではないにしても、話が非常にうまく、感動した。DVDも流したので、余計、身近に感じた。私は、初めて広島に来たが、やはり来てみてよかったと思った。一度は来なければいけないと思っていたが、このような機会がなければ来ることができず、本当に良かったと思う。

帰りも私は一人でタクシーを使い、途中で原爆ドームを見た。このようなものが戦後70年経っても残っていることに、今更ながら驚いた。そして当時の原爆がいかにひどいものであったかを、改めて思った。

次の日、原爆死没者慰霊式及び平和祈念式が朝８時から行われ、広島市議会議長、広島市長の平和宣言が行われた。広島市長は、ICANのノーベル賞受賞や、核兵器禁止条約の批准に日本が加わっていないことなどを挙げられ、唯一の被爆国である日本の政治的行動が世界全体の非核に対応していないことを指していると思われた。私は、小金井市が非核平和都市宣言を行っていることを考え、改めて平和について考え、行動していかなければならないと思った。最後に「ひろしま平和の歌」を全員で歌ったが、70年前に作られた歌とは思えない、素晴らしい歌であった。

今回、暑さに弱い私ではあったが、一人の行動を許していただいたことによって、体調がそれほど悪くならず、この旅に参加して非常に有意義に感じた。参加していた皆さんや企画していただいた小金井市役所の方々に心からの感謝を申し上げたい。

語り継ぐことの大切さ

真弓　幹子（40歳代　女性）

夏休みに息子と２人、小金井が募集する「広島平和行事参加の旅」に参加した。広島の原爆遺構を巡りながら、毎年８月６日に平和公園で開催される平和記念式典に参加するというものである。

息子はまだ小学４年生だが、戦争、２度にわたる原爆投下という日本が辿った悲惨な歴史に目を向ける契機になればと考え、応募した。

息子には旅にあたり、自分で見聞きしたものを素直に受け止めてもらいたかったこともあり、特に予備知識は与えなかったが、案の定、広島平和記念資料館では見るものすべてが衝撃的だったようだ。きっと息子には、遠い昔に起きた異国の地での出来事のように感じられたことだろう。

しかし、資料館の見学後に拝聴した被爆体験伝承者の講話で、息子の表情は一変した。自分と大して歳の変わらない勤労学生の、想像を絶する被爆体験、その後の壮絶な療養生活、そして友人らの死。息をのみ、自分の身と置き換えながらのめり込むように話を聞いていた。旅の２日目の平和記念式典では、暑さも忘れて式の様子に見入っていた。73年前、この広島の地で何が起こったのか一生懸命理解しようとしているように見えた。

帰京後、息子は折に触れて戦争の話題を口にし、都内に点在する戦争関連の資料館に足を運んだり、書籍を探したりするようになった。

私の両親は戦争を知らない。しかし、祖父母は戦争がどのようなものだったのか身を持って経験している。子どもの頃、私は時折、祖母から戦時中の話を聞いた。特に、祖母は当時救護班（隣近所で負傷した人を看護師に代わって応急手当てする）だったこともあり、被弾した人々の様子をポツリポツリと語ってくれた。あまりに凄惨で時には耳を塞ぎたくなることもあったが、「日本が昔どんなに大変だったかを知っておかなければ」とよく言っていた。

ところが、祖母よりも前線をよく知っているはずの祖父が、戦争についての話題を口にしたところは一切見たことがない。

鉄道会社に勤務する祖父は、徴兵ののち、戦地へ赴く兵士とともに日本各地を渡り歩いたのだそうだ。これは母から聞いた。常に死と隣り合わせの日々。爆撃を受け、九死に一生を得たことも１度や２度ではなかったに違いない。

終戦も間近のころ、祖父は広島の駐屯地にいた。ところが、軍の命令により祖父は原爆投下の５日前に広島を離れ、仲間より一足先に東京に赴いたのだそうだ。そして、原爆投下。広島に残る仲間を思い、終戦後すぐに広島に戻ったが、その惨状に呆然と立ち尽くすしかなかったそうだ。

助かった安堵感とひとり生き残った申し訳なさ、やるせなさ。祖父にとっては、戦争は決して過去の話などではなく、思い出すのもつらいことだったのかもしれない。

結局、私は祖父から一度も戦争の話を聞くことなく、祖父は亡くなってしまった。

祖父の死後、母はもっと祖父の話を聞いておきたかったと後悔していた。今はその時の母の気持ちがわかる。体験を語ることは過去の自分と向き合うことでもあり、それがとてもつらい作業であるということは祖父が私たち家族にも口を閉ざしたことからもよくわかる。私たちは、それでも語ろうと勇気を出してくれた人々に敬意を表し、耳を傾け、それを子どもたちに語り継いでいく必要があると、広島平和記念資料館での講話を聴きながら強く感じていた。

自由行動の時間に市街を観光した。7月の西日本豪雨の影響か、夏休みにもかかわらず平和公園以外、広島の街はどことなく閑散としているように見えた。暑さに耐えきれず乗ったタクシーの中で、運転手さんが、豪雨のせいでやはりお客さんは減ってますねえと言っていた。私が何となく黙っていると、

「広島は海と山が迫ってますからねえ、土地がないんですよ。」

と話し始めた。このあたりの土壌は真砂土でサラサラしているため、山林からの土砂崩れが起きやすいこと、でもなかなか砂防できない理由は瀬戸内海に生息する魚介類にあるということだそうだ。語り継がれてきたのだろうか、些か半信半疑ではあった。

「養分がいっぱい含まれた土砂や木が海まで流されることで海が肥えるんです。広島の海で大きく育った旨い牡蠣を皆さんが食べられるのは昔からの広島の人の犠牲があってこそなんですよ。」

広島の犠牲があって、日本は戦争終結の道に一気に進んだ。

「それでも立ち上がる広島の人たちってすごいですね」

と運転手さんに言うと、

「だからカープはここぞって時に強いんでしょうかねえ。」

と、ガハハと笑っていた。

戦争を知る機会が失われつつある今、過去を見つめ、親子で話し合うきっかけを作ってくれたこの夏の旅に感謝している。

広島の旅

真弓　滉暉（9歳　男児）

ぼくは、この夏休みに広島の平和の旅に参加しました。広島には前から行きたいと思っていました。なぜなら、去年学校の先生が夏休みに平和記念式典に参加して色々教えてくれたからです。原爆の事は、お母さんに少しだけ聞いて知っていたけど、どんな爆弾だったのか、全然知りませんでした。

だから、旅の１日目に、資料館に見学に行ったときに色々分かってとてもビックリしたし、広島赤十字病院の治りょうとか、証言がこわくて最後まで見れませんでした。たった一発の爆弾で14万人も人が亡くなったなんて想像できません。そんなにすごい被害だったのに、爆弾の名前が「リトルボーイ」で、とても不思議です。

被爆体験伝承者のはま田千恵先生のお話は、原爆がどんなにこわいかがよく分かっ

て、被爆者は今でもケロイドのあとを気にしていると教えてくれてすごかったです。火傷をした人間は水を飲んだら死んでしまうと言ってビックリしました。水をくださいと言って死んだ人やたて物の下じきで生きたまま焼け死んだ人を考えると、こわくてその時は考えるのをやめてしまいました。原爆ドームは昔のままのこっていてビックリしました。原爆投下の目印だった相生橋も見ました。

旅の２日目は、いよいよ平和記念式典です。すごく暑かったけど、小学生の代表が平和へのちかいを言っていたのがすごい内ようで、ビックリしました。

けん花して、爆心地にも行って、お祈りして、次に広島城へ行きました。ボランティアのおじさんたちが被爆じゅ木のクロガネモチのことを教えてくれました。爆風が当たった側は根っこがなかなかのびないと聞いてビックリしました。広島城も爆心地から近くて爆風で全かいしたと説明に書いてありました。

東京に帰ってから、戦争の事を調べたくなって昭和館とかしょうけい館に行って、本も見ました。原爆の被害の事がよく分かって、多分、広島に行ってなかったら原爆のこともあまり知らないままだったし、戦争中の生活がどんな感じかも分からなかったと思いました。でも、いろいろ調べて戦争や原爆のことは分かったけど、なぜ日本が戦争したかは、ぼくにはよくわからないです。薩長同盟みたいに別の国と仲良くなれるようにできたらいいのにと思いました。

今回の広島の平和の旅は、とても良かったし、勉強になりました。また行きたいです。

小金井市「平和行事」に参加して

A.M.（40歳代　女性）

例年にない猛暑のなか、小金井市の平和行事に参加し、広島市の原爆投下に関わる関連施設を見て回りました。広島平和記念資料館にある被爆資料には、子どもと共に、子どもの父（母）や、子どもの兄弟（姉妹）を見送る父や母、あるいは夫や妻の思いが、ひとつひとつ残っており、被爆された方の悲痛な思いが伝わってきて、涙がこぼれました。

当時、子どもだった被爆者も高齢となり、その平均年齢は八十歳を超えたと聞きます。広島平和記念式典の前日、広島平和記念資料館のメモリアルホールで開かれていた、伝承者による被爆体験講話を拝聴しました。体験者の思いが伝わる大変、心がこもった語り部でした。

広島市には「被爆体験伝承者養成事業」というものがあり、『被爆体験証言の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、それを伝える「被爆体験伝承者」』を養成していることを、後から知りました。

戦後七十三年が経過し、被爆体験を受け継ぐ時間も残り少なくなってきました。広島市の小学校六年生が子どもを代表して広島平和記念式典で、被爆者の体験や思いを伝える伝承者になると言ってくれました。核兵器がもたらした人々の苦しみが、時代

と共に風化していかないよう、子々孫々に伝承し続けられることを願ってやみません。

私自身も祖父母や両親から聞いた戦争体験談を子供たちに話していこうと思います。広島市が発信する平和への願いを、小金井市の「平和行事参加」を通してキャッチできたことは、自分にとって有意義なことでありました。

小金井平和の日

市制施行60周年記念誌

発　行　平成３１年３月１０日
　　小金井市

編　集　小金井市企画財政部広報秘書課広聴係
　　小金井市本町六丁目６番３号
　　☎０４２－３８７－９８１８

古紙を配合しています。